



339
662

孫六著

世渡り秘訣百ヶ條

森田
書房版

生きた富豪術

なるほど草紙

ガンバリズム

(第三世)

始



時 224
26



谷
孫
六
著

世渡り秘訣百ヶ條 (他三編)

森
田
書
房
版



一、本書は、さきに本書房で発行した「世渡り秘訣百ヶ條」他三編を合本としたものであります。

一、この四編は、谷孫六が傑作中の傑作と稱されるもので、諸彦から絶讃を博したもののばかりであります。合本とした所以もここにあります。

一、本著者は検印（印税）の関係上各編毎にその奥付を發行當時のまゝに附しました事を豫め御諒承願ひます。

— 内 容 —

世渡り秘訣百ヶ條……………(第一輯)

△人 心 看 破 の 卷
△モーションの卷

△八 方 固 め の 卷
△あの手この手の卷

生きた富豪術……………(第二輯)

△三 井 發 祥 の 卷
△三 菱 發 祥 の 卷
△安 田 發 祥 の 卷

△住 友 發 祥 の 卷
△大 倉 田 世 の 卷

なるほど草紙……………(第三輯)

△妻 に て 候
△醉 て 如 件
△温 泉 場 小 景
△出ものはれもの
△へぼ將棋四十八手

△金 の 世 の 中
△女 房 同 志
△戀 を す る 頃
△大 一 座 風 景
△あら目出度いな

△歳 晩 風 景
△へそくり秘訣二十七ヶ條

△阿 鬼 齋 句 抄

ガンバリズム

(第四輯)

△四十億の金
△埋もれた寶
△一步お先へ
△富士と琵琶湖
△お手玉ニツ
△空 俄 の 繩
△仕事 探 し
△詰將棋米一俵
△一千万圓の巨利
△借金 の 技巧
△思ひがけぬ儲け
△千兩のかた
△頑張りの家憲
△インチキ蟲
△轉げてる金儲

△黄金の鳥
△箒で掃く白金
△先づ千兩
△天 聲 人 語
△何でも會社
△富半の着眼
△手づる金づる
△彼の相場哲學
△中氣病みの發明
△根 くらべ
△金儲けの穴
△機微を察す
△進化論の價値
△金儲け萬華鏡
△利廻り小唄

世渡り秘訣百ヶ條

世渡り秘訣百ヶ條

谷 孫 六 著

……貧しさに馴れつゝも尙ある時は、千兩ばかり欲しいと思ふ……これは世渡り上手な人の歌ではない。どうも仕方がなくなつた人の鬱憤だ。世辭も愛嬌も追従も、生きねばならぬ事務の一つとして、悲觀なんかしないやうにならなければ世渡りの巧い人にはなれない……人込みを急げば人に突當り……それぞれ、その口の下から、もうこんなことを言つてゐる。

第一條 先づ一生の豫算を樹てよ

人は顔が違ふやうに根性も違つてゐる。短氣、暢氣、見榮坊、やりつ放し、世話好き、物臭さ、お喋舌、無口、慾張り、苦勞性等々、數へ上げれば限りはないが、そのどれでも一生は一生である。どうせさうした根性に生れつゝいたものなら、それを巧みに運用するが宜い、運用は豫算から初まる。幾つまでが學校、幾つまでが修業、幾つから獨立と、豫め年を限つて生きることだ。この豫算が樹たな

いとブラ／＼歩くマラソン競走のやうに決勝點が見つからない。

第二條 人生を五つに區切つて見よ

どんな金持でも貧乏人でも、オギヤーから動脈硬化までには必ず五つの過程を経ることになつてゐる。發生、希望、獨立、處世、奉仕、と云ふ風に育つて行くものだ。これを根性に當嵌めて見ると、町人根性、資本家根性、企業家根性、經營家時代、奉仕時代となる。この順はどうしても免れない。一足飛びに出世をしようとする、いつの間にか、町人根性へ逆戻りをしてしまふ。先づ焦らずに一つつを踏みしめて行け。

第三條 町人根性になり切るな！

赤ん坊でもお乳を呑む時は、片々の乳房を押へて人に飲ませまいとする。町人時代もその通り、人はどうでも自分第一、義理かく、慾かく、人情かくの三角術で、四邊かまはず奮闘するものだが、これが地になつて、一生奮闘ばかりしてしまつては樂ができない。つまりは人と人との世の中だから、同じ町人根性でも、人には興へて置くべきもの、さうすればいつか興へられる何ものかがある。

甘い乳でも吸ひ盡すと血が出ることを知つて置け。

第四條 希望は替へるな眞直に進め

一生懸命働いて、五百圓か千圓ぐらゐの金が溜ると、やたらと食指が動いてならぬものだ、家作にしようか地所買はうか、いつそ株でも買つて倍にして見やうか、と云ふやうな人に限つて資本も子も無くしてしまふものである。こんな場合はいつも最後の目的を一つ睨んで、どんなうまい條件があつても、馴れないものには氣を動かすことでない。やがて獨立の舞臺が近くなると云ふ楽しみがあるのだから、それまでは目を瞑つて働くことだ。

第五條 貧しくも奴隸にはなるな

いよく獨立するとしても、あの人は器用で、重寶だと云はれるやうになると一生を棒に振る。庶務の〇〇はなか／＼氣が利いてゐる、今夜の宴會はあいつに幹事をやらせろなんて云はれるやうになると、この人は一生コキ使はれてしまふのである。それでも食ふだけの一生に満足できるならよからうが、生き甲斐のないバク／＼爺さんになつてしまふなんかは、あまり褒めた話ではない。荷造り人

足でも宜いから、「あれでなければ」と云ふ人になれ。

第六條 仕事の中から興味を探せ

凡そこの人でなければと云はれるやうになるには、興へられた仕事の中から興味を探し出すことだ、人に笑はれるやうな屑屋でも、屑を撰り分けてゐるほうが、何とも云はれぬ興味があると云つて廢められない人がある。果せる哉この男は、日暮里で紙器會社の姉妹工場として立派な屑會社の社長になつた。毎日同じ帳簿をつけてゐるやうな仕事の中にも、いかにして簡便な確なつけ方をしたものと、苦心し初めると面白くなつて來るものである。

第七條 主人の心を知るのも仕事

主人だの社長だのと云ふものは、他人を使ひつけてゐるのだから、可なり猜疑心が強いものだ。だから主人を説得する困難は、智識や辯舌や、膽力だけでも駄目だ、要は「なる程」と合點させる以外には無い。心の中で儲けたいと思つてゐて、表面だけは高尚な名節を尙んでゐるやうな主人の前で、仁義のなんか説かうものなら、表面だけは任用しても、心の中では「つまらん奴だ」くらゐに考へら

れてしまふ。こんな場合の調子をうまく考へることだ。

第八條 暴君を取つて押へるコツ

どんな冷靜な主人でも、時に取つては感情が脱線して「損したつて俺のものだ」と云ふやうな亂暴を云ひ出すことがある。こんな場合は昔から、諷諫、直諫、死諫、と云ふものが用ひられてゐるが、今の世にそんな馬鹿氣たことで相手が反省する筈はない。それに何より一番宜いのが、逆諫と數諫だ。逆諫とは先方の案を逆にして「斯うやれば誤魔化される」とやる。數諫とは「斯うなつた損害を補ふ別の案はどうしませう」とやるのだ。

第九條 主人の機嫌を取るには！

主人が自ら得意になつてゐる場合は、何處までもそれを褒めそやしてやる。また、主人が失意の場合、その點を飽くまで掩滅してしまふ方法を心得て置くことだ。主人が發案したもので得意であるやうなときは、それ以上に理論づけて決心を促すやうにすると、自分の氣持とも妥協ができて案外仕事が進むものである。それに反して疑はしい場合は、同じやうに斷念づける理論を考へてやる

事である。

第十條 親みは一分だけ残して置き

人の氣持になり切つた親切が却つて害になる場合が少なくない。支那の彌子瑕と云ふ男は衛の君に可愛がられてゐたが、ある日畑で桃を食べてゐる所へ君が來られたので「あまり甘味いから」と云つて食べかけの桃を差上げた。君は喜んで「自分が食べるのも忘れて食べさせて呉れる」と云つてゐたが何かのはずみに逆鱗に觸れた時「あいつ俺に食ひかけの桃を食はした」と云つて首にしてしまつた。

第十一條 自分の長所を探し出せ!

今やつてゐる仕事が自分の長所だと考へる前に、もう一度自分を振り返つて見ると全然自分と違つた長所が発見されるものである。それには先づ自分の少年時代を考へて見ることだ。何等の希望もなく、何等の野心もなく、天真爛漫時代の自分は何をしてゐたか、何が得意だつたか、これ即ち天稟の魂の在所である。それを強調して行きさへすれば、持味の長所が自然と現はれて來る。鐵を金に見せやうとするからいろ／＼の儂みが生れるのだ。

第十二條 自分の居場所を擇ぶには

人間は單に缺點のない人格を持つてゐると云ふ丈では世渡りには不十分である。また勤勉努力と云ふことだけでも不十分である。人の居場所と云ふものは、その人に爲し得る確信を持つところの希望を作ることによつて生れる。煙草は人體に害があると云はれながら、政府自身の商賣になつてゐる。だから人の居場所は、自分の判断を人類と仕事との二つに分けて、これは仕事として存在性がある。これは人類の爲めに要求される仕事だと云ふ風に分けて、その満足するものを撰ぶのがよい。

第十三條 大學は就職の門ではない

大學を出さへすれば、一廉の月給取りになれると思つてゐた時代は今から二十年も昔のことである。だからその時分からの教育制度で直ぐに月給が貰へると云ふ譯には行かない。もし月給取りになる希望があるなら、小學校卒業頃から、仕事に對する伏線的な練習をやつて置くことだ。學校出がものになるまでは六年かゝるとよく云はれてゐるが、それは記憶の切り賣りをしやうとする爲めで、それよりも今の世は智慧を買ひたい時代である。

第十四條 得意は身をほろぼす基だ

八

人は得意の爲めに倒れるとは帝大の眞錦教授がよく云はれる。それは得意になり切るとエネルギーを濫費するからで、結局健康を損ねてしまふものである。だから仕事の撰び方は、なるべく氣に入らぬものゝ中から興味を探し出すやうにすればよい。疲れれば休息する。これが唯一の健康法である。もし得意の仕事が與へられたら、なるべくこれを難しく考へて、頃合の調節を計るやうにするのが一番よい方法である。

人心看破の巻

第十五條 嬉しい時に喋舌る低脳兒

世の中が複雑になつて來るに連れて、人の心も複雑になる。だからその人の第一印象だけで、その人の性格を見抜くといふことは却々困難になつて來た。しかし、人の心といふものは、不用意の時に

よく現れるものだから、その全幅を見て取つて置くと大へんに参考になる。「低脳兒嬉しい時によく喋舌り」と川柳にもある通り、心の底に充ち満ちて來る感情を堰き止めることの出來ないのが人間なのである。

第十六條 人の心は字引で探すこと

顔の變ることには人はその性格も違ふものだ、とはよく云はれることだが、世渡り術が上手になつて來ると、ニコ／＼してゐながら怒りつばい人や、軽く受け合つて實行しないやうな人がある。こんな場合は、その人とよく似た顔の人を電車の中でも發見したら、切符の買ひ方、しまひ方、席の取り方等に注意して見てゐると、似通つたところが屹度發見される。それを尺度にしてその人と交際へば大抵間違ひはないものだ。

第十七條 定石の通りに現れる性格

笑つてばかりゐるものに賢明な人は少ないし、笑つたことのない人には虚偽が多いものだ。質問ばかりしてゐるものは頭の足りないものか廻し者と知るがよい。これとてもその人の修養が積んで來る

とさう一概に見ることは出来ないが、性格の根本がはつきり判つて来ると、その行爲も正確にわかつて来る。陰気な人は何時でも不祥の出来ごとを、悪人は何時でも悪を豫想してゐる。また感情を本位としてゐるものは、決して本當のことは云はないものである。

第十八條 見て取るものを見て取れ

金を借りに行つても、就職口を頼みに行つても、先方がニコ／＼してゐたり、愛想がよかつたりする人に限つて、こつちの希望を入れてくれることは絶対にない。却つて先方が愚痴をいつたり、難しい顔をしてゐる時の方が、押して行けば何とかなるものである。これは、既に先方がこつちの頼みを看破して敬遠的な態度に出てゐるものだから、そのどつちでも見て取つたが最後、切り出さずに歸るか、手をかへ品をかへして切り出すことだ。

第十九條 人の悪癖を知つて置く事

第一印象で親しく馴れ／＼しい人は、必ず陰險な心の持主だ。こんな人には常に目の中をじつと見つけて話をするやうにしてゐると、先方の氣持がガラリ變つて来て、絶對な無口になつてしまふもの

である。だから、その時限りの取引なら、利害を判断して、即座に相談を済ましてしまふのもいいが、長い交際をするのだつたら、その悪癖を知り抜いて置いて、常にどこかよい方と妥協して行くやうにするがよい。

第二十條 鐵條網を破壊する爆弾は

常に受身の立場にゐるものが、卓子の上へ兩手を出して揉み手しながらニコ／＼してゐるやうな場合は、常に隙を見せまいとする防禦手段であり、内面的には旺んな闘争心を含んでゐるものだから、かういふ時は、態と話題を別の方に外らしてしまひ、自分の失敗談でもやるのがよい。さうすると、先方の氣持がだん／＼勝誇つて来るから、その隙間へ「時に」と一つ挟んで見ることがだ。先方が心から笑つてしまつたあとに隙が生れる。

第二十一條 宜い所を探して共に語れ

美財を蓄へず、明眸自ら罪ありといふから、美男、美女はあまりよい運命を持つてゐないものだ。それは美貌にばかり捉はれて常に移り氣だからであつて、悪氣ではないが、人とおち／＼交際つ

てゐられないものである。しかし、どんな人にも自惚れといふものがあるから、大抵の人は何處か自分のいゝところを誇張したがるものだ。そこを無理に發見して、大いに羨望してやると、先方は必ず好意を感じて来る。

第廿二條 床の間に出てゐる人の心

床の間の掛物を見ても、この人は金儲けの爲めに書畫骨董を蒐集してゐるのが、ほんとの趣味で愛してゐるのかと云ふことくらゐは直ぐ判る筈だ。金儲けの爲め、人は、飽くまで偽物を拒否する癖が強い。しまひにはその品物の如何に拘らず。賣手の言葉まで疑つて来る。こんな人に趣味の深さを語つても、心の底を掴むことは出来ない。むしろ家作がどうの、株がどうのといふ獨り言をいつて見せる方が、腹の中で親しまれるものである。

第廿三條 その癖に鮮やかな手品を

報告書でも、手紙でも、いきなり引つたくつて取つて見るやうな人は、手前勝手に疑り深く、人のいふことを逆に考へたがる癖の人だから、説明しないで暫く見せて置く方がよい。すると、先方から

その原因か結果かを訊ね出すに相違ない。その時は一覽表なり簡単な意見書なりをこしらへて置いて即座に出して見せるがよい。最初から説明してかゝると屹度何とか理窟をつけたがるものだから注意が肝腎だ。

第廿四條 潔癖の人を動かすコツ

潔癖は、人の缺點ばかりが見えて孤獨な生涯を送るものである。だから常に受け身で積極的になり得ない。こんな人の動作は常に、懐手の片手をうしろへ廻して、フン／＼と人の話は聞いてゐるが、感心して聞くやうなことは絶対にない。こんな場合は、何かの話で其懐手を出さして見ようと研究して見るがよい。「あなたの事をあの人が斯う云つて居りました」といふやうな話になると、腰を浮かして乗り出して来るのが必定である。

第廿五條 反對に出て釣り出すコツ

自分の性格は斯ういふものだと言ひ觸らす人に限つて秘密や懸引が多い。「私はこんな竹を割つたやうな氣性ですから……」なんて言つてゐながら、いつも未練たらしく愚痴を云つてゐるものであ

る。斯ういふ人には決してその人の痛いところへ觸れてはならない。反對に「君のやうに眞正直な人にこんなことを云つたらどうかと思ふが……」と云ふやうにすると、見す／＼不本意なことでもその手に乗り易いものだ。

第廿六條 鼻ツ張りの強い人の呼吸

人の缺點を指摘することが得意な人に限つて、自分の缺點を指摘されるとムキになつて憤り出し、それと全然別な報復手段で突つかゝつて來る人がある。こんな場合は、先方の云ひなりになつてゐて、賛否を明かにせず、賛成の時は調子に乗つてやり、不賛成の時は有耶無耶な返事で鹽づけにしてしまふ方がよい。こんな人に限つて、自己宣傳が巧みで示威運動が強いから、圖々しい外交なんかには持つて來いである。

第廿七條 因循な人と話し合ふ心得

品物を買ひに來た客でも、慥にそれと見込みはつけて來ただけけれど、あれやこれやと迷つてゐる困循型の人がある。こんな人には、なるべくその決心を促すやうに、目星をつけた品物だけを説りし

てやるがよい。あれもこれもと迷はしてしまふと、いろ／＼考へた擧句、一つ相談をして來るかな』と云ふやうな獨り言を云つて歸つてしまふものである。だから同じ話を外らさなければならぬ場合でも、それに似た話の所で相手するがよい。

第廿八條 手の先に現はれて來る癖

人は眼を見て話すものだとはよく云ふことだが、あまり先方の眼を見て話をする時、いかにも猜疑心が強いやうに見えて却つて損である。だから、こんな場合は相手の手を見て話すのがよい。手の先に現はれる癖で、凡その性格が現はれるもの、指先を忙しく擦り合はしてゐる人は、性急な慾張り腕組をしてゐる人は、何か宜いことがあつたら聞き出さうとする人、矢鱈と揉み手をしてゐる人は、親切に聞かうとつとめてゐる人であることが多い。

第廿九條 隙へつけ込んで行くコツ

「買ひ立ての靴で氣取つた音をさせ」と云ふ川柳がある通り、人間と云うものは、どんな場合でも自分第一なものである。「みな俺を見てゐるらしい晴衣裳」といふのも、その人の得意な時に自惚れる

心境である。であるから人の心の読み方といふものは決して困難なものではない。その得意なところに話題を吊り出して、その人の趣味なり癖なりを見て取つてしまふのがよい。それでも口を緘してゐるやうな人だつたら、先方が口を切るまで何も云はぬことだ。

第卅條 金が先か名が先かを知れ

人の慾するものは給局、名か金かの二つである。死ぬまで名より金が欲しいやうな人であつても、名の欲しい欲望の湧く時代もある。金より名が欲しい人であつても、金の話に耳を傾けないことはない。只そのどつちに重きを置くかを見るには、その人の動作である。金萬能の人は直ぐに乗り出して来る癖があるが、名を第一とするものは金の話をあつさりとは片付けてしまふ。それが結局大金儲けをする素質の人である。

八方固めの巻

第卅一條 人は常に勘定の動物たれ

人は感情の動物だといふことは、よく憤慨した時の言葉だが、これを嬉しい時に使へるやうにならなければ、人と圓滿に交際することは出来ない。だから憤慨や昂奮したときは、勘定の動物になるのが一番よい。こいつと争ふといくらの損になる。その損を諦めて、損のつもりで貯金でもするやうになればますく上々吉だ。もつと大きな憤慨だつたら、その金の利息を考へて何年後にはいくらになる胸算用をするやうにすれば晴々として来る。

第卅二條 昂奮を嚙殺して了ふコツ

怒るなといつたつて、感情に支配される人間のことだ、どんなはずみで飛んでもないことをいつてしまはないものでない。こんな時はマッチの棒なり、紙片なりを、ポケットでも袂の中でも、折るか破るかに限る。その行動が多少なりともその氣持を減じて行くやうになると、激發する感情は靜かな調子になつて行く。そこまで漕ぎつけたら、咽喉のところまで大きな聲を出して、口の中で二三度嚙み殺すと柔かな言葉になつて来る。

第卅三條 いつも朗かで居られる法

人は覚えてゐてよいことは忘れてしまつて、忘れてよいことをいつまでもクヨクヨしてゐる癖がある。それを忘れつぼくなるやうに修行するのが一つの成功秘訣だ。癪にさはつたら別のことを考へろ。あいつ何時までもあんなことをいつてゐるが、俺はいま愛妻と結婚した時のことを考へてゐるんだ。あの時、妻はこんなことをいつたつけ、俺はかういふことを云つたのが初めだつた。といふやうなことを考へてみると、ますく、天空快調になる。

第卅四條 常に恩を着せる人となれ

古い諺だが、與ふるものは幸福なりだ。と云つて、ない袖は振れないといふ人があるかも知れないが、電車の席を譲るのなんかは、別に資本の要ることではない。それなのに二等車なんかへ乗込むと一人の箱に二人分の敷物を敷いて、斜めに坐つてゐる人なんかがある。これは自分だけ寛いで乗つて行かうといふのだらうが、そのうちに一人掛け二人掛け、しまひにみんな掛けられてしまふものだ。最初から席を與へれば禮をいはれて有難がられる。

第卅五條 只で出来る明るい氣持ち

汽車の中の退屈まぎれに、右と左の人にいるく話をしかける人がある。これは別段怪しい人でなくとも、この頃の景氣や、お天氣の話、行先の話などで友達を作つて行かうといふのだからいゝやうなもの、こんな場合はいつも受身であるべきだ。こつちから切りだすと警戒される虞れがある。新聞を買つても一通り読んでしまつたら、持つてゐなさうな人にやるのも一つの列車外交だ。どうせ捨て、しまふ新聞で、禮を受けて親切を感じさせる。ちよつと明るい氣持になれるではないか。

第卅六條 親切の押賣は輕蔑される

相手の歡心を買はんがために、チョコ／＼すると先方から奴隷視されてしまふ。昔から「エヘン痰壺」といふたへがあるが、今でも煙草を出すときにマッチを擦つてやるやうな軽率な人が多い。先方がバットでも出さうものなら、口をつけるまで可なり狼狽するものだ。こんな場合はやはり自分も煙草を出して、先方の準備が出来たところにマッチを擦つて出すやうにすれば、落着いた、品のいゝサービスになるものだ。

第卅七條 見苦しい狼狽を防ぐコツ

「書留にまた印肉のありどころ」といふ川柳があるが、ものゝ整頓が行はれてゐないと、イザといふ時に取亂した狼狽やうをするものだ。汽車でも電車でも、切符はしまつて置く手癖をつけるやうにすると、改札場でまごつくやうなことはない。まづ切符の入れ場は洋服なら左のうち側にある小さなポケット、和服なら羽織の袂といふやうにすれば、いつも慌てずに済むといふもの。家庭、事務室でもこのコツでやれば能率的になる癖がつく。

第卅八條 常にピカ一となつて暮せ

世の中の多くの人はあまり惘巧ではない。と、考へさへすれば、いつも王者のやうな氣持でゐられる。しかし、それが凝り固まると作人か神様のやうに遠く祀られてしまはなければならぬ。だから賢人は世に連れて愚人となれといふ言葉がある通り、惘巧でない人達と一緒になつて暮すやうに考へさへすれば、いつもピカ一でゐられる。それには卷き舌の啖呵も、いけぞんざいな口の利きやうも、一通りは覺えておく必要がある。「なあ兄弟」と云つたところで、惘巧ものはやはり惘巧ものでゐられるのだ。

第卅九條 腹の底を人に見せぬコツ

秘密な計畫のやうなものは、決して人に喋つてはならない。といふと、先方から何とか、かとか批評されたり、ケチをつけられたりするくらゐがオチで、何の利益にもならない。けれども計畫のやうなもの、人の批評を聞いて自分の案を練つてみようといふために、つい口走りたくなるものだ。こんな場合は、自分の家の神棚に向つて、大きな聲で喋つてみる。それを二三度繰返すと、自分が自分を批判するようになるから、缺點があつたら自分で直すことができる。

第四十條 腕試しは空を切つて見よ

自分の感じや、安つばい見透しだけで、計畫や仕事に取りかゝることほど危険なことはない。それにはまづ空を切つて見ることだ。空を切るとは、まづ自分が實行しようとする仕事に似たやうなものを探して、それを試してみるのである。それが人に用ひられるか、世間に好評を博するか、たしかめたところで、自分の仕事がそれとどの點が勝つてゐるかといふことを發見し、それを力強くして世間に發表するがよい。

第四十一條 敵と取組む戦術を知れ

戀愛でも唇を許し合ふまでは、相當の時間がかかる。その時間は期せずして一つの雰圍氣を作るものだから、人と交際をするにも、この氣分の作り方を心得ておかないと何事も成就しないものだ。それには古い例へだが、相手の氣持になりきることだ。目上の人なら目上の人になつたつもり、使はれてゐる人なら使はれてゐる氣持、その立場をお互ひに交換して話し合ふやうにすると、自然とその雰圍氣が出来てくるものである。

第四十二條 豪い人と肝膽相照す秘訣

自分より目上の人と話をする場合、決して先方の目を見てはいけない。さりとして先方の視線を避けるやうにすると後暗い人間に見られてしまふ虞れがある。こんな時には先方の鼻を見ることだ。目上の人の中には壓迫力がある。それに縮してしまふやうでは肝膽相照らすといふ譯には行かない。そきへ行くと鼻は見れば見るほど愛嬌を持つてゐるものだから、この愛嬌に寛きながら話を聞いてゐると氣持が軽くなつて来る。

第四十三條 人間の保護色は不得要領

要領を得た才人は、人に認められるが、失敗すると悪人扱ひにされ易いものだ。だから要領を得させないやうにするのが世渡りには必要なことである。先方が金儲けの話を切りだして来れば、それと似た競馬か相場の話でもする。先が芝居の話を持ちこんで来れば、活動の話をする。といふやうに即かず離れずの話に花を咲かすことである。そのうちにこゝぞと思ふところを見て取つておいて、後日の戦術に應用するといふ風にするのが一番だ。同情したり愚痴をいつたりすると腹の中を見透される。

第四十四條 御機嫌を伺ひながら勉強

常に相手の趣味や道樂を心得ておけとは處世の秘訣だが、心得てゐただけでは何にもならない、これを知つたなら、まづそのあたりのものを百科辭典か何かで調べておいて、先方の人と話を交へるやうにする。かうなると、かなり微に入り細にわたつて話が出来るものだから、先方は調子に乗つて話して来る。さうなるとこつちが調べたものに裏書きされて、さらに新知識を得られるといふもの

だから、かうして百人に逢へば百の知識が得られる。

第四十五條 話術は上手な日本語で

人は口の利きやうで馬鹿ともなれば惻巧ともなる。故人野田大塊翁が嘗てある園遊會の模擬店で、水つぼい汁粉を食はされたことがある。時の大臣原敬や岡崎邦輔といふやうな人達は、みなそのまづさ加減を罵つたが、大塊翁はあとから来て、いきなりその汁粉を吸つてみたが「うむ、これは湯が多いワイ」といつて平氣でゐた。口の利き方はすべてこのコツだと思ふ。そのことを翁に訊ねたら「ハッ、俺は日本語が達者だワイ」といはれた。

モーションの巻

第四十六條 度忘れした入を思ひ出すコツ

先方はよく知つてゐて、馴れ／＼しく言葉をかけるのに、こちらはすつかり忘れてゐて「失禮ですがあなたは何誰でしたか」と訊ねて見たい場合がよくある。そんな時は諦めて見ると度忘れ思ひ出

し」といふ句があるとほり、モソ／＼考へ出さうとして苦しむよりは、朗かな態度で「いよう、近頃はあの人。何とか云ひましたな、あの人と屢々お逢ひですか」とやつて見る。先方がその何とかいふ人の名を話し出せば、その人のことがすぐ判るものだ。

第四十七條 人の話は顎で聞くがよい

わかり切つた話をくどくどと話す人があるが、これを辛抱して聞けるやうにならなければ一人前とはいはれない。こんな場合は耳で聞いてゐると、可なり退屈なものだから、顎で聞くことを練習するがよい。相槌を打つにも一つ／＼顎をうしろへ引く、そしてこゝぞと思ふあたりのところがあつたら顎を身籠と一緒の前へ出す。先方はよく聞いてゐてくれると思つて親しみを増して来る。かうして交際してゐるうちに、何か自分の爲のものを必ずもつて来るものだ。

第四十八條 挨拶は先手・返事は受身

返事は常に受け身で出て「それから」といふやうな態度を示してはいけない。挨拶は口許を綻ばして先手を打つにかぎる。が、この笑ひ方が肝腎で、ヘツヘツは下品になり、ニヤリと来ると嘲笑に

見える。つまり腹で笑つただけで口材に現はれる微笑の表現を自然にすることだ。だが、この場合口を利くと下品になる。まづ襟を正して息を吸込むと真面目な顔になるから、先方が笑ひかけた頃にそろ／＼息を吐き出すやうにすれば、自然に寛いだ態度になるものだ。

第四十九條 人を褒めれば褒められる

人を貶してはいけないといふことは世渡りの極意だが、これは總てが受け身で割が悪い。それよりは進んで褒めることを研究するがよい。『あなたのことをAさんは非常に感心して居りましたよ』と働きかけると、先方は得意になつてきて頗る好感をもつて来る。そして他日Aさんに逢ふと今度は、『Bさんはあなたの手腕に大へん感服してゐましたよ』とやる、つまり二人を喜ばして自分も二人に可愛がられる。これが一石二鳥のモーシヨンの呼吸である。

第五十條 失敗談で相手を寛がせよ

用談でも世間話でも、いつも自分を第二とする態度が肝腎だが、どんな場合でも自分の成功談を語るものではない。人の成功した話には反感が伴つて飽かれやすい。寧ろ失敗談を選ぶべきだ。だが、

同じ失敗談でも失敗すべく失敗した話は禁物。これは相手に見透される虞れがあるから、成功したつものものが失敗したといふやうな話の順序を考へて置かないと、相手に興味をもたせ得ない。つまり千慮の一失だとか、思惑違ひだとか、偶然の失敗だとかを選ぶべきである。

第五十一條 話を聞くのに茶をねだる

呑みたくない茶を所望するのも呼吸の一つだ。先方が得意になつて話しかけてゐる最中に『甚だ恐れ入りますが、お茶をもう一つ』と相の手を入れると、先方は漸く打解けてきて、思ふことをみんな話してしまふ。話上手よりは聞き上手といふ諺があるが、話を聞くのに、矢鱈に感心ばかりしてゐるやうなのは愚の骨頂、潮時をはかつてかうした鳴り物を入れて、先方の話に共鳴してゐるやうな態度を示してやるのが一／＼よい。

第五十二條 獻盃を廢しての握手も妙

宴會などへ行くと、獻盃しなければ義理が濟まないやうに考へ、わざ／＼立つて行つて盃を獻じる人がある。獻じられる方は澤山な盃なので、どれが離のだからわからない。そのわからない仲間に入つ

て認められぬよりは、私は甚だ不調法で獻盃ができません。搦手さして頂きます。といふやうな調子で出ると、先方の印象には必ず強く沁みこむ筈だ。まさか横向きで手だけ出して握らす人はない。「さうですか、酒はいけませんか」など、身床しい信用までもついて来る。

第五十三條 儲け話は考へさせる程度

ときにこんな儲け話があるが——といふやうな話で人を釣り出さうとする人があるが、これは先方にして見れば通り一遍の世間話で、身に沁みるものではない。どんな人でも疑ひと獨りよがり持合はしてゐるものだから、あまり徹底した金儲けの説明をやると肩唾ものらしくなる。こんな場合は、誰にもわかる程度の答へだけを残して置いて、「かういふ風にするると利廻りはどのくらゐになりますかな」といふ調子に、二人で計算して見るやうにすれば、大抵先方も乗つて来るものだ。

第五十四條 自分第一結局自分第二

自分の用で人を訊ねるのに、いきなり「時に」と出るやうだと、黒か白かを訊ねるやうなもので、味も素ツ氣もない。だから人を訪ねる場合は、まづ先方の立場なり、仕事なりを十分に考へた上、も

しか私があなただつたら……といふ風な氣持をつくつてから先方に會ふがよい。よしんばそれが全然見當違ひなことであつても、先様のための考へてのことあれば眞實が溢れてくる筈だ。そこを十分に話し合つて、歸り際間近になつて自分のことを切り出すやうにするがよい。

第五十五條 先づ時計を出して話を聞く

人と會つて人に退屈されるくらゐつまらないことはない。ちよつと會議がありますから、ちよつと外出しなければなりませんから、といふ風に、先方が駄目を押してゐるにもかゝはらず、ネチ／＼話をしてゐるやうなことでは到底話がまとまるものではない。こんな場合はこつちもサ手を打つて、自分の時計を出して卓子の上に置き、「十分間だけ御割愛下さいませ」といふ風にすると、「一時に……」と話を切り出しても少しもをかしいことはない。却つて先方が眞劍になるものである。

第五十六條 他人の急所を見つけ出せ

人とガツチリ取組むには、先づその人の弱ところへ觸れて行くのが第一條件だ。人の弱點といふものは、すべて立派に出来上つてゐる心よりも、悪く出来てゐる心の方が多分にあるものだから、先

づ解剖するに先立つては、悪い方から探りを入れる方が手ツ取り早い。名譽慾、利慾、快樂、そのどの方面でもよい。いまその人の欲してゐる方面に向ふべきだ。もしもその人が病身であつたりする場合、醫藥、強健、健、鍼灸、信仰、なんでもよい、しみくと話しこんでやると先方が信じて来る。

第五十七條 逆手で本心を引出すコツ

相手が狸だといふことはよく聞く話だが、どんな狸でも、尊嚴を冒瀆されてまで甘んじてゐられるものではない。「これはつい先達聞いた話ですが。あなたにはこんな御計畫があるさうぢやありませんか。あなたの今やつてゐられることは、これ／＼の伏線だといふ話ぢやありませんか。私はそんなことはない」と辯明して置きましたか」といふ風に獨り言のやうなことをいつて見る。「そんなことはない、誰がそんなことをいひましたか」と來るとめめたものだ。

第五十八條 競争者に必ず勝つ戦術は

どんなに合理的な議論でも、相手を輕蔑するだけでは十分に勝つといふことは出來ない。況んや、安つばい嫉妬や反對などで自ら慰めてゐるやうでは戦はずでに負けである。といつて意地や張りで大重になつて見たところで、それは徒らに費用ばかり嵩んで結局草臥れてしまふ。こんな場合は敵壘を抜く考へを次ぎにして、先づ自分の才能と功績とで先方にチリ／＼迫つて行くことだ。急いでは仕損ずる。先方が十でこつちが十二なら。何時かは必ず勝てる筈だ。

第五十九條 借金して信用を得る秘傳

借金はいま行つていま直ぐ出來るものではない。「千兩時借り五兩の請判」といふ言葉通り、「一寸千兩」といふ地位にならなければ大きくはなれない。それには信用第一であることはいふまでもないが、借りても借りなくても良い時に借りる練習をして置くのか一番よい。是非にといふのではないから氣に落着きがあつて、さもしい態度が出ないところに、相手を引きつけるコツがある。借りる約束をして置いて借りずにしなふなんかも奥床しいものだ。

第六十條 半歩先へ出るのが成功の鍵

あり觸れた商賣だ、平凡な仕事だ、といつて諦めてしまふのは、結局自分の居場所をなくしてしまふものである。といつて、これからの世の中は……と獨りきりして世間からまだ理解もされないも

のに手をつけると、理解されるまでに草臥れてしまふ。だから、どんな仕事でも、常に世相と照し合はして半歩づゝ先へ進むやうに心懸けるとよい。半歩出たらまた半歩と考へさへすれば、現状が無事で何時の間にか一步先んずることになる。

あの手この手の巻

第六十一條 先づ月給の呉れ手を確めよ

努力といふ言葉は、何となく働きのらしく聞えるが、何を目的に努力してゐるのかわからない人の働きぶりは笑止千萬だ。月給をくれる人のために働くのだとすれば、誰が月給をくれてゐるかを確めもしないで、やれ社長様、やれ重役様と、徒らに鼻息を窺ふやうな努力はやめるがよい。月給をくれるのは社長でもなければ重役でもない。その事業の相手になる大衆が月給の呉れ手なのだ、大衆の心を掴むことを知らぬ努力は徒勞である。

第六十二條 取り難い大衆の心を掴め!

どんな氣むづかしい主人だらうが、たつた一人の相手なら、機嫌の取りやうはいくらもある。しかし、主人の機嫌だけで満足に月給が保証されるといふことは出来ない。結局商賣繁昌でなければ、主人の機嫌は完全に取り結べるものではない。商賣繁昌は主人が目的でなくてお客様が目である。つまりお客様の御機嫌を伺つてこそ、永久に月給が保証されるといふものだ。取り難い大衆の機嫌を取るのが處世第一の秘法である。

第六十三條 主人の機嫌は自然に取れ

目まぐるしく働いてゐさへすれば喜ぶやうを主人より、氣むづかしいお客様の方がどのくらゐたためになるか分らない。例へば店へ来る客のうちでも、十人が十人「こちら様で買はさして頂きます」といふやうな態度の人はない。孰れもお前のところで買つてやるんだぞ」といふやうな顔をしてゐるものだ。これを引きつけて行つてこそ、主人の喜びは自然に湧いて来る。引きつけるのは何か、世辭か、愛嬌か、揉手か、お辭儀か、そんなものではない。心からのサービスだ。

第六十四條 勤勞の第一條件が奉仕だ

サービスといへば、福引か特價販賣のやうに考へる人が多いやうだが、眞の奉仕とは、他人を愛するといふことである。元來世渡りの第一條件としては、自己完成が主であるが、自己はその天分が基礎で、勤勞が建築、優越の才能が豫備といふ風でなければならぬ。しかしこれだけでもなほ十分ではない。實際世人の注意と好感とを促すものは勤勞である。勤勞とは、自分が疲れるまで働くことではなければならぬ。手足の疲れは寝れば直るが、氣の使ひ方は寝ても覺めても怠つてはならぬ。

第六十五條 心から愛嬌を揉み出す事

己れを殺す働きもつて當るには、こんな人にはかういふ風といふ氣の廻し方が一番である。即ち白己を以て先方を律するのでなく、先方を以て自己を律するやうにならなければ、時に應じてのあの手の手は使へない。これを商人に譬へて見れば、こんな人ならこの手で賣るといふ寸法を呑み込んで置かないと、自分と氣の合つたものだけしか商賣が出来ない。「毎度有難う」や「いらつしやいませ」くらゐで済むと思ふのは大きな間違ひである。心からの愛嬌が必要である。

第六十六條 客を疑ふとその客は去る

この客が買ひに來た客か、素見に來た客かなど、考へることは大禁物。さうした氣持は、眞度態度に現はれるもので、迂散臭さうな眼でチロ／＼見てゐられては買ふ氣になれるものでない。それよりはいつそ賣らうといふ氣持でなく、品物を見て頂くのだといふつもりで、これも如何々々として見せる。お客様は却つて氣の毒になつて來て、氣に入らない品だと思つても買ふ氣になるものである。人と人の交際も、疑ひを持ちあへば必ず右と左に別れるものである。

第六十七條 己れを殺す術は必ず勝つ

恐ろしく理窟つばい人と交際する場合に、理窟で應酬することは拙劣だ、かうした人は何かにつけて議論したがる。齒ブラシ一本買ひに來ても、對外貿易を論じ、粗製濫造を憤慨したがるやうな人だつたら、何がなんでも「御尤様」と軽く受け流し「しかし」とか（ですが）とかいふやうな言葉は絶対に慎むべきである。さうして置いて、いふだけのことは残らずいはしてしまひ、わざと話題をかへて自分の方の話に奪ひ取つてしまふやうにするのがよい。

第六十八條 世間話を澤山持合はす事

先のさきまで考へたがる人は、兎角現實を忘れがちなもので、何かの話をしても、これから先きはかうなるのだから……といふ風に、空想ばかりに憂身をやつすものである。殊に負けず嫌ひの人にこの癖が多い。こんな人には、なるべく最初は現實ばなれのした問題を出し、逆にだん／＼導いて行くやうにしなければ話が合はない。それには多くの世間話を持ち合はす必要がある。淺くとも廣く世間を知つて置くことは、こんな場合に役に立つことが多い。

第六十九條 來た時より歸り際の愛嬌

世辭や愛嬌はチョッキに釘があるやうに、必ずなければならぬのだが、チョッキの釘も最初の一つをかけそこなふと最後の一つがかゝらないものだ。先方が何か用件があつて來た時に、つまりぬ世辭や愛嬌を振り撒いて見たところで、先方は耳にも鼻にもかけるものではない。それよりか、先づ客の話の切出し宜いやうに、言葉少なな態度に出て、用件が済んでしまつてから、「今年の夏は海ですか山ですか」ぐらゐに笑つて見せるのも一つの手段である。

第七十條 虚を突くにも手加減を！

突き身の仕事をする場合、必ず先方を納得させようとするには、何といつても熱と根氣を必要とするのであるが、相手の立場がなくなるほどに實め立てるのは拙劣だ。たとへ先方が無理であつても、先づ先方の顔の立つ餘地だけはつけて置いてかゝらなければならぬ。「御尤もです、であればこそ私もこのやうに汗みどろです」といふ具合に、自分と先方がからみ合つて行かないと、利害を超越して、話は別れ／＼になつてしまふのである。

第七十一條 謝罪するにもコツがある

どんな人でも一生のうちには、二度や三度は謝罪しなければならぬことがある。こんな時に意地張りづくで自分だけ善い子にならうとする人に嫌はれる。謝るものなら綺麗に詫びるがよい。さればといつてすぐにお辭儀をしてしまふやうでは、如何にも誠意がないやうに見えて輕々しい。こんな場合は「ちよつとはいかりを……」といふ風にしてその場をばづし、用を足してきた振りをしてから、「いや、よく考へてみましたら、私の方が悪うございました」といふ風にやるがよい。

第七十二條 拒絶するには代りを持つて

あらゆる人々に對してあらゆる條件が全部受け入れられる筈はない。結局は否とか然りとかいふ返事をしなければならぬものであるが、場合によつては否を否といひかねて、モジ／＼してゐる間に退ツ引ならないことなる場合がある。こんな場合は先づ「考へてみませう」といふ拒絶的暗示も一つの手段だが、實際からゆくと斷然否といひきつておいて、「時にこんな話があるが……」といふやうに、別の問題にしてしまふやうにするがよい。斷られても何か残つてゐるやうで先方には氣持がよいものだ。

第七十三條 賣り込みは得意がらせよ

ものを賣り込む場合は、相手が得意の時を見はからつて持ちこむのが一番捷徑だが、いつも相手が得意といふことはない。時によつてはかなり不機嫌な場合もある。かういふ時は潮時を見て切りださなければならぬが、その潮時を作るやうに仕向けてゆかなければならぬ。「先達はすつかり一ぱい食ひましたよ、歸つて考へてみたら、どう見ても歩を取られてしまひました」といふ風に相手を得意がらせる手段ぐらゐは心得てゐなければならぬ。

第七十四條 豫約は第二陣の戦法たれ

どんな場合でも、人に會つたら次の機会を豫約しておくやうにしなければ能率的な働きはできない。「今日はちよつとお伺ひしたのですけれど、この次ぎはあなた向きの材料を提供します」といふ風にするのもよいが、その場合當つて碎ける式で、用談なり材料なりは全然他のものゝやうにほめかして見るもよい。「どれ／＼見せて御覽」となつても、「いゝやこれは駄目なんです」といふ風に謙遜してかゝるやうにすれば、次ぎの豫約が出来てしかも説明が樂になる。

第七十五條 眼光紙背に徹せしむる法

すべて實戰場裡に立つものは、常に豫見と洞察力がなければ戦に勝つといふことは出来ない。しかし、豫見と洞察に自惚れは大禁物ぞ。自惚れがあると却つて敵に乘せられるものだから、どのやうに煽動されても、それに乗つた顔をしなから、紙背に徹する眼光を働かさないと、敵は飽まで根強く煽つて来る。こんな時は巧に「お話の中ですが……」と一息ついて別の話を切り出し、先方が何の目的で來てゐるのかを引出して見ることにせよ。これが判るやうになれば一人前である。

身代作りの巻

四〇

第七十六條 身代の基礎は矢張り金だ

何といつても金の世の中である。が、なか／＼金のできない世の中である。といふのは、金が欲しくなる年頃が、丁度金の使ひたい年頃だからである。欲しいのは氣持だけで、使ふのが實際だからいつまで経つても金はできない。だから、金の欲しくない時代から貯めはじめるのが一番よい。一錢でも二錢でも、金の値打を知らない時代から貯金をはじめるのが何より肝腎だ。そして使つてみたいころになつたら使はない工夫をして行くやうにする。それが身代の基礎になる。

第七十七條 だが金が絶対の身代ではない

自分で金を儲けようとあせる人は、金に使はれて一生暮す日雇人足と同じやうなものだ。金を作るには金に作らせるやうにしなければ、ほんとの金儲けはできない。溜つた金を積みあげて、俺はよい身代だと威張つてゐる人は、その日から減つてゆくことに氣がつかないのだ。減つてゆく身代ほど心

細いことはない。それよりは、俺は何時でも金のできる人間だと思つてゐられるやうな身分にならなければ、よい身代とはいはれない。

第七十八條 溜つた金には蛆が湧く！

少し小金を持つてゐると見られたら最後、集つてくる人は、どれもこれも取りにくる人間だと考へてゐないと、一寸したことで生爪を剥がされる。だから友達といふ名こそついてゐるが、少しでも自分の方が上手だと、何につけても取られることより他はないものだ。だから、いつでも一文なしの人間だと見られるやうにしてゐなければ金は溜らない。貧乏を評判にしてゐながら、それでも集まつて来るやうな人だつたら、それをほんたうの友達とするがよい。

第九十九條 手のつけられぬ金が財産

貯金をないものと思へることはなか／＼出来ない藝當だが、事實、貯金帳と首ツ引してゐるやうな人は何かのすみで引出すことが出来がちなものである。故に、引出すことのできない貯金をするところが第一で、第二にはいくら溜つたのかわからないやうに溜めるのが一番よい方法である。それには

現金を少しもつて、あとは土地なり家作なりへ分配し、集めたらいくらになるといふ風に考へてゐるへすれば、何かあつてもちよつと手がつけられず、持つてゐる金が少しだから、うっかり金は使へな

第八十條 自分の金は勘定するな！

「貯めた金、溜まつた金に溜まる金」といふ川柳は、身代づくりの秘訣とされる名句だが、事實、一圓二圓と積んでゆく貯金が、百圓千圓と貯まつてきたら、金を産む原則どほり、溜まるうちは金に任して、どこまで溜つてゆくか、辛抱して行くやうにならなければ大身代にはなれない。少しどころにかなつたと思ふと、算盤を入れてみたり、別の方面へ氣を移してみたりするやうなことで、その隙間からポツ／＼と減りはじめるものである。

第八十一條 金より腕が唯一の財産だ

身に一文の貯へがなくなるとも、どんな仕事でもやればたゞちに出来るやうな身分にならなければ、身代づくりには不向である。それには金や物の富よりも、名聲の富を選ぶがよい。「あの人は金がある

から といはれる人は、そのある金を搾取されるが落である。それよりは「あの男には腕がある」といはれるやうになれば、その人に向いた仕事さへ見つければ、何千何萬の金はたちどころに集まる。集まらなくとも融通が利いて来るものである。

第八十二條 我慾は損の上塗りと知れ

見るもの聞くものこと／＼く儲けたいと考へるうちは、身代を減らしてゆくものである。損して商賣はできない。金にならない仕事はしない、といふやうな人は、自分のことだけしか考へてゐないものだから、人から自分のことに有利だと見せかけられ、ばすぐその手に乗つてしまふ。そして莫大な損害を蒙ると、無理な我慾を棚にあげて、矢鱈と相手の人の罪にする。ところがその相手は頭を掻きながら、その損の埋合せをしますからといつて、また損をかけに来る。それへまた乗るのが人情だから情ない。

第八十三條 勇敢に損をすることを知れ

大儲けをしそこなつた人にかぎつて、チリ／＼損をしてゆくものである。身代減らしは金が減つて

ゆくばかりか、氣まで減らしてゆくのだから二重に損がゆく。そんな場合は、これから何年間、いくら
らの損と見つもつて、一度に損をすることを考へるがよい。これは見透しの投資といふものに多く
使用される。何年間の積極政策が、うまくゆけば半年そこ〜で目鼻をつけてくれる。假りにそれが
一ン〜に行つたとしても、積極的に働いた名聲だけは財産として残るものである。

第八十四條 利子を拂つて心配を貰ふ

切り賃は金のなくなる初めなり」といふ句があるとほり、人はどんなことがあつても借金をするも
のではない。ヘードンは金を借りにいつて、金は借りられたが俺は心配をもらつてきたと敷息を洩ら
したさうである。どんな場合の借金でも、借金の利子を支拂つてなほ且つ儲かるといふ仕事がないか
ぎりは、十のものが九にしかならないのだから、既にマイナスの財産である以上、完全な身代とは
いはれない。まづ借金はすべきでない。

第八十五條 財産建設の地均しはこれ

九尺二間の棟割長屋でも、縁の下をのぞいてみれば、何本かの柱が立つてゐる。物の數でもない身

代でも、いくらかの収入の道と、遣り繰りの術と、嗜みの貯金帳といふ柱が立つてゐないと維持しか
ねるものである。この柱々が一つの魂をもつてくると、いやが應でも身代は肥つてくる。つまり収入
の柱から一割の貯金、遣り繰りの柱から五分の貯金、嗜みの貯金から二分の繰り込みといふやうに心
がけて、さらにもう一つの貯金柱を建てることである。これで建築は大きくなつてゆく。

第八十六條 物と金とを手玉にとれ

金の柱が立ち揃つたら、今度は物の柱に建てかへるがよい。金から物へ、物から金への時代は常に
繰返されるものだから、低金時代だからといつて物に換へておきつ放しでは何にもならない。物の値
うちが出てきたら、早速それを金にかへる。つまり、千圓の物が二千圓になつたら一先づ金にする。
かうすれば、金の値打ちが安くなつても倍になつてゐれば、慌てゝそれ以上のことをするには當らな
い。金、物、物品、金のお手玉を鮮かに捌く術を知らなくては、大身代にはなれない。

第八十七條 身代が上つて行く梯子段

財産三分策とは危険分散の法則として動かすべからざるものであるが、これは財産らしいものが出

来てからの方法で、これから建設しようとするには、まづ貯金の通帳も三通りくらゐはあつてもよい。一つは常に出し入れする通帳、一つは絶対に下げない通帳、三年なり五年なりの据置貯金帳、この三つに定めておき、出し入れの金を剩して下げない帳面へ移す。下げない帳面から据置へ移す、据置から債券なり、株券、家作土地へ移すやうにする。

第八十八條 見越して貯める増税貯金

家作も土地も株券もよいが、國家と運命を共にする觀念がないと大きな財産はつくれぬ。赤字公債が現在の世の中なら、来るべき赤字埋めの増税も悟の貯金もよからう。煙草に税金がかゝると思つて敷島を朝日にして三錢の増税貯金、通行税がかゝつてゐると思つて電車に乗るたびに一錢の貯金、レコード税がかゝると見て、一枚のレコードを買ふと十錢の貯金といふ風にしておけば、増税になつてもたゞちに國民の義務が果せる。増税がなければそれだけ只儲けである。

第八十九條 我子への投資が最も安全

わが子は、やがて来るべき新しい時代に臨む闘手である。古いものは捨てられるのが進歩の原則な

ら、子の教育は身代りの製造の一つである。しかし近頃のやうに、大學は出たけれど……の時代にはなるべく専門學校程度で切りあげて、大學教育だけの費用を資本にして、いきなり活きた社會學校へ抛りだして見るがよい。萬一それが失敗してしまつても、經驗といふ財産が残る。その經驗を基礎にして打つて出れば、大學を出て就職難でマゴクする人間よりは、すぐ役に立つ。

第九十條 金溜主義より上手に使へ

人間は育つ時間から弱つてくる老年の時間まで、上り坂と下り坂とを描くことを定例としてゐる。だから上るまでに名を偽して、下り坂にはその名で晩年を送るやうにするのが上手な身代の持ち方である。上り坂に金を儲けて下り坂に金を使つて行くのもいいことだが、使ひきつても死にきれないとなるとこんな惨めなことはない。だから、若いうちは金を溜めて上手に使ひ、信用と名聲だけを得ておいて、分別盛りの絶頂から、その名で人を働かすやうにするのが身代つくりの秘訣である。

第九十一條 理想は手の届くところまで

少年のころ、無人島の寶に血を湧かし、學生のころ大臣大將を夢見るやうに、人間といふものは、何時になつても、素晴らしいことばかり考へるものだ。これが向上心といふもので、魂の中の最も尊いものであるが、手の届くところまで考へを纏めることが第一である。若しそれでなかつたら、せめてこれ位までと、理想を自分のところへ近づけて来ると、ハタと手を打つことがある。何ごとに依らず高い理想へ手を延ばす信念がなければ前進することは出来ない。

第九十二條 人に笑はれて偉くなれ

自分には鶉の毛で突いた隙もないと、自分だけを守つてゐる人は肩が凝るものである。萬一さうした隙が出来た場合は、それを隠蔽しようとして尙更縮み上つてしまふ。そんな人に大きな仕事は出来ない。昔から英雄とか大將とかいはれた人は、必ず何處かに抜けたところがある。これは誘ひの際と

いふやうな技巧的なものでなく、天性備はる一隙の一徳といふもので、人を近づかせる魅力の一つである。だから本當に大きく偉くならんとする人は心して間が抜けることがよい。

第九十三條 「なに糞」は下腹へ溜て置け

人生須らく積極的でなければならぬ。引込み思案は後へ年を取る。「必ず断行する」意気がなければいけない。が、「なにくそツ」といふ氣持は、仕事に手を出す時には大禁物、これはコツクリと嘸み込んで、下腹へ「うん」と溜め込んでしまふのでなければならぬ。これを忍耐といふ。忍耐にもいろ／＼あるが、泣ッ面や、愚痴の忍耐は取るべきでない。こんな時は必ず何くそツと下腹へ力を入れてしまふことである。そして理性の裏返しへかけられて芽を出す時が成功の花を持つ時である。

第九十四條 相手の返事を味つて見よ

信念と勇氣は、どんな場合でも一つ川に乗つてゐなければならぬが、自惚れと無謀は似てゐるけれども絶対に禁物である。だから、そのどつちかと思つた時は、人に話して相手の意識へ通して見ることがよい。ふむ／＼か、うん／＼か、それで……か、なるほどか、その反響に依つて自分の信念を固

め、勇氣の出どころを探し出し、「これなら……」となつてからでなければ、斷行に移つてはいけな
い。但し相手の返事は眼から覗くやうにしなければ、眞實か宜い加減か判らないと知るべきである。

第九十五條 氣の進まぬ仕事に飛込め

好きな仕事はやるなといつてもやれるものである。しかし、ほんたうに腕を試すなら、嫌々ながら
溢々ながらでも、やらねばならぬやうな時に、敢然と引うけて見るがよい。仕事のこなし方は、先づ
沈思一番、いくつも方法を分解し、比較的樂だと思ふところから手をつけ初めて、困難なものはあと
へ〜と残し、それを更に分解して最後の困難まで飾り落すやうにすれば、やりよい仕事は九分で、
残つた一分だけに奮闘すればよいのである。そして何でもないことばかりであると思へ。

第九十六條 快活な氣持が何時間續く

何ごとでも、朗かな氣持でかゝらなければうまく行く道理がない。しかし、人の一生にはいろ〜
な起伏波瀾があると同じやうに、一年、一月、一日の間にも、いろ〜な氣持が晴れたり曇つたりす
るものである。その曇りを拂ふことが出来さへすれば満點だが、それには「諦め」といふ修養が必要

である。だから、仕事の一つ〜にはつきりと自分の朗かさを作るやうにしなければ一生の損にな
る。家庭へ歸つてまで外の氣まづい憤懣を洩らすやうではまだ〜若い。

第九十七條 人を怒らせぬ呼吸を知れ

圓轉滑脱、八面玲瓏といふ言葉は、如何にも美しいやうだが、その實はお人よしの薄つべらといふ
感じが伴つて来る、だから人と相對して怒らせぬやうにする場合は、自分も少し怒つて見る氣肯を見
せなければ巧妙とはいはれない。この場合、上手に相手する方法は、なるべく相手方を追窮するやう
な怒り方をしないで、少し見當を違へて憤懣し、しばらく考へてから、ウワツハツハツと大きく笑ひ
出し、見解の相違だつたといふ風にして妥協して行くと先方は溶け込んで来る。

第九十八條 常によい勘を捻り出せ

勘とはコツともいへば呼吸ともいふ。人は只何となく「これ」と直覺が働くものだが、宜い勘が出
るか悪い勘が出るかは、その人の平常の用意から生れるものだから心すべきである。さうした勘をど
うして出すかといへば、それは劍道武術の極意の如く「只何となくあれ」といふことが一番よい。働
かんとすれば働かんとする心に心が動く。遊ばんとすれば遊ばんとするところに心が動く。これはみ

んな手前味噌の勘で宜い勘ではない。常に諸々の事象を胸に曇み、受身になつて勘を出すがい。

第九十九條 數の觀念が正しい軌道だ

どんなことをする場合でも、その基礎となるべきものは數字である。二と三は加へれば五だが乗すれば六になるとい。技術を腹の底に溜めて置き、いざとなつたら、順逆いづれかの方法を持つて打算するがよい、損する算盤で儲ける工夫とは即ちこれである。俺は金儲けが下手だからといふやうなことを自慢にしてゐるうちは大きな仕事は出来るものではない。百賣つては損だが、千賣つたら儲かるといふ算盤が出たら、こゝが仕事を征服するチャンスだと考へるやうになれ。

第百條 次なる藝を御覽に入れよ

他人を信頼した以上は、萬一失敗しても笑つて次の仕事に移るやうにならなければほんたうの仕事は出来ない。だから人はどんな仕事をするにも、必ず次なる仕事を只何となく考へてゐる必要がある。甲の矢乙の矢はこの手法である。背水の陣を布くとも、死ぬことを考へるのは無謀である、常に生きよ、身死すとも心に生きよである、だから武士の大小の如く、大刀折るゝとも脇差に魂を縮めよ脇差折るゝとも小柄に魂を縮むる信念がなければ世渡りは常に下積みである。(了)

世渡り秘訣百ヶ條

定價十錢 (送料二錢)

昭和十年一月十日 印刷
昭和十年一月十七日 發行
昭和十年八月二十日百四十五版發行
昭和十年十二月十日百五十五版發行
昭和十一年三月一日三百五十五版發行

著者	谷 孫 六
發行者	東京市麹町區有樂町二ノ二 森 田 益 雄
印刷者	東京市下谷區南稻荷町五二 高 野 彦 三 郎
發行所	東京市麹町區有樂町二ノ二 森 田 書 房
冊子即賣所及會	電話銀座四七一〇・四八二四番 振替東京四二五一一二番
全國配給所	森 田 書 房
大阪神特約店	大阪市北區堂島上二ノ二 新 正 堂 書 店
中國・四國・九州配給所	大阪府豊中町櫻塚一〇六 森 川 書 房 西 部 支 店

有所權

〔特約〕 東京鐵道局公認 (鐵道保養會・鐵道弘濟會・鐵道投資會)

森田書房版

天草平八郎著

現代六人男

—財界を牛耳る六人男の全貌—

島影 盟著

邪教・妖術を裸にする

—類似宗教の手ひどい暴露—

日本ゼネラルモーターズ

佐々芳雄著

品物の買ひ方・賣り方

生きた富豪術

定価各十錢 (送料二錢)

三井發祥の卷

成功談の急所

○月○日 土曜日。

今日は随分種々な人が来た。どれもつくづく金を儲けたらしい。五百圓の金が出来たらどうするか、千圓貯まつたら何をしたらよいか、なんて同じやうなことを云つて居る。五百圓、千圓と云ふ金は、貯めた人には大變な苦心だつたらうが、三井の大番頭男爵團琢磨さんが取る半日の給料にも足りぬ金である。それを種錢にして素晴らしい儲け方がないものかなどと、殊勝らしく云つて来る人達の根性が可愛いぢやないか。

それなのに世間の人達は金儲けと云ふと、低級なものやうに云ふ。甚だしいのになると「黄金何ものぞ」なんて云つて居る。不思議である。古往今來、金を儲けて千載に悔を貽したる人ありや。金を儲けそこねて祝賀會を開催したる人ありやだ。孰れは本能と理智との割目を走る「お體裁」に

憊まされて居る人の寝言に過ぎない。だから今日の人を嬉しく思ふ。彼等は「お體裁」も「面目」もかなぐり捨てて、何かうまい金儲けはないかと云つて來たのだ。卽座に教へてもやりたかつたが、唯この人達も金儲けの本態を誤解して居る。支那には儒教が生れる何千年かの昔道教と云ふものがあつた。これには鐵を金にする法とか、天下の金を一人で集める法とか、女を靡かす法とか云ふものが書いてある。人間の本能を巧みに捉へたものだ。それが儒教の道德ですつかり天麩羅に揚げられてしまつたものだから事面倒になつてしまつた。

畢竟するに金儲けの本道は、其の本人が持つ性格の善用である。俺はこれを本態的金儲法と云つて居る。それを穿き違へて、五圓のものを十圓に賣る法だの、人の氣がつかぬ穴を見つけて、只でも金を取るやうな、うまい話を探して歩くのが金儲けだとばかり思つて居る。そんな奴は朝早く起きて往來を見て歩くが宜い。「朝起きは三文の徳」と云ふことがある。拾へないとも限らない。けれども之れも考へ物だ。三文拾へる位なら、誰か落した奴がなければならぬ。落した奴はもつと早く起きた奴だ。さうなると「朝起は三文の損」とも云へる。

それでも中には本格的な人間も居た。此人なんかは豪い熱心さで、成功者の傳記とか、立志美談とか云ふものは、缺かさず讀んだと見えて、フォードがどうの、ワナメーカーがどうの、淺野總一郎がどうしたのと、實によく知つて居た。けれども金は儲からないと苦笑して居た。無理もない話さ、成功者の哲學は功成り名遂げてからの結果論で、中には終始一貫努力精進したものもあるが、これは不可と思つたら何遍か出直して成功したものもある。さうなると成功の秘訣さへぐらつて來る。

だから俺は斯く斷言する、金儲けをやるなら、自分の魂に聞くことだ。人は其顔が違ふやうに根性も違つて居る。小膽な奴もあれば、大膽なものも居る。頭だけが健康で手足の弱い人もあれば手足が頑健で脳味噌の足りないものもある。かう考へて見ると百人百色だ。そこで成功者にも百人百色ある。似通つたどれかを探し出して、其足跡を踏むことに心掛ければ先づ大丈夫、フォードや三井にはなれないまでも、氣持の上では彼等と同じに明るく居られるだらう。出世の鍵、金儲けの秘訣は茲にある。何も豪い人の生れ故郷や、豪勢振りだけを調べて羨ましがつて居るには及ばない。三井も三菱も、安田も大倉も、もとの素町人にしてしまへ、そして俺達と同じ立場に居た時代は、どんなことをして居たかと煎じつめて行くと、「成程これだな」と合點が行くところがあらう。

成功傳や立志談を讀むなら、このコツを呑み込んでかからなければ、みんな神様の親類のやうに思つて、手の届きやうがない。

素町人の三井

○月○日 日曜日。

今朝のラヂオで聞くと、今日は小雨模様だと云つて居た。然るにカラツと晴れた上天気、皮肉にも埃が舞ひたつて居る。

天気豫報などと云ふものは當るが不思議だと云つて居るものもあるが、あれだつて全國の天気概況を全部綜合して、今日のはかうなるだらうと云ふ斷定を下すのである。外れる筈はないのだがともすれば當らないことの方が多い。然し雨だと警告されたのに傘なしで出る氣にもなれない。一層引籠つて本でも讀まうかと考へた。

三井は何で儲けたか？

これである。當らない天気豫報に閉ぢ込められて、カンカン日和の青天井を窓越しに眺めながら、三井の榮華物語を讀んで居るなんざあ可なりの皮肉だ。だがどうも仕方がない退屈しのぎである。三井今日の繁昌は云ふまでもなく世界的である。讀んで眞似るには大き過ぎる。三井と俺と何處かに似て居るなんて云つたら、差しづめ腦神經を疑はなければなるまい。

だが然し、今日の三井王國だつて、昔から今のやうではない。連綿七百年、爛漫たる繪巻を繰擴けて、富豪の代名詞にまでなつて居るが、遠き昔を尋ねれば、俺達のやうな時代があつたに相違なう。

いや違ふ。抑も三井の祖先と云ふものは、御堂關白、この世をば我世とぞ思ふ望月の……藤原道長卿の流れを汲み、越後守と云ふ由緒正しき家柄に端を發したと云ふ。けれどもそんな故事來歴が當面の問題ではない。

越後から廻國巡禮に出た六部が、伊勢の松坂附近で井戸の中から金の延棒三本を拾ひ上げた。それを資本に松坂木綿の商賣を始めたのが抑もの初まり、三井のマークが井桁に三の字である所以は依つて以て之れに因する、と見て來た様な嘘をつく講釋師連の話に興味を持つでもない。

今日の大財閥、六億の資産を縦横に振り廻して世界に活躍する三井王國を、望遠鏡の尻から覗くやうに、遙か彼方に眺めたら、何が出て來るか、氣象臺の天気豫報と同じやうに、根つから外れるかも知れないが、町人には町人の見方がある。草鞋を穿いた三井、天秤棒を昇いだ三井、それなら俺達にも眞似られさうだ。

何は兎もあれ、三井發祥の根源は、法號を「殊法」と稱んだ一人の女性であるとのこと、「女なら

では世のあけぬ國」の定石通り、三井も女から夜が明け初めたらしい。

慶長七年、三井越後守高安の子高俊に嫁してから、年四十にして夫に先立たれ、爾來寡婦の身でよく家を治め、子女を教養したと云ふのだから傑物には相違ない。夫ればかりか、嫁して間もなく時勢を洞察し、士分から町人へ方向を轉換したと云ふのである。恰も支那の范蠡が越王勾踐に仕へて三十年、功成り名越げたにも拘らず、敢然商人に成下り、金儲けに精進したと云ふのと同じ筆法である。

そこで彼女が第一番に始めた商賣が何だ。質屋と酒屋を兼業したと云ふのだから思ひつき妙なりではないか。

どてら質に置いてマダロのさしみ

山葵利いたか目になみだ

と云ふ都々逸が、この頃流行つたかどうかは知らないが、質屋と酒屋などはどう考へても今の煙草屋がハミガキを賣る以上に人を食つて居る。商賣の機微はこんなところにあると云ふもの考へさせられる謎のやうである。

さあ茲で考へて見ようではないか。

半襟屋の隣りで玩具屋をやつたら、自分ばかり買つて行つては……と云ふ若いお母さんの良心を刺戟して、坊やも何か……と云ふ氣が働く。郵便局の隣りへパン屋なんかも何となく客が引けさうに思はれる。と云つて肉屋の隣りへ八百屋と云ふ譯にも行くまいが、商賣を始めるなら、近所隣りの商店と、顧客心理とを考へて、靴屋の隣りで帽子とネクタイを賣る位の頭は働かして欲しい。こんな風に考へて銀座通りや神樂坂通りを整理して行つたら、デパート恐るるに足らんやである。月給取りなら知合ひの煙草屋等へ月給袋を其儘融通し、毎日の賣上げから生活費を貰つて來る位に金を働かしたら、例へ五分でも三分でも金は殖えて來る。斯うした運用は其人の立場々々で素晴らしい思ひ着きが出て來る筈、三井だつて二代目の八郎兵衛さんは斯うした空氣の中で教育されただけに、延寶元年、京都へ乗り出して、呉服と兩替の店を始め、大阪、江戸の二箇所支店を作つた。兩替店と呉服店、これまた味つて見るべき商賣ではないか。

宣傳のコツ

○月○日 月曜日。

今朝は又恐ろしく早くからAの奴が訪ねて来た。彼奴は何でも根掘り葉掘り聞く奴なので、餘程暇のある時でないとは應對してやれない。ところが今日は恰度誂へ向、家のも達三越へ買ひ物に行くと云ふので留守番を仰せつかつて居る。Aの奴には絶好の機會だらう。話はいつもの金儲け話だつたが。

「私は嘘だと思ひますが、白木屋の先祖と云ふのは煙管屋ださうですね」と彼は突然云ひ出した。

「ほうこれは初耳だね」

孫六ともあらうものが、こんな話を知らない筈はないと云ふやうな目つきをして、俺の顔をじろじろ見て居たが、

「何でも昔のことださうですが、今年のやうな緊縮時代だつたんですね。贅澤品は一切禁止、煙草まで吸ふことは罷りならんと云ふ嚴重なお觸れで、煙草入れや煙管を持つて居るものは酷いお咎めにあつたものださうです」

「ふむふむ」

「そこで懲じ持つて居て咎められるのも氣が利かないと云ふので、みんな溝の中へ捨ててしまつた」

「なるほど……」

「そこで白木屋の祖先だか、番頭さんだか知らないが、煙草の好きな人間はどうしても煙草を止める譯には行かぬ、屹度今に吸ひ出して來ると考へたんですね。溝へ捨てた煙管を片つばしから拾つて歩いた」

「ふんふん」

「見込通り、暫く經つとぶかりぶかりと始まつて來た。其時に煙管を賣り出して素晴しく儲けたんださうです」

「成程ね、そんな事があつたかも知れんが、三井の金の延棒と同じやうに、講釋師の話ぢやないかな」

「それは判りません、しかし三井だつて緊縮時代素晴しく儲けたんぢやありませんか」

「さうさう、「我衣」と云ふ隨筆に書いてあつたね、「現金安賣掛値なし」の元祖は、元祿年中、越後屋八郎左衛門と云ふ呉服屋、本町にて仲間はずれのものなり。これに依つて駿河町木戸際に、間口六間、奥行十間ほどに住みて、絹紬、郡内、棧留、木綿染の類を仕入れ、上物はなし、上物は本町にて調へることなり。とある」

「へえ、して見ると其頃は本町に呉服屋が澤山あつて、越後屋は異端者だつたんですね」

「さうさう。ところが町人男女衣裳よき物御停止、絹以下のものに限ると云ふお觸れが出た。恰度春のことで、年始に歩くことが出来ない、仕方がないから郡内紬を求めて着るやうになつた。越後屋はお觸れの出る前に郡内や棧留をうんと仕入れて置いたから、我も我もと越後屋へ人が集まるやうになつてしまつた」

「うまくやりましたな」

「越後屋としては此機逸すべからずさ、宣傳大いに是れ努めたさ」

「へえ……？　どんな宣傳をやつたんです」

「俄雨の時に惜げもなく傘を貸してやつたんだ」

「成程ね」

「傘には大きく越後屋呉服店と書いてある。それがだんだん殖えて来て、しまひには江戸の人で越後屋の傘をささないものは馬鹿みたいになつてしまつた。だから其時分の川柳にも「俄雨振舞傘を三井出し」だとか「江戸中を越後屋にして虹が吹き」とか「越の傘かり吉原へ行つてもて」と云ふやうなのがある。つまり越後屋の傘を借りて吉原へ行けば幅が利くとまで云はれたのだから、隅か

ら隅まで宣傳が行届いたのだね」

「豪儀なものですな……其時代にね……！」

「近頃は新聞廣告と云ふものがあるから、宣傳の第一に新聞廣告へ頼る癖がついて居て、これはと思ふやうな宣傳も見當らんが、其時分の商人と云ふものは宣傳に随分苦勞したものだ。例の相撲なんか宜い實例だよ、何でも江戸中の湯屋へ若いものを二人一組として歩かしたものだ」

「ははあ、洗湯での廣告ですな」

「さうぢやない。この二人は洗湯が混んで来たところを見澄まし、今日の相撲の勝負談を始めるんだ」

「成程！」

「一人々々に最辰がある。あの手で勝つた、あの手は狡猾いとか云ひ合つて居る中に、終ひには双方素ツ裸の儘で取組合ひを始める。他の客は何事ぞと思つて仲裁に入る、大變な騒ぎをして、結局は相撲の宣傳と云ふことになるんだ」

「うまいもんですね。それから考へると現代の人達は宣傳に工夫がありませんな」

「いや、種々やつては居るが、壺に嵌つた宣傳と云ふのは少いね」

「何か思ひ着きの名案がありませんかね」

「さうさな、ものに依るが、第一、廣告と宣傳とは不即不離のものだから、此處をうまく理解しないと費用損になつて了ふ。即ち廣告は受け身、宣傳は突き身と云ふ風に、大上段と青眼の構へを一緒にする様なものだ、此處の呼吸さ……」

廣告術の呼吸

「三井の傘式のものではどんなものがありますか」

「さうさな、近頃は玩具をくれたり、包み紙へ工夫したり、燐寸をくれたりする様なことが大分行はれて居る様だが、これとてもみんなヒントが外れて居る。三井の様に先方で是非必要なものをくれるのと違ふんだから、結局どうでも宜いものを持たしてやる事になる、人に依つては却つて迷惑だと思ふものもあるだらう。茲が宣傳術の難かしいところさ」

「全くです、新聞の廣告でも、大きく出しさへすれば素晴らしいと考へて居る人が多い様ですが、新聞記事を読む爲めに取つて居るのでから、廣告はどんなに大きからうとも結局新聞讀者に取つては迷惑と云ふこととなる理窟ですな」

「その通りだ、そこで三井の傘式と云ふのが難しくなる。まあ一口に云へば、先方で是非欲しいと云ふものを探すのだな。そして買ふには億劫でなければならぬものが一番よい。例へば眞ッ暗な公園の入り口に常夜燈を建てる、それへ廣告らしくなく廣告をするとか、もう一つはお祭りの軒提灯だ。あれなんか毎年一寸風の變つたものをこしらへて、夏物賣り出しの景品にくれてやる。貰つた人はそれを軒に吊る、しまひには三井の傘のやうに、其提灯を下げなければ幅が利かないと云はれる程にするんだ」

「成程、軒へ下げた提灯が又廣告をする役目になるんでせう」

「新聞廣告だつて其通り、見る人の心を動かす様に心がけなければ、自分の自慢だけでは人に見逃がされてしまふ。それには大きな膽力が必要だ。場合に依つては他人の廣告までしてやる勇氣がなければ。駄目だ例へば石鹼の廣告をするなら、この石鹼一箇お使ひになる中に、安全剃刀の刃を何度お取換になりましたか、と云ふやうに、静かな廣告を動く廣告にして行くんだ。〇〇醬油一本お使ひになる中に味の素を幾瓶お使ひになりましたか、もよろしい。此雜誌一冊お読みになる中に幾度お笑ひになりましたか、この讀物を何分で讀み了りましたか、端書でお知らせ下さい粗景呈上致します。此本をお買ひになつた時、其書店にあと何冊ありましたかお知らせ下さいなぞも面白いぢ

やないか。返事が来たら手拭とかハンケチとかを送つてやる。それに又宣傳の意味をつけてやる。總て廣告は、読む人にやつて見ようと云ふ氣を起さすことが第一條件だ」

「仲々むづかしいものですね、全く廣告と云ふ奴は自分でするより、人がしてくれる方が利き目が多い様ですから、其のコツを呑み込まねばならんでせう」

「だから、其頃の越後屋と来たら宣傳にかけては第一人者だつたよ、江戸砂子などと云ふ本にも「江戸の駿河にも日本一があり」「夢に見てさへよいとこへ呉服店」などと江戸中の川柳家にまで詠まれて居る。他人に云はせることは自分が云ふ十分の一でも素晴らしい効果のあるものだ」

「して見ると、廣告はお互に馴れ合ひでやるのも一つの方法ぢやないでせうか」

「それも近頃やつては居るさ、賣藥の効能を病人に語らしたり、化粧品を俳優が褒めたりして居るのがある。然しああ云ふ風に見え透いたのは、もう廣告としては價値がないよ。それより新聞記事を利用するのが宜いぢやないか」

「利用すると云ひますと……？」

「震災後の事だつたかな、丸ビルで毛布やシャツの安賣をしたことがある。ところがある日のこと同業者の代理と云ふ男が現れて、お前の方でさう安く賣られては困ると云ふ抗議を申込んだ。する

と其毛布屋の云ふことには、自分は同業者ぢやない。兎に角安いものが見つかつたから、安く賣る迄のことだと木で鼻をくくつた挨拶、果は口論となり、遂に殴り合の喧嘩まで始めてしまつた。何でも二三人の負傷者まで出した騒ぎ、丸ビルの中で血みどろの大格闘が始まつたと云ふので各新聞社は寫眞班を引連れて大活動、其日の夕刊はこの記事で大半埋められてしまつた」

「はあ……素敵ですね」

「ところが其晩、喧嘩した同志は何處かで乾盃して居たんだ」

「仲裁人が出て目出度く鼻がついたんですね」

「なあに、最初から共謀の仕事さ。讀者はそんなに安く賣つて居るのかと云ふので押しかける始末だよ」

「宣傳ですね」

「さうだ、それから聯珠の名人争ひなんかもうまい調子だつたね。何とか八段と云ふ人へ何とか八段が争ひ碁を申出たと云ふのだ。これへ引掛つたのが東京の一流新聞だ。寫眞まで入れて堂々と出してくれた。然し今になつても名人が決らんとところを見ると、五目並べ普及宣傳に利用されたものらしい」

「仲々やつて居るんですな」

「アメリカでは、かう云ふ事件をこしらへて宣傳を請負つて歩く人が居る」

「へえ？ 日本でも今にそんなのが出るでせうな」

九十日の爲替

「うつかり宣傳の話になつてしまつたが、例の本論へ這入らうぢやないか」

「さうでしたな、三井は其頃兩替店もやつて居たのではありませんか」

「さうだ、越後屋は世々禁裡御所御用掛屋御用をつとめ、江戸の兩替店は、貞享四年以後幕府の爲替用達して居たとある」

「して見ると、美服停止などと云ふお觸れは出ない前から早耳で聞知り、紬や木綿を手廣く仕入れて置いたのではないでせうか」

「或はさうかも知れんが、何しろ爲替御用と云ふ奴が素晴らしいものさ、京大阪から江戸の幕府へ送る金を預つて、九十日目に納めればよいと云ふのだから、九十日間は無利子の金を動かせるんだ。今日でも約束手形に九十日を最高期限としてあるのは、この九十日から割出したのだとも傳へられ

る」

「九十日間無利子と云ふと大きなものですな」

「それは大變なものだ。然し三井は其金で呉服物を仕入れ其品で充分な利を見てから幕府へ納めると云ふ風な事をして居たんだ」

「これなら厭でも金が儲からずには居ませんな」

「つまり運用の妙さ、其時代としてさう云ふ組織が許されて居たんだから、扱つた三井が賢明と云はなければならぬ。現在だつて地方の人が、東京を相手に商賣をするとしたら、三井の眞似も出来んことはあるまい」

「どんなことです」

「例へばそれは農産物即ち八百屋ものでも、鶏卵商でもよい。東京へ荷を出して東京から金を取つて行く商賣があるとしたら、附近の小間物屋なり、荒物屋なり呉服屋なり、これは又東京へ金を送つて村方から金を取る商賣の人と結託して、東京で受け取る金で仕入れをする。賣り上げた金は毎日鶏卵屋なり八百屋なりへ渡して買ひ出しさせると云ふ風にすれば、東京へ出て来る人は一人で済む。本來なら仕切を取りに来る人と、仕入れに来る人と二人が旅費をつかはねばならぬところだ、

それが一人の旅費で済むとなれば、それだけ既に儲けぢやないか」

「ははあ、ケチな三井ですな」

「それがね、仲々ケチぢやないんだ。俺は常にさう思つて居る。不景気で仕事がないの何のつて云つて居るが、やるべき事業は澤山ある。これは三井三菱の仕事になるのかも知れないが、差しづめ合理局あたりでやらねばならぬ仕事だ」

「へえ……どんなことです」

「集金會社だ。見給へな、月末近くなると、東京から汽車に乗つて地方へ出て行く人の半數は集金人だぞ、小間物屋、藥屋、荒物屋、新聞社、雜誌取次店、あらゆる人がみんな二等車かなんかで別々に旅費をつかつて行く、これを一纏めにすれば一人で済むぢやないか。百人百色の商賣でも、金を集めるのは一人で済む、こんなところに冗費が随分あるぞ。放送局あたりだつて一人一圓の聴取料を、六十萬人の人から取立てるとしたら一ヶ月六十萬圓だ。これで幾何の費用をかけて居ると思ふ。別の人を頼めば月給をくれて仲々能率が上らない。振替貯金に頼めば何割かの金を取られて成績が思はしくない。こんなのは差しづめ集金會社のものだ」

「成程名案ですな、集金會社なら第一情實が許されない。滞れば直に方法がつく。經營の合理化で

すな」

「ところが日本人にはそれが仲々出来ないことさ、早い話が新聞なぞと云ふ文化の尖端を行く事業でも、五種の新聞を取れば五人の配達が出来る。一人で済むのに一種一人と云ふ贅澤さだ、こんな例は有らゆる職業にあるよ」

「成程無駄排除を考へると随分あるでせうな」

「電車の交叉點へ行つて見ると、交通巡查と旗振とが同じやうなことをして居る」

「はッはッはッは、あるもんですな」

着眼百パーセント

「だが然し、どんな仕事でも目のつけどころと云ふことが大切だ。三井だつて御一新の當時、先代の高朗さんが大奮發をやらなかつたら、今日の三井は無かつたらう」

「へえ、それは一體どんなことです」

「その時分三井は禁裡と幕府と双方へ御用達をして居たが、大きなことをする人は又格別なものだ。薩長と徳川方と兩方へ隠密を入れて置いた。もともと幕府の方が大さつばな連中が多いので、儲

けが多かつたらしいし、又あの時分の徳川と來たら、何しろ三百年の榮華を見せて居るのだから、一朝にしてあんなことにならうとは思つて居なかつた。そんな譯で勢ひ薩長軍へよりは徳川方へ融通する金の方が多かつた。京洛の風雲急を告げる明治元年正月三日、例の伏見鳥羽の戦の時などは、會津方からの御用金一萬兩を馬の脊に載せて、番頭の吹田四郎兵衛と共に鳥羽の噉へ差しかかつた」

「少し話が劇的になりましたね」

「まあ聞き給へ、其日は未明からの濃霧だ、脚絆甲掛甲斐々々しい三井高朗は、馬の鈴を布に包んで、會津松平容保の陣所を差して乗り込んで行く、ところが霧の爲に二間と先は見えぬ光景、小高い丘に上つて、小手を翳して見るやうなもの、それが薩長の座所か、徳川勢の座所か判らない。そこへ霧の中から穂のやうになつて轉げ出して來た一人の男がある。これこそ三井の隠密として働いて居た陸奥陽之助だ。後の外務大臣陸奥宗光もこの時分は三井の爲めに一臂の勞を取つて居た」

「へえ……？ あの人がね……」

「陸奥宗光は、三井高朗に向つて時代の推移を物語り、遙か禁庭の森を指して、天に二日なし地に二君なし、此處が思案のしどころだと、暗に徳川方の凋落を云つて聞かした」

「成程ね」

「三井高朗は暫らく黙然と腕組をして居たが、「吹田ツ、薩摩屋敷へ馬引けツ」と決然たる覺悟を示し、徳川方への軍資金を禁裡方へ差し向けてしまつた」

「大英斷ですな」

「薩長方では大久保利通が總司令官となつて居たが、三井の心事を疑ひ千兩箱を開けさせて一々柱や敷石へ叩きつけて試したさうだ」

「さうでせうね、今迄幕府方御出入りのやうにして居る三井が、耳を揃へて一萬兩と云ふ金を持つて行つたのですから、無理もないことです」

「大久保さんは感激したさうだね、三井、お前は本當に禁裡様へ御奉公をする氣になつたのか、と云はれたさうだ。この時三井高朗は襟を正して、三井の財産のあらん限りは……尙ほ且つお役に立つと仰有るなら、三井一門の命も何で惜みませうぞと、萬感交々の聲で云つたさうだ。大久保さんはいきなり三井の手を取つて、嬉しいぞ三井、この戦さは屹度勝つて見せる。錦の御旗が日本國中に靡くのは、あと幾日に迫つて居る。御奉公をして呉れ、と涙を流したさうだ」

「美談ですな、つまり三井千年の基礎は此時に打込まれたと云つても良いのですな」

「全くだ、三井の見込みは正義を目標にしたところにある。何でも正しいことを基礎として打算す

れば間違はない。利の多い幕府方に酔はず、犠牲を覚悟で勤王方に奉仕した三井の方針が、今日の富をなさしめたものと斷言出来るね」

「けれども、其後政商として可なり種々な噂を撒いて居るぢやありませんか、例の小野組、島田組などの倒れる時に、獨り三井だけが政府筋から教へられて倒れずに済んだと云ふやうな……」

「それは善因善果さ、さう解釋する方が妥當だ、それは商賣だから、種々の事はしたらうさ、それにしても、「盡忠」と云ふ大きな觀念を目標として居る出發點を買つてやらねばなるまい。我々階級にしたところが、一寸したうまい話に乗り出して、結局資本も子も失つてしまつた實例は澤山あるけれど、正しい觀念で働いて居る人に失敗した例はないからね。然し今日の天氣豫報と同じやうに當つてないかも知れんよ」
「いや、我々には結構ですな」

住友發祥の卷

時勢に棹す

○月○日 金曜日。

今日は珍らしく訪問客がない。ヤレヤレと救はれたやうな氣安い朝であつたが、其の安心も束の間で、俺は矢張り眼が覺めれば、誰か知ら客に逢はなければならぬ運命の星の下に生れて來たと見へる。

暫く顔を見せなかつたSが、漂然とやつて來たのである。まるで風のやうに氣まぐれな男だ。だが、Sは俺にとつては、少しも氣の置ける相手ではない。彼はまだ若くてスポーツマンらしい頑健な體格の持主であるが、どこか大風な、糞落着きに落着いたところのあるのは、矢張り育ちの爲だらう。暗闇から牛を引き出したやうに、モツソリとした男ではあるが、それだけ與へられた仕事に對しては忠實で、コツコツと刻明にやつて行くと云つた風な男だ。

従つて、彼は才子とは云へないが、近代的な明るさ、朗かさ、さう云つた色彩を持つて居る點は、認めてやらなければならぬだらう。俺はこのSのやうな男と話をするのが好きだ。
彼の鈍重な顔の表情の陰には、何の野心も讀めないが、かう云ふ男に限つて、飛んでもない大き

な望みを抱いて居たりするのがよく世間にある例だ。が果してSの奴、そんな何か大きな希望を心ひそかに育てて居るかどうか、そこまでは俺の知つた限りではない。兎に角うらかな今日の朝を、嫌な客に煩はされることなく、彼のやうな青年の現れて呉れたことは、俺にとつて決して悪い辻占ではないと考へる。

「何うかね、近頃は……」

「いや、どうもさつぱり元氣がありません。何處へ行つてもばつとしない話ばかりでしてね、こいつは世界的の不景氣だつて云ひますがね、悪い世の中に生れて来たものだ、悟らない氣がしないでもありませんよ」

「いやに悲觀してゐるね。何時もの君には似合はない」

「そんな呑氣なことを云つて居られりやいいんですがね。此處のところ實は四苦八苦で大童になつてやつては居るんですが何うも……」

「弱氣ちや駄目だね。君の體格が物を云ふよ。押したまへ強氣に……」

「勿論、私も其氣ですがね」

「……が、世の中が悪いと云ふのだらう。矢張りそれが弱氣だ。君なんぞ若いし、教養もあり、體

格も出來て居るしするんだから、さう氣が弱くては困るね。世の中がよくないからと云つて其渦に卷かれてしまつては駄目だね。もつと高いところから世の中を見れば又別な考へが浮んで來ないとも限らない時勢の流は何うにも仕様のないものなのだ。だから其流れが何う動くか、それをハツキリと見極めることが一番大切だと思ふね。總ての金儲けの秘訣はそこにあり、成功の因はそこにあると云つてよいのだ。時勢の流をうまく掴むことが出來た者が成功した例は昔から幾らでもある」

「然し、仲々難かしいことすな」

「難かしいと思ふから尙一層困難に考へられるのだ。そこでも強氣で押すさ、殊に君のやうな男はね……ハハハ……」

「いや、何うも……」

「三菱があれだけの富を作つたのも其時勢の潮流をうまく游泳ぎ切つたからだし、日本の三大富豪の一人に數へられる住友の先祖が、あの大身代の基礎を築いたのも、時勢を洞察する明があつたらだと云ふことが出来るのだよ」

由緒は古く

「住友は三菱と違つて昔から日本の富豪だつたのではないですか、三井や鴻池の様に……」
 「さうだ。其古い富豪としての名譽を住友家の祖先が築いたのは戦國時代、つまりあの暗黒時代に武士としての立身出世を夢見ず、素町人となつて、経済的成功にと進んだからだと言ふことが出来るのだ」

「あの時代での成功は武士となることが一番近道だつたのですがね」

「そこなのだ。住友家の祖先が何故武士とならずに町人になつたかと云ふ、これはよく考へて見る價值があるね。幾ら戦國時代だからと云つて、ただ武士になりさへすれば偉くなれるとは決して居なかつた。殊に天文十二年、ポルトガル人から鐵砲と其の使用法が傳へられて、我國の戦術にも築城法にも大きな變化が來た爲に前から大諸侯と大諸侯の間に挟まれて居た小大名は、一層其の領土の安全を圖る事が難しくなつて來たのだ。そこで其の大勢を達觀する事の出來た小諸侯は武器を捨てて歸農し、大地主となつて平和な後世を願ふか或は町人となつた。そんな時代だ。秀吉のやうな不世出の英傑でなければ、武士としての榮達は望めない時代、寧ろ市井に隠れて健實な経済的成功を求めた方が伶俐だ。さうした時勢の動きを見て由緒正しい武家の出でありながら町人となつた住友家の祖先は確に一見識を持つて居た人物と云ふことが出来るではないか」

「すると、住友家は戦國時代の武士が町人に身を落してそれから財産を築き始めたのですね」

「由緒は仲々正しい。三井家は藤原氏の出だが、住友家は平氏だ、葛原親王の孫高望王の第五子村岡五郎良文の第十六世の孫を須美平内友定と云ひ、其の子小太郎忠重が父の姓と名とを取合はせて住友と稱したのだ。それがつまり住友姓の起りで、小太郎忠重は室町將軍から備中守に任ぜられ、其子頼定は從五位上に叙し、備前守に任じた。それから三代後の信定は、入江土佐守と稱して賤ヶ嶽の戦で戦死した豪勇の武士だつた。其子の政俊は柴田勝家に仕へて北莊で討死し、政俊の子の政行は結城秀康に仕へたが、慶長七年三月に死んだ。そこで其妻の淺井氏は二人の子を連れて京都へ出て來た。兄を與兵衛政明と云ひ弟を小次郎政友と云つた。父の遺言で兄は僧籍に入り、弟は住友姓を冒し、町人となつて書と鐵を商ひ、其傍ら藥種商を營んだのだ。つまりこれが住友家が町人としての第一歩を踏み出した其の最初だつた。屋號は富士屋と呼んだのだ」

「先祖の武士としての悲惨な經驗が町人にさせたのかも知れませんね」

「勿論それもあつたらう。然しこの小次郎政友と云ふ人は確に時勢の先を見る明のあつた人物に違ひない。彼はやがて町人の時代、黄金の支配する時代の來ることを豫想して居たのかも知れないのだ。この人は後に世を一子政以に譲つて隠居して臨西と號したが、別に其女に姪を養子として迎へ

て一家を起して友以と名乗らせたのだ。實子の政以は莊兵衛と云つて京都家を嗣ぎ、養子の友以は理兵衛と云つて寛永七年大阪に出て一家を起し泉屋と號して銅商を營んだ。これが大阪の住友家の起りなのだ……」

「すると、大阪の住友と云はれたのですから、其の養子の方が本家より後には大きくなつたのですね」

「さうだ。養子の友以の實父の理右衛門と云ふ人は京都五條の銅商人だつたのだが、京都と堺とを往來して外商と取引をするうちに天正十九年、南蠻人白水と云ふ者から粗銅から銀を吹分ける法を學んだ。これが抑々住友家が鑛業方面に乗り出す基となつたと云ふことが出来るのだ」

「其の粗銅分析術で餘程儲けたのでせうね」

「勿論儲けたね、何しろ粗銅から金銀を取ることはそれまで誰も知らなかつたことだつたのだ。だから外國貿易が開けると、オランダ人やスペイン人、或ひは支那人は争つて日本の銅を求めた。其銅から金や銀を吹き分けることを學んだ理右衛門は直に諸國の銅を買集め、之を純銅と金銀とに分析して巨利を博したことは云ふまでもない。慶長七年豊臣秀頼が京都の大佛を再興した時には其の銅御用を命ぜられ、又あの有名な「國家安康」の銘を刻んだ問題の鐘の鑄造にも彼は少からぬ銅を

獻じて居る程だから、彼は製銅業者としての地位は實に堂々たるものだと言ふことが出来るのだよ」

「で理右衛門は其の外人から教へられた粗銅の吹分け方を公開したのでせうか」

「いや、門外不出の秘密だ。其の方法は今日でも尙ほ住友家の秘密として堅く守られて居るらしいのだね」

「そんな秘密を握れば、實に大きな金儲けが出来ますね」

「されはさうだ。内爲めに理右衛門は日本屈指の銅商人になつた、然し、そんなことよりも彼が銅の商賣に着眼したと云ふところに、凡庸でないところがあるね。其時代は金銀銅が非常に重視されたことは云ふまでもない。戦ひの裏に黄金の力を据ゑなければ、最後の決定的勝利は望めない。一つの鑛山を争つて多くの武士の血が流されたことは數へ切れない程あつた。さうした時代の流れ動いて行く潮流に乗つて、はつきり其進むべき道を銅に求めたと云ふこと、それは取も直さず理右衛門の偉いところと云はなければならぬ。

特權に恵まれて

「理右衛門の後を繼いで、南蠻銅吹き分けの法を傳へた大阪住友の初代理兵衛、此人も亦仲々の人

物だつたと云はれて居る。其頃つまり寛永十年頃から漸く嚴重になつて来た外國貿易の取締である。其爲めに住友家も二三年の間、貿易を止められたこともあつたが、寛永十五年江戸の評定所から銅の特定貿易商人として特許され公然と鎖國の日本にあつて、外國貿易に従ふことが出来たのだ。この時幕府に選ばれた銅の特定貿易商人は、全部で二十二人であつた。

最初に幕府から鎖國令が出て海外貿易を嚴禁された時は、流石に豪腹な銅商人達も顔色を變へたのも無理はなかつたのだが、それから三年の後、理兵衛等の運動で遂に貿易を公許され、然も特定商人として極限されたことは非常に好都合だつた。彼等は儲けた、殊に理兵衛は其の筆頭で旭日の勢で家運は隆昌に赴くのだつた」

「では、幕府の鎖國方針で一時貿易が禁止されたのが却つて幸となつたのですね」

「さうだ。だから方々の銅商人が我も我もと幕府に押かけて来て、其の特権を賦與されようと努力したが孰れも成功しなかつたのだ」

「非常な特権ですね」

「さうかも知れない。然し、住友家つ財産は其爲めにぐんぐんと伸びて行つたのだ。初代理兵衛友以の後は、寛永二年四月第五子の吉左衛門友信が家を嗣いだ。この友信の代になつてから、銅の

分析業から貿易業に進んだ。稼業は更に進んで、鑛山の經營に手を擴げて来た。そこで友信が先づ第一に眼を着けたのは、我國に於ける銅坑として最も古い歴史を持つて居る備中の吉岡鑛山だつた。この吉岡鑛山は其頃、坑間の湧水が多く、幕府でも持て餘して居たので、それを一ケ年運上銀一千七百十枚の契約で請負ふことにしたのだ。で、作業を始めたのは、天和元年二月であつた。この銅鑛を手に入れた友信は、直に水抜工事に着手し、諸般の設備を改めたので追々其の産額も増して来るやうになつた。友信は、これだけの仕事をすると、世を長子の友芳に譲つて、京都に隠退してしまつたのだつた。吉岡鑛山經營の難事業を繼承した新しき住友の當主は未だ漸く十六歳の少年だつたが、この友芳こそ、住友家中興の祖と云はれる程の人物であつたのだ。この友芳の時代に、初めて後年住友の大をなした別子銅山が手に這入るやうになつたのだつた」

「中興の祖と云へば、三井家の高利のやうな人物だつたのですね」

「さうだ。彼は實に俊敏な才物であつた。彼は何うして別子銅山を手に入れることに成功したのかそこには實に波瀾に富んだ様々の物語があつたのだ。そして其等の總てが大住友王國建設の基礎となつたと云ふことが出来るのだ」

「それでは住友家の眞實の基礎は、この友芳の時代に定まつたと云ふことが出来るのですね」

「さうだ、何百人の人命を土臺として築かれた富の土臺だとも云へる。住友家が別子鑛山を開掘するまでには多くの真赤な血潮を流すやうな悲劇も繰返されたのだからね」
「そろそろ劇的なクライマックスに這入つて來ましたね」

別子銅山開發

「……抑々住友家の弗箱である、そして又惱みの種でもあつた別子銅山が何うして住友家のものとなつたか——これには面白いエピソードがあるのだ。まあ、聞き給へ」

「……伊豫から參つた者、重右衛門どんにちよつくら御目にかかり度う御座んす」

さう云つて備中の吉岡鑛山へ或る日訪ねて來た旅の者、重右衛門と云へば、云ふまでもない此鑛山の總支配人、田向重右衛門の他はない。

旅の男は慇懃に頭を下げた。

「立川銅山の切場長兵衛と申す者、是非とも御聞に入れ度いことがあつて罷り越したと御傳へ下され」

眼の鋭い、どこか無氣味な感じのする男だつた。何か重大な用件らしく申入れた切場長兵衛の言葉、それが重右衛門の興味を呼んだのだ。

「どんな用事か兎に角會つて見ませう」
と云ふので旅の男を上へあげた。

「四國には、まだ誰も知らぬ大きな大銅脈が地の底に漲つて居ります。それを知るはこの長兵衛一人だが、山を掘る資本が御座いませぬ。で御當家で……」
と云ひさして、聲を呑んだ。

「伊豫の……それや大阪屋さんの立川銅山とは又別に……」

重右衛門は不審氣に眉を寄せた。

「如何にも、立川鑛山から別子山に續く峯は何れも鬱々と木が繁つて居りますが、別子に續く足谷山ばかりは昔から一本の木も育たぬところ、禿げ山と人は呼びますが、私は永年の經驗で其下には立川に優る大きな銅脈が颯々と流れて……」

「長兵衛殿、暫く……」

さう云つた重右衛門の眼は怪しく輝いて居た。

——伊豫の立川鑛山は同じ特定銅貿易商二十二人の一人大阪屋久左衛門の經營で、其の開發にかかるものなのだつた。切場長兵衛は其立川鑛山に備はれて居た男だが、それが何うして住友へ其の秘密を賣りに來たか、そこには何か深い理由があつたらしい。

が、それから幾日かの後田向重右衛門は長兵衛其他の専門家を從へて伊豫へ渡り、大阪屋の注意を避けて裏山から足谷山に這入つた。

そこには勿論有望な鑛脈があつた。が然し、これは今日の學問から見れば、大阪屋の立川鑛山と全然同一脈のものであつて、若し其の時代に今日の制度が行はれて居たら、それは云ふまでもなく大阪屋のものに違ひはない。がそんなことを考へて居る暇はない。住友家では直に幕府に開掘を願出たが、運上金の問題で一時は却下されたが、再度の願出で許可されたのだつた。

そこで、新に開坑された別子銅山には、吉岡鑛山から杉本勘七と云ふ老練家を派遣して其の仕事管理させることにしたので、大阪屋は別子が日に日に繁榮して行くので面白くなかつた。云ふまでもなく、それは別子と立川は同一鑛脈である上に、別子が有望なのを住友に密告したのが自分の山で働いて居た長兵衛なのだ。

この反目から遂に大騒動が持ち上つたのだ。立川鑛山では命知らずの鑛夫を煽動して暴動を起し、

火を放つて別子鑛業所を襲つたのだ。

此時、別子の支配人杉本勘七は部下百三十餘人と共に暴徒と戦つて火に焼かれて死んでしまつた。別子は立川より高い頂にあつたのだ、下から吹き上げて來る風に乗じて火を放されては遁れる道はたかつたのだつた。

「斯うした悲劇はあつたが、別子銅山の成績は益々よく、後に大阪屋から立川鑛山を譲り受けて愈々大きく肥つて行つたのだつた」

中興の祖友芳

「住友の別子銅山經營で最も惱んだのは鑛坑の排水工事と鑛夫其他現業員の糧秣の供給方法だつた。經濟組織と交通運輸の不便な當時として、一ケ年九千三百石餘の飯米を一町人の分際で、年にそれだけの米を働かすことは容易なことではないのだつた」

時は元祿の中頃、柳澤吉保が幕府に信を誇つて居た時代である。其の勘定奉行藤原重秀から住友の當主友芳に召狀が來た。

用件はと云ふと吉岡鑛山の再興だつた。この吉岡鑛山は住友が引受けて居たものだが、排水事業

に惱まされて遂に投げ出した鑛山なのだった。

それを幕府はもう一度再興せよと云ふ。幕府は銅の不足に悩んで居たからだ。で無理にでも住友に押しつけて、少しでも銅を掘り出させようとするのだつたが、これを昔のやうな鑛山とするには恐ろしく大きな資本を必要とするので到底一住友としては出来ない、と八方陳辯したが聞かれなかつた。で已むを得ず友芳は引受けることにしたが其の代りとして別子、吉岡兩銅山に金一萬兩の貸付を受けることと、同時に、兩國の天領の中から米六千石、十ヶ月延買の條件を持ち出したものだった。然し、荒れ果てた吉岡鑛山は、結局申譯だけ其の稼業を續けただけだった。

「友芳と云ふ人は仲々腹の出来た人のやうですね」

「腹は勿論出来て居た。正徳四年、寶永の悪貨の改鑄を計畫した時、彼は迎へられて淺草諏訪町の吹所に立籠つて熱心に其の仕事に従事したのだ。其間三年、忍苦使命を果して居る友芳は質素であつた。衣食は僅かに飢寒を凌ぐを以て足れりとしたと云ふ程であつたと記されて居る。同じ時代の大富豪と云はれた大阪の淀屋辰五郎が關所となつたり、紀い國屋文左衛門が柳澤や荻原の退官で零落し孰れも哀れな末路を辿つて居るのに、彼ばかりは大きな政變にもびくともせず、家運愈々隆盛になつて行くのだつた。これは友芳と云ふ當主の人物が凡庸でなかつた唯一の證據とも云へるでは

ないか……」

「それでは住友家はこの友芳の時に、ガツチリと財産の基礎を固めた譯なのですな」

「さう考へても差支へはないだらう。然し、住友家の危機は其後何度もやつて來たし、其の基礎はこれより前に築かれて居たのだ。ただこの友芳の俊敏の商才に恵まれたのと、時勢の流にうまく泳ぐことが出来た才と人徳とが、彼を中興の祖とまで高く評價されることになつたのかも知れないのだ」

「それだけ確固と築いた住友の財産も危かつたやうな時があつたのですか」

「一步を誤れば淀屋や、紀の國屋のやうな哀れな末路を辿らなければならぬやうな危機に遇つたことも一度や二度ではなかつたのだ」

「それは何時だつたのです」

「幕末さ、三百年の封建文明が脆くも崩れようとする直前、そして其後に來る新しい時代、混沌の社會、暗黒の天下、騷亂の幕末、維新の怪雲の下にあつて、住友は如何に苦しい悩みを惱んで來たか、其の時代こそ住友家の受難時代だつたのだ」

「さうですか」

「甚兵衛友半の時代になつて別子銅山は使ひものにならなくなつてしまつた。掘鑿が水平線以下に達して大湧水の爲に排水工事に巨費を投じても收支つぐなはなかつたのだ。これは大きな打撃だつた。其爲めに急に家運は停頓し、一轉して衰運に向ひ出した。時も時、幕府の財政は愈々窮迫して來て、或は冥加金、或は御用金と云つて大阪の富豪を目的に頻々として收用令が來た。久しい關係に加へて諸藩から資金調達に關する交渉——さうして天保、弘化の頃には負債山と積んで住友の家運は全く衰へてしまつたのだつた。この時起つて回天の雄を振つて住友家を昔の繁榮に引戻したのが有名な廣瀬宰平であつた——」

「お家の忠臣ですな」

「さうだ。若し幕末維新のあの恐怖時代にこの人物がなかつたならば、今日の住友家は果して何うなつて居るか恐らく豫想出來なかつたに違ひないのである」

「種々それには興味のある話もあるでせうね」

「勿論ある。だがそれを話すのはまだ早いよ。發祥の巻を一足飛びに飛び越してしまふ譯には行かないからね」

「然し、其の廣瀬宰平と云ふ人があつたればこそ、住友家も危機を脱れることが出來たとすればそ

れは住友家にとつては再生の恩人であると云はなければなりませんね。で一體其の廣瀬と云ふ人は何んな人物だつたのです」

怪物廣瀬宰平

「廣瀬宰平と云ふ人は、其の叔父の治右衛門と云ふ人が別子銅山の支配人だつたので、其叔父の世話で勘定場に丁稚小僧として傭はれることになつたのだつた。それが十一歳の時以來、命知らずの荒くれ男を相手に事務をとつてゐる番頭や手代に追ひ使はれながら大きくなつて行つた。勤続十數年、手腕を認められて住友江戸支店の支配方廣瀬義右衛門の養子となつて、それから度瀬姓を名乗るやうになつたのである。

宰平が別子銅山の總支配人になつたのは三十九歳の時だが、其時恰も幕府は長州征伐の大軍を山陰山陽の兩道に集中したが、その結果中興の祖友芳以來續けられて來た銅山へ拂下の幕府の貢米が來なくなつた。

これには彼も蒼くなつた。一山の凡そ五千に餘る人々の命をつなぐ米の配給が續かなくなれば勢ひ今までより高い米を買入れて、それを矢張り高い値段で鑛夫達に分け與へねばならぬ、かと云つ

て給料は上げられない。鑛夫の不平はやがて不穩の形成を孕んで来る。

だが、天下の形勢は日々に急迫を告げて別子銅山の米の問題になぞかまつて居られなかつた。

この時の罕平の苦勞は一通りでなく、江戸では今澤伊兵衛が幕府に運動をする。さうしてやつと買米拂下の舊の制度に歸つたのが慶應三年の春だつたが、この時は八千三百石のうち六千石だけを貸下げることになつたのだ、それでも住友家の人はほつと安堵の胸を撫下したと云ふ程の困りやうだつたのだ。そんな時代の住友家の窮乏は實に見るも慘たるものだつたのだ。

「あの明治の政變では、多くの舊幕時代の財閥がバタバタと倒産したことは想像出來ますね」

「さうだ。諸大名の藏元、掛屋を業として居た大阪の富豪はバタバタと潰れた、天王寺屋、加島屋、平野屋、炭屋、茨木屋等、孰れも鴻池住友に次ぐ資産家だつたが皆潰れた。住友とてこの財界の大渦に巻き込まれないで居る譯はなかつた。諸大名との間の貸借關係は一切無効となり、貨幣の信用は失墜する。物價暴騰——斯うした時代に、別子銅山を持堪へて行くと云ふことは、一通りの苦勞ではなかつた。住友家はこの時其の銅山へ送る千兩の金にも困つたのであつた。この時、別子銅山を十萬兩で賣つてはと話を持ち込んで來た者はあつた。が廣瀬罕平は頑強に頑張つて動かなかつた。其頃の住友家としては、十萬兩の現金は喉から手が出る程欲しい金だつたのだ。若し其時別子

を賣つてしまつて居たら、住友の今日のあの力強い強大な財力は、生れて來なかつたと云ふことが出來よう。廣瀬は苦しい現在より先づ五十、百年後の將來を望んでゐたのだつた。此廣瀬は後に明治政府から、別子銅山が幕府の財産かと怪しまれて差押へられた時、堂々と主張を述べて其の解除に成功したり、同様大阪支店の差押へもなんなく解決をつけた、其手腕實に恐るべきものがあるのだつた。この時彼は初めて岩倉具視に逢つたのである。この維新の危機を脱した住友家は、この先の第一をしつかりと踏みしめて行つた。其お守役は云ふまでもない廣瀬罕平だ」

「若し廣瀬が居なかつたら、或は住友家の財産は、其儘薩長の手に收められてしまつたかも知れなかつたのでしたね」

「さうだ。それが而も實に幸運なことには、斯うした産業方面に理解のある土佐藩の手に依つて行はれただけに都合がよかつたのだ。其時の差押へ役が、後の三菱の大御所となつた川田小一郎だつたと云ふから面白いではないか」

「わかりが早かつたのでせうね」

「勿論さうだ、川田には理解があつたし、廣瀬の主張も堂々としてゐたのだからね」

「何と云うても危いところでしたね」

「さうだつた。さうしてこの廣瀬が當主を輔佐して、其の剃刀のやうな鋭い切れ味の商才を縦横に振つて、日本の財界に一大王國を築くまでにしたのだ。彼は寢食を忘れて住友家の爲めに盡した。彼の努力がとりも直さず今日住友家ある盛運の基礎を打開したことは云ふまでもないことであるが然しそれだけ彼は傍の人々からは嫌はれ恐れられた點もあり、主人でさへ彼のやり方に面白くない感情を持ちながら、其の道理と家を思ふ志に打たれるのが常だつた。さうした宰平の努力——それが、今日の住友家を作り上げる基となつたのだ」

「一人の人才は、實に尊いものですね」

「さうだ。國亂れて忠臣出づと云ふがね、全くさうだつたよ。これと同様のことは、三井家の場合にもある。然し住友の廣瀬宰平の如きは又別と云つてよい。殆ど創業と同様の苦難を嘗めて來て居るのだからね」

「全く住友家は廣瀬に感謝してよいと思ひますね。然し由來住友家は、三菱や三井等とは違つて何處までも地道に、銅商一點張りで鑛山事業と貿易事業で、着實な金を儲けて來た家だと云へますね。商人の腕と努力で——さうした強いねばりがよく見えるやうに思ひます」

三菱發祥の卷

時勢を洞察する

○月○日 月曜。

實に好い天氣だ。月曜日の朝の晴れたのは何とも言へない新鮮な氣持がする。一週間の仕事初めにこの清淨な空の色を見ると、俺のやうに日曜も月曜もない程忙しいものにとつても何か知ら改まつたやうな氣持になる。朝つばらから例に依つて訪問客だ。だが今朝の客は下らない長話に時間をつぶされる心配のない男だ。

用談は五分間で結構と、テキパキと片づけて行く種類の男だから、簡單明瞭に話は済んでしまつた。世間には世間話をだらだらやつて、漸く用談へ入る頃になるとお互の時間がなくなると云ふやうな人が多いが、此男は用談を先にして、どうでも良いやうな世間話へ如才なく親しんで來るのだつた。其話の中へ飛び出したのが三菱の鼻祖岩崎彌太郎のことだ。

「あの人の金の儲け振りは、氣持が良い程デキバキとやつたちやありませんか」

「さうだ。あの人の仕事には凄味があつたな」

「腕の冴えたビジネスマンだつたんですなア」

「さうも云へるが、ありや實際財布の英雄だよ」

「あの彌太郎と云ふ人は、もとは侍だつたさうですな」

「さうだ、坂本龍馬と同じ土佐の藩士だ。生國は土佐國安藝郡井ノ口村父は彌二郎と云つて代代郷士だ。七歳にして句讀を習つたと云ふから、昔のことだ、神童とか何とか噂されたことだらうよ。十四歳の時、藩主山内養徳公の御前に召されて、詩を賦し金を賜はると傳記に記されて居る位だから頭もよかつたのだね。今時の子供のやうに、中學校の入學試験に、口頭試問に呼び出されて教師の前で震へるやうな、青瓢箪でなかつたことは確かだね。その位の男だから、若し商人にならずに、維新の風雲に乗つて志を官界に立てれば、相當の大物になれた人物に違ひないのだ」

「その位の男が、何故又商人になんぞならうと思つたものでせうかな、今の世の中なら當り前のことだが、其の當時の士の氣風から考へて何うもちと合點が参りませんわえ」

「尤もな質問だ。彌太郎が何故兩刀を捨てて前垂れ掛の商人になつたか、これにはそれ相當の理由

があるのだ。當時彌太郎は、藩主容堂公に従つて江戸に来て、安積良齋の門に這入つて居たのだ。ところが彼の父の彌二郎と云ふのが、酒癖が悪くて、その酒の上の間違ひから郡代奉行に召捕れて牢獄に叩き込まれてしまつたものだ。その報せが江戸の彌太郎の耳に這入つたので、彼は取るものも取りあへず十三日の間、夜晝ぶつ通して郷里に歸つた。實に恐ろしい精力だ。彼は色色と郡奉行にかけ合つて、父の宥を訴へたが駄目だ。そこで彼は憤慨の餘り夜中に奉行所の門柱を削つて、

官以賄賂成

獄因愛憎決

思ひ切つたことを書いたものだ。そこでこの酬いは觀面にやつて來た。直様彌太郎も捕まつて牢獄に投げ込まれてしまつたのだ」

「昔の奉行には、よくあるやつですな」

「そこで、彌太郎獄中でしみじみと考へさせられたね。理窟だけでは世の中では渡れるものではない。金の力で人の心は何うにでもない、金の力で要路の人間を抱き込めば、どんなことでも出来る。金だ、先づ金を儲けよう。」恐らく彌太郎はさう考へたものと想像されるね。彼の其後の仕事振りが、凡てこれを證明して居るからね」

「然し彌太郎は、其時さう簡單に決心を決めたものでせうかね」

「恐らくさうだらうよ。其時の獄中に繋がれて居た或商人が彌太郎に向つて「せめて二朱金を四斗樽に一杯入れた位の身代になりたいもので御座んすよ」と言つたと云ふ。二朱と云へば當時の最も小さな金貨だから、それが四斗樽に一杯あつたつて知れたものだ。彌太郎はそれを笑つて、

「俺が金儲けをしようと思へば、日本一の大金持になつて見せる」と言つたと云ふ逸話があるのだ。だからこの時既に彌太郎は、將來商人として立たうと志を立てて居たことがわかるではないか」「成程、そんな動機からすな、人間の氣持と云ふものは判らないものですな」

「その後彌太郎は、吉田東洋の門に這入つたが、師の東洋が勤王黨の浪士に暗殺されると、持前の負けじ魂から師の仇を討たうとして、同志の井上佐一郎と共に京都に向つたが、井上は途中で暗殺され、彼の命も危くなつて來たので大阪へ逃げたのだ。其中に世の中はだんだん變つて慶應元年を迎へる。幕府の勢は地に落ち、維新の偉業が成らうとして居た。勿論機を見るに敏な彌太郎のことだ。何時までも師の仇を討たうなどは考へて居なかつた。刻々に變つて行く時勢を洞察して、彼は敢然として帶刀を投捨て、一介の商人に姿を變へて其儘郷里へ姿を現したのだ。そこが彌太郎の偉いところなのだ。時勢の流れをハッキリと見つめたことだ。武士と言ふ封建的階級の凋落を早くも見抜いて居たのだ。」

「時勢の流れを知ると云ふことは、誰にも必要なことですね」

「さうだ、それが金儲けの秘訣さ」

最初の勝利

彌太郎が前垂掛の姿で驕然と土佐へ歸つて來たのを見て、親友の後藤象二郎は、呆氣にとられて彼を見詰めたものだ。

「貴公は一體何う云ふ氣で町人になるんぢや」

豪傑肌の象二郎は、不思議さうに彼に聞いた。そこで彌太郎は、諄々と時勢の流れを説き始めた。象二郎は一應は納得したけれども同意はしない。却つて彼に士官を奨めたやうだが、一度かうと心を決めた彌太郎の決心は、最早動かすことは出来なかつた。象二郎も到頭我を折つて強制しなかつた。

「これは少いが……」

と、百兩の金を與へたのだつた。

當時象二郎は藩の要職を占めて居たのだから、出来るなら彌太郎程の人材をあたらし一介の素町人

としてしまふことを惜んだけれども、さうなつた上は出来るだけの援助はしてやらうと考へるより外はなかつたのである。

大阪に居る間彌太郎は、其の土地の商人達と關係を結んで來たので、象二郎から贈られた百兩で土佐の國産である木材を大阪表に送り、一舉に五百兩の金を儲けた。これが彌太郎が商人としての第一歩を踏出した最初の成功であつたのである。

「土族の商法」と言つて、儲からないものに決つて居るやうに云はれて居る商買に、兎に角彌太郎がこの素晴らしい儲けをしたのは、一つには後藤象二郎の力も大いに與つて居たのである。

と云ふのは、材木の買付に當つて、象二郎の世話で藩の山方役永山と云ふ男が特別の便宜を圖つて呉れたからである。彌太郎は其儲けた金の百兩を割いて永山に贈つたのだが、最初から彼は役人を籠絡することが巨利を博する秘訣であることを知つて居たのである。

それから間もなく彌太郎は、土佐藩の國産方に採用された。彼の商才を縦横に振ふ機會が來たのだ。彼は先づ象二郎に獻策して、土佐の國産を各地に賣捌く爲めに長崎表に「長崎商會」と云ふのを設立させた。象二郎は其の商會の支配人として赴任することになり、彌太郎は出荷方を引受け

ところが、販賣の衝に當る象二郎は根が豪傑肌の男だから算數に暗い。折角彌太郎が廻らした商策も象二郎の爲めに滅茶滅茶にされてしまつて、一向に利益があがらないのだ。

そこで藩でも其儘では困ると云ふので、後藤は呼び戻され、其代りとして彌太郎が支配人となつた。無論拔目のない彌太郎は充分な利益を算盤の上に現して見せた。

だが、茲で彌太郎一代の失策をして居る、と言ふのは或るオランダ人の話に朝鮮の東海に無人島がある、と云ふのを聞いた。この無人島を手に入れて見事大金儲けをしようと夢のような計畫を企らんだ事である。藩主も彌太郎の話に釣込まれて莫大な準備金を出し、その島を占領したら彌太郎を島主にする、と云ふ條件で、勇ましく出發したのだが、實際その島について見るとそれは朝鮮領の鬱陵島で、澤山の朝鮮人が住んで居た。彌太郎の夢も希望も、それでペンヤンコになつてしまつた。孤影悄然と長崎に引上げて來ると、待ち構へて居たやうなきつい御叱りだ。商館支配人の役は取りあげられ藩に呼戻され、留守居役と云ふ閑職に追ひやられてしまつたのだ。

此等は若い頃の彌太郎らしい失策で何處となく愛嬌のある話だ。

無人島の大王になりたいと云ふやうな野望はまるで冒険小説にでもありさうな話だが、これを大真面目でやつた彌太郎は矢張り東洋流の豪傑素質を充分に持つて居ると云つてよいだらう。

それが彌太郎にとつてよい教訓となつたことは疑ふ餘地がない。金儲けは夢ではない。ロマンチクな冒険の先に金儲けが轉がつて居ると思ふのは大きな間違ひだ。人と人の對立の上に確乎と足を踏ん張らなければならぬものだと言ふ事はつきりと知つたのである。

藩札を買占める

彌太郎の洞察した通りに時勢は移つて明治維新の兵亂も鎮まり、會津征伐に參謀として出陣して居た板垣退助が歸つて來ると土佐藩も凝乎としては居られなかつた。

兵亂は漸くに鎮定したとは云へ、各藩それぞれに勢力の擴張に餘念がない時代だ。四國の南隅にある土佐とても此儘静まり返つてしまふ譯には行かない。大に藩勢を張らねばならない。

其處で板垣と後藤は屢々凝議をこらしたが、何と言つても先立つものは金である。

その資金を得るには何うしたらよいか。

戦争には強くても、金をこしらへる問題になると流石の板垣も何う手出しをしやうもない。

そこで自然お鉢は彌太郎へ廻つて來た。

彌太郎の意見に徴して何とか資金を作る算段をしようと云ふ事になつた。

資金の相談を受けた彌太郎は早くも舊藩の勢力が永續しないことを見抜いて居たので、今土佐藩の爲に金を作つても、それが返つて來る見込はない。が、と云つてこの際この二人を利用して置かないでは將來爲めにならないと考へた末に、考へ出したのが金札を發行することである。

然し折角金札を發行しても、それが流通しなくては何にもならない。そこで三人額を合せて相談した結果、太政官紙幣と同格に交換すると決めて、先づ最初に大黒札と云ふ木札を發行し、次に鯨札と云ふのを發行した。この鯨札と云ふのは鯨の泳いで居る圖が描いてあるので名づけられたのだが、第一回に百三十萬圓、第二回に七萬圓を發行したのである。

ところで、鯨札の流通と共に藩の兩替所へ太政官紙幣と交換を申込んで來るものが段々多くなつて來た。然し、もともと藩の財政窮乏の爲に發行した藩札のことだから、さうさうは一々應ずる譯には行かない。従つてこの鯨札の價値は自然に下つて來て、太政官紙幣との間には非常な開きが出て來たのである。

この形勢を見て取つた彌太郎は、直にこの藩札の買占めを行つたのだ。彼は太政官札十萬圓を買占めてそれで百四十萬圓の鯨札のうち三分の二以上を買占め、その上爾今兩替は大坂の藩邸であると云ふ布告を出させ、それが出ると同時に「鯨札」九十萬圓を一時に太政官紙幣と交換し、一舉に

八十萬圓からの巨利を博して涼しい顔をして居たものだ。それを聞いた藩民は非常に激昂したが彌太郎は平氣だつた。

それ等は彌太郎の金儲けの方法の凄味のある一例であるが、由來三井の富もその根柢は政府の要路と結び、或は巧みに之を利用して作られたものではあるが、彌太郎の場合はその手段方法が一層露骨で大膽であつたのだ。

安くなつた藩札を買占めに藩政を利用して金を儲けたと云ふやうなことは、誰に聞かしても正しい遣方では無い。倣ふべき手段ではない。けれども世の中には斯うした隙が可なりある。其隙を探すことは金儲けの中でも一番手近なことだ。

「だが、然し、インチキな金儲け法ですな」

「それはさうだ、けれども町人根性と云ふものは、何時の時代でもそんなものだよ」

「今の私達が眞似ようとしても出来ないことですな」

「勿論さ、然し俺はこんなことを考へて居る。鯨札や大黒札ではないが例の勸業債券……な」

「一等五千圓とか三千圓とか云ふので大騒ぎをやられて居るあれですか」

「さうさう、あれは毎月一日に抽籤されるのだが、あの當籤番號が新聞に出ると、鵜の目、鷹の目

だね」

「一番違ひで當らなかつたなんて云ふのは可なり憤慨するぢやありませんか」

「それなのに、あの當つた番號を引換へに行かないで居る金が千萬圓以上もあると云ふ話だ」

「へえ……？ これは驚きましたね。一體どんな人が忘れて居るのでせう」

「さあ、そこだ、どう云ふ人が當つても知らずに居るか、と云ふことを考へるのが妙味のあるところだ」

「一寸考へつきませんか」

「何でも無いぢやないか。勸業債券と云ふものは種々の證據金の代用にもなれば供託金にもなる品物だ」

「成程……」

「さう云ふ方面に利用して居る人や、團體を調べて見ると、うつかりして居さうなものがある筈ぢやないか」

「なあるほど、そこでそれを調べてやる商賣を始めれば資本入らずと云ふ譯ですな」

「調べた中で當つてでも居ようものなら、何しろ寝耳に水の金だ。報酬には相場がないからね」

「へッへッへッへ、とんだ岩崎彌太郎ですな」

人材を見抜く

「彌太郎は年三十七歳で、初めて實業界に立ち五十二歳で死んだのだ。だから活躍期間は僅かに十五年と云ふ勘定ですな」

「さうさう、事實こんな短い年月にこんな多くの仕事をし、又これ程大きな身代を作つた者もないよ。それは勿論不撓不屈の彼の負けじ魂と、俊敏鷹のやうな商才が彌太郎をこれ程までにしたことは言ふまでも無いことだがね、又人を見るの明もあつたのだ。人間の力と云ふものは限られたものだ。人間のする仕事は何事でも一人の力より二人の力の方が大きいのだ。優れた人間の各異つた才能が合併されて働いた時で、一人では出来ないことを遣り遂げるものだ。三菱の場合は何處までも當主の彌太郎が真先に立つて働いたが、彼の後で其智慧袋となり後楯となつて居た傑物も少くはなかつたのだ。昔から眞實に人を見る明のある者はみんな偉くなつて居る。秀吉だつてさうだ、家康だつても其通りだ」

「其の事は、小學校でも教へて居ますな」

「ハ、ハ、ハ、成程ね。其處で抑々三菱會社は何うして生れたと言ふと、其の當時彌太郎の仕へて居た土佐藩（君のお馴染の劍劇で有名な坂本龍馬の出た所だ）では國産販賣の機關を長崎の外に大阪にも設けて「大阪商會」と呼んで居たのだ。彌太郎は其の指揮監督の爲めに、大阪に滞在して居たが、その豪遊振りは目覚ましいものだつた。彌太郎は京大阪の花街を毎夜豪遊の限りを盡して歩いたものだ。そして努めて多くの名士と交際して行つたのである。朝野の有力者と交際を結ぶことはきつと大きな金儲けの役に立つと彼は信じたからだ。其頃の話だが、井上馨と言へば大藏卿にまで成つた人物、長州の雄、木戸孝允（君の知つて居る桂小五郎だ）の片腕と頼まれた男と、祇園お雄を争つて大立廻りをやつて、西郷さんの仲裁でやつと納まつたといふ話もあるくらゐだ」

「遊びつ振りも凄かつたんですな」

「勿論遊んだ。彼にとつては遊ぶことが、金儲けの一つの手段でもあつたのだからね」

「それやうまい話だ、何處かにさう云ふのはないかね……」

「アハハ、ハ、然しだ、彌太郎のこの豪奢な遊蕩は勿論土佐の藩主の疑ひを買はない譯はなかつたんだ。「岩崎の奴、何うも怪しい」と云ふので、藩の主だつた人々が密議の結果、當時敏腕の聞えの高かつた石川七財と云ふ人物を密かに彌太郎の目付役とした大阪へ派遣したのだ。」

勿論、石川と云ふ人は優れた人物だったので、彌太郎の行跡を密かに探つたものだ。處が、石川が自分の隠密として来て居ることを早くも看破した彌太郎は却つて其の石川を抱き込んでまんまと自分の唯一の配下にしてしまつたのだ。

其處が彌太郎の偉い所だ。十分役に立つ人物と認められた上は、たとひ敵であらうと理を以て説くことを忘れなかつたのだ。

斯うして石川は、今では彌太郎唯一の配下となり頼もしい相談相手となつてしまつたのだ。何のことはない、ミイラ取りがミイラになつた形だ。彌太郎は前に藩札で儲けて居るし、大阪商會時代にも巨額の金を儲けた、今では相當の金が出来た。茲で彼は靜に世の中を見廻して見た。舊藩の勢力は次第に凋落して来る。詰り封建時代の武家政治の没落と同時に、来るべき世の中がはつきりと判つて來たのだ。

斯うなると何時までも望みのない藩の爲に盡して居るのが馬鹿馬鹿しくなつて來たのだ。

其處でいつその事、こりや獨立して仕事を始めるに如くはないと決心して辭表を出した。この時、彼と共に官を退いたのは川田小一郎、石川七財、吉永亮吉の三人この三人を幹部として、「九十九商會」と云ふのを創立し、土佐藩から「紅葉の賀」「夕顔」「鶴丸」と云ふ三隻帆前船を借受けて、土

佐と大阪間の航運業に従事して四國の物産を大阪方面に送ることに努力したのである。詰りそれが今日の三菱會社の抑々の萌芽なのだ——

獨立の旗おし

自分の目付役で、自分を監視する爲に派遣された石川七財の非凡な才幹を見抜いて、味方にすれば實に頼もしい男だが、若し之を敵とすれば恐ろしい奴だと、早くも見抜いた彌太郎の眼力は誤らなかつた。

この石川七財こそ、彌太郎に取つては三菱創業の恩人と云ふことが出来るのである。さうした人材を捕へ得た彌太郎も亦、ただの鼠では無かつたのだ。

當時、彌太郎は三十七歳、石川は四十三歳、川田は三十三歳だつた。彌太郎は眼光炯々たる豪傑肌、石川は身長五尺八寸の長軀で右の頬に三寸も刀痕があらうと云ふ、それに川田はデツブリと肥つて重みを見せて居たと云ふのだから、何れも荒つぽい連中の寄り集めだ。誰を見ても色の生白い商人顔はなかつたと言へる。

それだけに膽は何れも確固と据つて居たし、時勢を洞察するの明はあり、剃刀のやうな鋭い商才

を内に蔵した三人が力を合はせたのだ。

驚天動地の飛躍が、當然期待されなければならぬ譯だ。

然しながら商賣は、さう何時も何時も思つたやうに行くものではない。

三人の力を合はせた「九十九商會」の營業成績は思つた程香ばしいものではなかつたのであつた。

此處で何とか局面を展開しなければ、折角藩から脱して擧げた旗が何にもならぬことになる。

それでは三人の面目は丸潰れだし、第一彌太郎の負けね氣が承知しなかつた。

「こんなことで何うなる——」

と、幾らあせつても依然として營業は不振だ。

何とかして新生面を拓かなければ駄目だ。と、彌太郎は日々苦心して考へたが、何うにもならな

う。

何と云つても先立つものは金だ其の資金を何うするか。

其の資金難に悩んで居る九十九商會を救ふ途は何處かにないものか。

それがあつた。而もつい眼の前に——と云ふのは、これは彌太郎と石川より知らなかつた秘密だ

が、大枚七萬圓と云ふ大金が轉がつて居るのだ。

それは何う云ふ金かと云ふと、例の坂本龍馬が伊豫丸の償金として紀州家から取つたもので、それが龍馬の死後、他人の名義で彌太郎が保管して居たのである。この秘密を石川が何うして知つた

か恐らくは彼が彌太郎の隠密となつて彼の身邊を探つた時に、嗅ぎ出したものに違ひないのだ。

實に石川は敵としては恐ろしい男だつた。が、其の金を今、石川は會社の資金に流用しろと勧め

るのだ。

徒らに死藏して置いて何の役にも立たない金ならドシドシ使ふべし、と云ふのが彼の意見な

だつた。

勿論、彌太郎は否やはなかつた。そこでこの坂本龍馬の七萬圓は彼の資本金の一部に繰入れられ

たのだ。

だが、それだけではまだ足りない。

其處で、土佐藩の倉庫にあつた樟腦四萬箱、時價約十五六兩の品を後藤象二郎の斡旋で自分の方に送らせ、この二つの資本金を合せて、忽ちにして二十二三萬圓の資本金を作ること成功したのである。

「して見ると、彌太郎と云ふ人も初めのうちは随分危ないからくりをやつたものです。死んだ坂本龍馬の金を黙つて使つたり、藩の役人とぐるになつて舊主人の樟腦を賣り飛ばしたりは、ちと酷過ぎますね」

「それや、何しろ君の云ふ通りだがね。時世が時世だつたよ。其の頃は勿論、彌太郎だつて最初つから坂本龍馬の七萬圓を使はうとは考へて居なかつたんだ。それが爲に彼は苦しみましたし惱みもしたんだ。だか、考へて見ればそんな金を藩の金庫の中に入れてしまつた所で何になる。ただ金庫の徴になるばかりで、何の役にも立ちやしないぢやないか。黙つて使はずに居れば何時まで経つても死んだ金だ。まかり間違へば何處に何う煙のやうにつツ飛んで行つてしまはないとも限らない。そんな金なら有意義に仕事に使つた方が遙に惻巧だらうぢやないか。さうして貰へば地下に眠る坂本龍馬だつて喜びこそすれ何を怒るものか、藩の樟腦だつてさうだ。黙つてフンダクつたんぢやない。チャンと後藤象二郎と云ふ立派な保證人があつて品物を貸してくれたんだ。借りたものなら返せばよい。返す返さないは時期の問題だ何うだね。かう考へて來ると彌太郎の一寸見ると甚だ没義道に見える遣り口もチャンと筋道が立つて居るだらう」

「いやに彌太郎の肩を持ちますね」

三菱の由來

「然し、これは現代の世の中だつて幾らでも行はれて居ることだよ。下らなく金を持つて居るだけでは何にもならない。今の人間は昔のやうに金貨を壺に入れて土の中に埋めて置くと云ふやうな馬鹿はしない。そんな金があつたら、どしどし銀行に預け入れる。銀行はこれ等の遊んで居る金を預つてそれを様々の事業に流用して相當の儲けをあげる。そこでお金がお金自身で働いてくれるから黙つて居ても段々預けた金高が殖えて行く道理だ。彌太郎の場合も其通りだ。ただ時勢が違ひ、三百年の鎖國の夢が破れた過渡期の際だ。この位のことの出来る度胸と手腕のある人間でなくて何で風雲の時勢に成功出来るものか、と俺は思ふよ。扱て其處で、何しろ二十二三萬圓の資本が新たに出來たのだから、もうしめたものだ。規模が大きくなつて、ドンドン手廣く營業を始めると、段々好況に成つて來る。其處で初めて彌太郎はほつと息を吐いたのだ。明治五年この九十九商會と云ふのを改めて三川商會としたが、其の翌年の明治六年の三月三菱商會と改名した。ここで初めて三菱と云ふ會社がオギヤアと産聲を揚げた譯なのである」

「何うして三菱と云ふ名前をつけたのでせうかね」

「三菱の由來か、それやね君、岩崎の紋所は三蓋菱なのだ。そこで其形を崩して菱を三つ重ねこんだ。それで三菱だ。で、愈々三菱と云ふ社名となつた時には、もう前のやうなたつた三艘の帆前船だけしか持たない、小ぼけな船會社ではなくなつて居たんだ。もう其時には豊富な資本を擁し、十餘艘の汽船及び帆前船を持つた堂々たる大會社になつて居たのだ。然しだ、この明治七、八、九、十の四ヶ年の間に、よたよたと歩いて居た子供は見違へるやうに立派に育つてしまつたのだ。この三年間、それが三菱に取つては最も重大な危機に臨んだ時であり、又同時に其の基礎を作つたのであると云ふことが出来るのだ」

強敵の出現

「扱て三菱會社は立派に出來上つた。持船も立派なものが相當出來た。彼はそこで日本の海運界を一人で背負つて立たうとしたのだ。所が、どつこい世の中はさう誂へ向には出來て居るものではない。好事魔多しとはよく言つたもので、丁度其頃、いやそれより約二年ばかり前からの事だがアメリカの太平洋汽船會社が日本の沿岸に現はれて盛んに貨客吸收に努めて居たのである。何しろ海運事業に相當の經驗を積んだ外國會社が、競争相手なのだから樂ぢやない。競争は相當激しく三菱も

一通りでない苦境に立つたのだ。所がそればかりでは事は濟まなかつた。丁度そのころ「郵便蒸汽船會社」と云ふのが創立されて、ぐんぐんと三菱の牙城に迫つて來る。實に前門の虎、後門の狼、腹背に敵を受けて三菱の前途は甚だ暗澹たる者があつたものだ。所でこの郵便蒸汽會社と云ふのは我國では會社組織のものゝ最初で、半官半民的に經營されたもので、政府から年六十萬圓の補助を受けて、三十餘艘の汽船帆走船を持つた實に有力な會社だつた。此處で實に火の出るやうな競争が演ぜられたのは云ふまでもない。三つ巴となつて争ふことになつた。アメリカの太平洋汽船は、早くも潮時を見て日本沿岸を諦めて歸つたが、郵便蒸汽船會社と彼との間には、それこそ火の出る様な競争が開始されたのだ。斯うなると彌太郎の意地は何處までも突つ張らずには居ない。彼はぐつと齒を嚙しめながら「糞つ」と叫んで血眼で應戰攻撃に寢食を忘れたものだ。其爲に到頭群小汽船會社は二大會社の勢力争ひの犠牲となつて、バタバタと倒れて行くものが増して來た。それ程、兩社の競争は激烈を極めたのだ、其爲に流石に三菱も殆ど致命的と言つてよい程の傷を負はされてしまつたのだ。然しこんな事件にぶつかると、初めて彌太郎の眞骨髄が遺憾なく現はれて來るものだ。「何糞ツ負けるものか」

と叫んで彼は取敢へず早速親友である後藤象二郎の許に出かけて行つた。象二郎は其頃既に政府

の重職に就いて居た。其處で彌太郎は諄々と自分の苦境を説いて象二郎を納得させ、大久保利通と大隈重信とを説き伏せ、遂に「郵便汽船」の補助金を取消させてしまつたのだ。之れは相手に取つては致命的な打撃だつた。彌太郎の取つた逆手の一策——萬策盡きて最後の切札がこれだつた。流石に頑強に彼を苦しめた「郵便蒸汽」も散々に打ちのめされ、遂に三菱に併合されてしまふことになつてしまつた。實に彼の腕前は凄異程冴えたものだつた。其上勢に餘つた彼の仕事は、それからトントン拍子に進んだ。臺灣征討に際して海上の運輸を一手に收めて巨利を博し、次いで西南の役が起ると又も彼の活躍の舞臺が開けたのだ。斯うして彌太郎は、遂に三菱の基礎を大盤石の上に置くことに成功したのでつた。社運は益々隆盛になり、所有船舶の数は四十餘艘に及び、旭日の如き勢を示すと云ふ有様。斯うなると三菱の地位は、最早小搖ぎもしないやうに考へられるのだが、何うして仲々そんな譯には行かなかつた。彼は死ぬまであらゆる苦闘と闘ひ抜いて、最後の息を引取るまで家の基礎の確立に努力したのでつた」

餘つた力は恐い

「それ程苦しめば、あれだけの財産が出来たのも無理はないと思ひますね」

「努力も尊いけれど、彌太郎のやつた一生の仕事を見ると、何處かかうスケールの大きい所が解るね。何事でもやる事が大きいよ。けちなことは眼もくれないで、ぐんぐん真正面から大物におつかつて行く意氣、それがこの人をこれまでにしたと思へるのだね——」

「成程ね、三菱の家訓に小事に齷齪たるものは大事ならず、宜しく大事を経営する方針を取るべし。とありますが、技のことですな。そして一度着手した事業は必ず成功を期せよ、と云ふのだから商敵と見たら真正面から對抗して行く勇氣が素晴らしいですね」

「何しろ豪傑だつた」

「それが五十二やそこらで死なれたのは残念でしたな」

「しかし、彌太郎の死は三菱千年の礎石を打ち込んだものとも云ひ得るでせう」

「とはまたどうしてです」

「彌太郎の調子で何處までも押進んで行つたら或は途中で倒れてしまつたかも知れない。今日の三菱は弟の彌之助といふ堅實一點張りの人が大きくしたものだ。其處で何事業によらず、創造力の強い人はある程度まで押進めたら守成的健實さを持つ人に委かして行くことが賢明だと云ふのだ。最初から終ひまで自分で遣りたがるやうな人々は大きな仕事は出来ない。必ず途中で元も子も無くし

てしまふ」

「彌太郎はよい時に死んだのですね」

大倉出世の巻

汚い噂の中から

○月○日 木曜日。

花曇りの木曜、水羊羹のやうな感覚で大空が晴れた朝、俺は機嫌よく翌週の計を獨り胸に肯かせた。一年の計は元日に樹てると云ふが、一週間の計は前週の木曜に樹てるのがよい。週の終り日は休日だ。休日は大いのにんびり遊ぶがよい。月曜は週の仕事始めで慌しい。火曜は熱心に執務し、稼ぎに油が乗る日だ。水曜は少しく疲れる。金曜では遅い。土曜は解放される明日曜の爲めにそはそは落着かなかつたり、約束が多い。だから木曜の朝静かに一週の計を練るのがよい。からりと晴れた朝が風を出して来て、やがて太陽が花の埃をすつかり着たやうになり、「今日も亦頭の芯が

膨れたやうで、駆け出したやうな、蒲團を頭から冠つて寝たいやうな、憂鬱な花曇りですね」と、玄關子がぼやく頃は、客、客、孫六訪客オン・パレードだ。

来る者は拒まず、すつと一渡り應接を済まして、少し腹が空つたと感ずる頃はもう午過だ。ラヂオの「時計をお合せ願ひます」時間は疾に過ぎて居る。午後は自分の時間にして貰はうと、他出の仕度をして居ると、久し振でDが現れた。

「どうも苦しい、素敵に苦しい」

と、はあはあ云つて居る。

「何がそんなに苦しいのだ、虫歯でも痛いのかね」

と、顰めて居る頬を見詰めながら訊くと、

「いや歯ぢやない……いや春先の虫歯も人並に一通りは痛いのだ、がそれよりも内憂外患總てが苦しいのだ。何か素晴らしいことはないか知ら」

「素晴らしいことがさうさらにあつて堪るものか。人生は退屈なものだと哲學者は云つて居るし、働いて居る人は變りないのが何よりだと挨拶し合つて居る」

「さうそれだ、それがどうも堪らない。失業しない奴はお變りがない方がよいかも知れないが、失

業した奴は少しはお變り合のある方が宜いのだ。何か少しうまい金儲けはないか知ら」

Dの奴、額の汗を拭つて、漸く粗茶一杯咽喉を通しながら、又も金儲けはないかである。

「何時も云ふ通り、金儲けは到る處に轉がつて居る。ただそれを拾ふか拾はないか、實行するかしないかで、儲けるか或ひは徒らに苦しがつて居るかだ」

俺は例の調子でニベもなく突放す。

「少し位悪いことをしても宜いから儲けたいよ。俺にやれさうな金儲けがあつたら教へてくれ給へな」

Dの奴何に感じて居るのか、平生に似ず熱心だ。

「大分本氣だね、然し遺憾ながら君は金儲けは出来ないよ、性格的にね……」

「さう金儲け博士の君が簡単に診断してくれちやいかんよ。俺は感ずるところがあつて、大いに金儲けをしようと決心して君を久し振りで訪ねたのに悲觀しちやうぢやないか」

「だから駄目だよ」

「ヒカーン」

Dは其の樂天的な額をわざと擧めて長く唸いた。

「金儲けは機會を捕へることと、そして根だよ——根と云ふのは倦まないこと、不斷の努力と云ふことだ。君は機會に棹す敏捷さもなければ、根と云ふ奴が殆どない」

「そんなに殘酷にとつちめるなよ。だから少し位悪いことをしてもと決心したと云つて居るぢやないか」

「悪いこととして金が儲かると君は思つて居るのかい……」

「だが大抵の金持——成金と云ふ奴は悪いことをして居るやうだぜ。例へは大倉は鐵詰の中に石を詰めて戦地に送つて、それで大儲けをしたんだと云ふぢやないか」

「それだ。人々が好んで用ひたがる惡風説を鵜呑にして、何か覘ふやうぢや、愈々金儲けを實行する資格がない。どうも金を儲けたがる癖に、殆ど多くの人は需要が多くて石を詰ても間に合せなければ間に合ふまいと云はれる程に大きな張合のある仕事を得た其の仕事の繁忙の良い形容を悪い風説にしたがるものだ。皇國の興廢を此の一戦に賭けて居る大戦争に、日本人の血を持つて居る大倉が何で生死を賭して居る人に食はせる鐵詰に石を入れて送るものか、彼は戦争に依つて普通の眼から見れば、殆ど間に合ないと思はれる程の軍需品の御用を受けて、それを間に合せる腕を持つて居たのだ、或は粗製濫造の評を受ける物も中にはあつたかも知れない。然し非常の際先づ間に合せ

る事が最大で最善のことだ。大倉は必要の度合をよく計り、其の手腕を揮つて儲けたまでさ。君に限らず金を儲けたい人がよく考へなければならぬのは、悪評を喜ぶ所謂噂をただ耳に快い無責任な一夕話として傳へずに、それ程の悪評は何故出来上つたか、だから何故儲けたかの由来を考へることだ。其の肩籠の中から寶石が現れることもあれば、百圓札が飛出すこともあるのだ。我々は汚い噂の中からも、よいものを取り出す心掛けがなければならぬ。それでなければ、共に人生に最も必要である金儲けを談ずる資格がないことになる」

越後蒲原の小太閤

「ずつかりお説教されちやつた。然し大倉は随分悪いことをしたと云ふのが定評だぜ」
Dは一寸てれたが、直ぐ大倉攻撃の火蓋を切つた。

「上野の彰義隊に煮湯を吞ませたり、臺灣で人夫を殺したりと云ふのかね」

「そればかりぢやない。薩摩の大久保と結託して利権漁りをして……」

「それだよ、腕一本歴一本から、今日の大倉王國を築き上げた大倉喜八郎だから、人各々の見方があるだらう。殊に喬木は風に吹かれる譬で、成功者は必ず幾多の悪徳の實を積んで、其出世を得た

かのやうに云はれる然も一層いけないことには、日本には一將功成つて萬卒死すと云ふやうな熟語が流行した思想もあつて、成功者の足跡を盗人のやうに悪くつける考へがあるんだが、それでは本當に人を見、物を見、事業を見、金儲けを見るものとは云はれない。そんな見方することは歪んだヒステリーの斜視で、其の立場を守る間は決してよい生き方は出来ない」

「いやに大倉の最良をするんだね。大倉の廻し者かい君は、ハッハッハッハ」

Dは快活に笑つた俺も釣り込まれて笑ひながら、

「君は又大倉を恐喝し損なつたのではないかね、ハッハッハッハ」

「それやひでえや、俺を變な暴力團の一味としちやつて、ハッハッハッハ、だが大倉にしる、安田にしる、それ相當に暗いところはあるのだらう？」

「まだそんなことを云つて居るのか、それぢや君は金儲けを語る……」

「謝つた！ どうすればあんな素晴らしい金儲けが出来るのかな？」

「努力さ、其の最善の努力だよ。大倉喜八郎の歩いた足跡を見ると、殊にそんな氣がするね。そして彼に金儲け宗徒が學ぶべきことは實に多々あるね」

「俺の足しになるやうに教へてくれないか少し……」

「うん、君みたいに天才を頼つて、世の中を朦朧と暮し、時に金儲けを發心するやうな形而上學的生活者としての存在には、非常に参考になることが多いよ」

「ルンペン——最も哀れなルンペンの俺の性格焼直しが出来るかね」

「ああ大倉喜八郎が歩いた足跡は、實に單に金儲けと云はず、生きるもののよい参考になる」

「彼は確か角兵衛獅子の本場越後蒲原郡の産だらう」

「くだらないことを知つて居るものだね。角兵衛獅子の本場かどうかは知らないが、彼は越後新發田の大名主の倅だ。後年大杉榮を育んだ新發田、高田の馬場の仇討から赤穂義士で有名な堀部安兵衛を成長させた越後新發田が、大倉喜八郎の故郷であることも一寸面白いだらう」

「郷土は何處か共通した性格を生むものだね。それで、どうして大名主の倅が江戸に飛出したのだね」

「喜八郎は幼い時鶴吉と呼ばれて居た。そして小太閤と云ふ綽名を付けられて居たのが彼の自慢の一つだ」

「小太閤——豊太閤の幼いと云ふ意味なのかね」

「さうだ、喜八郎の快い幼時の回顧談の一つだつた小太閤と云ふ綽名の起りは彼の顔が秀吉のや

うに猿に似て居るからと云ふのではなく……」

「いや晩年の寫眞を見ると、何處か能の狸々に似て居るところがあつたぜ」

「交ぜ返してはいけない。彼が細心で大膽、然も敏捷で、機智に富んで居り、餓鬼大將であつたところから其の綽名が生れたのださうだ。面白いのは其の綽名の名付け親が實父だと云ふので、彼は餘計に鼻が高いのだ。彼鶴吉は三男坊で、上に二人の兄がある譯だが、彼の幼い頃の風で、相撲が盛んで、彼は平常はころ負かされて居た。ところが或日親父が一杯機嫌か何かで「兄弟で相撲を取れ勝つた者にはお父さんが御褒美を上げる」と宣告して相撲はせたのだね。すると三男坊の彼鶴吉が、兄貴をころ負かしてしまつたのだ。そこで親父が鶴吉は小太閤だ、必要のない時は兄貴を尊敬して負けて居てやるのだ、感心々々と褒めた譯なのだ。そこで小太閤と云ふ名が生れた譯で、それだけの逸話にも彼の魂のありどころは分ると云へるね」

「成程ね」

棚ボタ式に養子に

「彼が發奮して江戸に出で、遂に大倉王國を築くに至つた、其出郷の動機にも面白い話がある」

「まさか秀吉流の色事でもあるまいね。大倉は非常に其の意味でも英雄であつたさうだから、ハツハツハツハ」

七四

「十八歳で故郷を出たのだ、そんな馬鹿なことはないだらう。彼は丹羽塾と云ふ漢學の塾に通つて居たのだが、或日塾の歸りに同じ塾仲間の白勢三之助が缺席したので、其家に廻つて見ると驚いたことには白勢の家は青竹を張り廻して、昔風に云ふと蟻の這ひ出る隙もないやうな状態になつて居るのだ。云はずと知れた昔の侍の處罰の一つである閉門を喰つて居るのだ、何うしたと云ふのだらう」と鶴吉は心配して裏に廻り、小門を潜つて密かに白勢三之助に會つて事情を聞くと、其前の日、三之助の親父が往來で目付役に會つた。固より作法として土下座したのであるが其日は雨の後のひどいぬかるみであつたので、下駄を裾に隠して下駄を穿いた儘土下座をしたのだ。それを目付役の供の者が發見して無禮だと云ふので、一日の閉門謹慎を命ぜられたと云ふのだ。後の喜八郎、其頃の鶴吉は、この話を聞いて勃然として憤慨した。武士と町人との差別の餘りに甚しいのにひどく憤慨したが、自分もこんな土地にまごまごして居ると、何時どんな目に會ふか分らない、町人が出世するには花の江戸に限ると斷然意を堅めたのであつた。それには又他の理由もあつた。それは前年慈父を黄泉に奪はれ、引續いて又慈母を其の年冥途の旅に送つて、彼は其の兩親の愛を再び受ける

ことのない身になつて居たのだ。そこで彼は大いに發奮して名を江戸に揚げる氣になり、姉の貞子に一切を打明けて旅費の無心をし、快く二十兩の路銀を貰ふことが出来たので、彼は勇躍して江戸に上つたのであつた。花のお江戸に出た小太閤鶴吉は、何を出世の緒口にするかを考へて、鐘一つ賣れぬ日はなし江戸の春を廻つて歩いて居る中に、商人になつて金を儲け名を揚げることに決心し、麻布飯倉の中川と云ふ鯉節屋に奉公した。十八歳から十九歳、眼から鼻へ抜ける程に鋭く、熱心に立働く彼は、直ぐ中川の店でも非常に調法がられ前途を囑望されるやうになつた。そして十九歳の十月二日、あの大正十二年の關東の大震災に匹敵する安政の大震災の時には、主家の商用で大阪にやられて居て、阿鼻叫喚の悲惨な大地震に遭遇しない幸運に恵まれて居る彼であつた。奉公すること足掛け三年二十一歳の春、彼は其の器量を望まれて、棚ボタ式に主人中川鯉節店の養子になることを求められた。だが、只の鼠でない彼は其の有難い養子の話を斷つて獨立して店が開きたいと云ふ希望をあべこべに主人に嘆願した。ここだよ、人間が考へなければならぬのは、奉公して居る程の者が、其の主人に養子にと望まれるにはそれだけの働きがある譯なのだ、又、奉公して居る程であれば其の主人の店に養子になつて家業譲られれば、有難いと二つ返事で受けるのが人情であるが、單に目前の生活の安定小成に安んぜず、何かをしよう自負と其力とを養つて居る者は其の

七五

目前の利益に目を眩されぬことだ。鶴吉——後の喜八郎が自分は商賣を覚えて獨立自活し、そして徐々に其の有望に向つて進まうと決心して養子を断つたと云ふことは味ふべきだね」

「其頃から野心家だつたのだね彼は……」

Dは感服したやうに云ふ。

「いや野心家ぢやないよ。身に大望を持つて其爲めに身心を勞して修業し、そして一層自信を加へて行くのだから單なる野心家ではない。人生の階段、出世の梯子をまともに昇らうとする立派な努力家だ」

「成程——」

「それから間もなく鶴吉は主家から暇を貰つて、上野山下で、正確に云へば下谷上野町に小さな乾物屋を開業したのだ。

「幾つの時だね」

Dが不意に訊いた。

「二十一歳の春さ」

俺はDの頭の悪さを咎めるやうにぶつきらぼうに云つて彼の顔を見た。

「二十一で一軒の商店の主人にねえ、昔の人間は偉かつたものだな、今の二十一はまだ學生ぢやないかね、親の脛を噛むことばかりを考へて居る、それでなければ兵隊検査を受けて漸くこれから生涯の希望を定めようと云ふやうな——」

「だから、空腹線上の象牙の塔の夢を築かせる學校教育の弊を咎めたいのだ。人間が若く血氣盛んで無邪氣であることはよいが、生活は——食ふと云ふことは親か、社會か或は國家があてがふもの、お向うのものと云ふやうな思想を植附けて居ることは困る、働くことと云ふことが生きて居ると云ふことで、そして自ら食ふと云ふことが最も尊く、而もそこから本當の出世——偉人傑士が生れることをよく知らないのは眞に嘆しいことなのだ」

「ふうむ……」

乾物屋騒動

「自ら助ける者は自ら生きると云ふ思想は、人間を立派にする。鶴吉——後の大倉喜八郎は、これを體得して餘すところがなかつた。二十一歳で乾物屋の主人になつた彼は、其の二十一歳で乾物屋の主人になつた努力美談よりも、もつと愉快な彼の眞意氣を學ぶ點がある」

「それはどう云ふことをしたのだ」

「彼が獨立して乾物屋の主人になつて三年、二十四の秋に起きたことだ。例の歴史にも有名な安政の飢饉の時のことだ——安政の飢饉は天下泰平、正月が来ようと盆が来ようと、搗いた米三升ありや何のこたない——と呑気な事を云つて居る人々にも、お米が喰べられない悲惨な状態が来た。大正年間にあつた米騒動を殆ど多くの讀者は御承知であらうが、あれと等しい飢饉が、然ももつとのんびりした時代に起きたのであるから一層深刻だ。徳川幕府も、終に市民の悲況に堪へられず、其の米庫を開いて窮民を賑すことになれば、十人衆と云はれた江戸代表の富豪も、競つて救恤するやうになつた。斯うなると、何しろ宵越の金を持たないことを誇りにして居る江戸つ子だから、困り方もひどいと共に、皐月の鯉の吹流しで、陽がないと云はれるだけに、よい意味もあるが悪い意味も發揮し、お上が下さる物、旦那衆が下さる物、だから喜んでお救ひ米を頂かうと、蓄へが無いだけに我も我もと貰ひに出掛ける。乾物屋の主人になつたとは云へ、まだ二十五にならない若造の鶴吉、大して大きい店でもないの、家主が同じ店子の長屋の連中を連れてお救ひ米を頂きに行かうと鶴吉を誘つた。

「困難な時だ。有難いお救ひ米のお沙汰があつたから、鶴吉さん、お前も同じ俺公の店子だ。さあ一緒にお長屋の人と行かう」

「鶴吉さん、景氣よくお救ひ米にありつかうぜ」

先達つた家主の言葉に、長屋の人々はお祭にでも行くやうに貰ひに行くことに威勢がよい。貰ふと云ふことを恥とも考へない其頃、借ることが既に恥であつたのだから、貰ふことは一層恥である筈なのを、飢饉と云ふ非常時と群衆心理とで恥しくもなく大の男が喜び勇んで居る。鶴吉はそれらの有様を苦々しく眺めて居たが、

「私は遠慮させて頂きます」

と靜かに云つた。

「何、遠慮させて頂きますつて、洒落たことを云ふない。それではお前お救ひ米を貰ひに行かねえつて云ふのか」

氣の短い八さんか熊さんか、裏長屋の威勢のよいのが突ツかかつて来た。

「はい、私は遠慮させて頂きたう御座います」

鶴吉は商人らしく丁寧に断つた。

「この野郎、巫山戯た百姓だ。店子の交際——江戸ツ子の交際を知らねえな、のしちまへ……」

氣の早い奴が腕を捲つて飛出さうとするのを、

「まあ待て、家主の俺公が居るのに何だ。これ、手など出してはいけない。まあ俺公に任して置け……」

わあわあ云ふのを家主は抑へて鶴吉の方に向ひ、

「鶴吉さん、あんたは何うしてお上から下さらうと云ふお救ひ米を頂きに行かないのだね」と訊く。鶴吉は悪びれず、

「はい、私はまだお救ひ米を頂かなくても何うやら今日が過せさうですから……」

「ふうん、貰ふのは嫌だと云ひなさるのかね」

「はい、男一匹成るべくは貰ふやうなことはしたくないので……」

「生意氣云ふなこの野郎、巫山戯た奴だ。やつつけろ！」

又がやがや騒いで殺氣立つのを家主は抑止め抑止めて、

「まあ俺公に任して置け、手を出したりしたら承知しねえぞ。ぢや何かい鶴吉さん、お前さんは施しを受けたくない、施しを受けることあねえと云ふんだね」

「へえ其の心持です」

「立派なことだ。俺公も店子にそんな立派な人を持つたのは幸だ……」

家主は皮肉に云つてちつと鶴吉を眺めながら語を繼いで、

「この困難な世の中だ、そしてお前さんの立派な心、掛から云つても、そして又施しを受けない程の豊ならちつと施しをしてはどうだね。其方が尙立派で俺公も大變自慢になるが……」

「さうださうだ、そんなに偉えのなら施して貰ひたいや、やい乾物屋、施しをして十人衆のやうに偉くなつて呉れ」

大勢の連中は家主の尻馬に乗つて冷評し冷罵する。鶴吉は冷かに、

「いや家主さんがさう被仰いますのなら私は施しをしてもよいと思ひます」

「なにッ」

「はい貰ひに行くより上げる方が私は氣持がよい。何うか店の乾物——品物全部差上げますから御遠慮なくお持ち下さう」

「わあい、この土百姓よくも云ひやがつたな、それ持つて行け！」

大勢は店に殺到したが、流石は家主、それらを抑止めて店の品の半分だけを施しとして孰れもに分配させた。

「君、金儲けの一つの型はこの心意気だよ。金に使はれるな、金を使へと云ふ氣分だ。二十四の漸く店を持つて其店が何うやら堅まらうとする三年目位で飢饉と云ふ大不況に出會ひ、然も施しを受けない意氣から商品の半分を奪はれる(勿論承知でやつたのではあるが)としたら、可なり打撃でなければならぬ、それを平然として受けた大倉鶴吉、後の喜八郎の感心すべき點はそこにある。何故彼はそれを平然として爲したか、金を儲け得る、商賣を繁昌させ得ると云ふ自信が其の獨立不羈な彼の魂の上にあつたからだ。彼が努力して覺えた乾物商としての商賣の道に確固たる自信と熱意とがあつたからだ」

「人の一心は岩をも通すと云ふ、それが商賣の道に現れて居る自信と熱情とだね」

「さうだ、總ての人々がこの鶴吉の行爲を模倣すべきではないが、然し其の精神と彼が金儲けの道——失つたものを直ぐ恢復し、それを倍加すると云ふ商賣上の本當の自信に就いては大いに學ばなければならぬ。一つの金儲けの型として記憶さるべきだ。そして其意氣は總ての人の同感してよいところだ」

「生立を聞くと孫六さん、大倉は仲々偉いね。膽が据つて居るよ」

「そこが彼が悪黨のやうに云はれるところだ。彼は單に上野町の店で乾物を商つて儲けて居るだけではなかつた。いや店の商賣と云ふものは小資本の小さな店では儲けたと云つても高が知れて居る鶴吉の金儲けに對する努力はそんなものではない。彼が上野山下の店に坐つて居る時は實はもう一儲けして來た後なのだ。それは彼が朝早く河岸に行つて不漁と見れば買占をやり、よい品物と思へば又買占めて、一種の思惑や鞘取を實物に依つて腕一本でやつて、それで儲ける金が大きかつたのだ」

「それでは、一人の身體で一日に二つ商賣をして居た譯だね」

「さうだ、人が寝て居る中にもう一仕事をし、人が起きた時にはただの乾物屋の主人で御座いとして細い小賣の利を得て居たのだ」

「成程ねえ」

「然し金儲けに對して忠實であり、自己の世界を開くのに努力家であつた鶴吉は、やがて乾物屋で飽足りなくなつた。そして商賣替をした」

「何を今度は始めたのです」

「鐵砲屋だ。黒船入港以來、弓や刀よりも威力のある武器として鐵砲の需要が多く、然も尊王攘夷討幕佐幕の世論囂々として幕末維新の風雲急な時代であるから、この舶來の兇器は何人も必要とされることに着目して、彼は神田和泉橋通に移轉して鐵砲店を開業した」

「幾つでした？」

「二十九の時だ。彼はこの店を開いても資本が少いから鐵砲を澤山店に飾つて置くことが出来ないで、太鼓其他の安い軍用品を飾つて胡麻化した。だが鐵砲の注文があると彼は晝夜を問はず直ちに横濱に馳けつけて鐵砲を仕入れ、それを約束の時に納めたので、彼は非常に信用されるやうになつた」

「資本の薄いのを肉體の努力に依つて補つた譯だね」

「其通り、そして其努力が遂に明治元年、例の戊辰の役と云はれる上野の戦争には有栖川宮の鐵砲御用達を受けるまでに儲け出した。これは文字通りの努力に依るので。——と云ふのは、當時鐵砲は横濱の外人館に行つて買はなければ無い。其横濱に行くには幡隨院長兵衛以來、強盜、追剝の巢である刑場鈴ヶ森を通らなければ無い。外人と鐵砲の取引に行くのであるから勿論多額な金を持つて居る。だから他の鐵砲屋は最も安全な白晝を選んで往復するので時日がかかるが彼鶴吉は注

文を受けて約束すると夜でも夜中でも往復する。この肉體的努力に加へて外人と小さくても人である彼が直接交渉して色々の新知識を得、殊に貿易に對する金儲けの興味と實利とを發見し、外人と親しくなるのであるから、鬼に金棒的に彼は鐵砲屋として多大な利益を得る事が出來た。この頃には三十二歳になつた彼は、既に一萬兩の現金を持つまでに儲け出して居た。

事務室は陣屋なり

それからの彼は順風に帆を揚げて走る彼であつた。明治維新の兵馬動く時、其の商賣の鐵砲が羽根が生えて飛ぶやうな賣れ行であつたので、明治五年三十六歳の時には五萬兩を持つて、日本最初の一人の商業視察の爲めに洋行した。勿論この洋行には多分に彼の政治的政策が含まれて居たが、それが見事に成功し、洋行中の大久保内務卿に認められて、征臺の役には人夫を送ることになつたり、西郷隆盛の西南の役或は日清戦争に陸軍御用達になつて、非常時の非常な金を儲けた。これより先、明治六年洋行から歸ると直ぐ銀座に大倉組を組織して、直輸出入貿易業を開いたのが、現在の大倉王國の基なのである。要するに喜八郎は、チャンスを巧みに掴み、機に用意し、事に當つて身體を張つたのと同じ肉體的努力をして、現在の大倉王國を築いたのであるが、彼の金儲けを覗ふ

に足る、彼が實によい標語を出して居るのだが、これは總てが味つて宜いことだ」

「君がそんなに感心するのだから、餘程名言だらうな」

「いや名言と云ふよりも、彼の金儲け振を最もよく表現して居るものと云ふべきもので、同時に現代の所謂形式ビジネス尊重時代に於いては警句とするに足るものなのだ」

「ほほう……」

「それはね（事務室は陣屋なり）と云ふのだ。事務室は陣屋なり——は實に名言ではないか、そりや商戦と云ふ言葉があるが、それは單なる熟語の種類でしかないが、大倉は「事務室は陣屋なり」と云ふ標語を翳して、事實事務室に於いては如何に金儲けの爲め——事業の爲め、勝つか負けないかのみを敵陣を前にして緊張した陣屋のやうに考へ實行したのであるから、あの大倉王國が彼の腕一本で出来上つたのだ。尤もこの標語の意味で活躍したから辛辣であるとか、其他の悪評を生むことになつたのであるが、其の眞剣さと根強く戦ふこと、そして又充分に準備して戦ひ取る一本調子の強さとは、總てが膽に植えて置いてよいことであらう」

「大倉は狂歌がうまかつたさうだね」

「うん、狂歌は堂に入つて居た。まだ越後の新發田に居る十五六歳の時分から其道に入り、東京の

狂歌師にも書音して居た位であつたから自信もあつたのであらう。俺は彼の狂歌もうまいと思ふが、それよりも彼が狂歌を作る餘裕を彼の心の中に常に温めて居たと云ふことが、彼の金儲けをどんなに助けたか分らないと思つて居る」

「狂歌と金儲けとどんな関係があると云ふのだらう？」

「いや直接の関係はない、だが、人が金儲けのみに至精神的であると、それは守銭奴、或はジユウになる恐れがある。然し、狂歌と云ふやうなユーモアを主體とした短詩を自ら味ふ趣味を持つて居るとそれに依つて人間が温くなつて来る。人情が決して失はれない。それと共に失敗に對しても生一本に失敗の傷を受けない、失敗を客觀する餘裕を興へる、それがよい金儲けに導く心のゆとりになる、例へば彼大倉が二十一歳初めて獨立して乾物店の主人になつた時に詠んだと云はれる（今日からはおほこもじやこのととまじり、やがてなりたき男一匹）などと云ふ狂歌を見ても火のやうな野望が、それを野望らしく表はさず、微笑で温く人の心に忍びよる——其温かさ、精神的に温められるものが、ユーモアを持つ短詩情として人を温くする金儲けをも温くする、だから大倉を随分酷評し悪評する者はあるが、然し彼を不人情とか没分曉漢と云ふやうな批評をすることを曾て聞か

5………」

「さうだ成程、随分悪評も聞いたが、大倉喜八郎は不人情な奴だと云ふ風評は耳にしないね、狂歌の功德かねあれは——」

安田發祥の巻

質屋の番頭

○月○日 金曜日。

昨夕お義理で行つた歌舞伎座の歸り、一寸油断して風邪を引いたらしい。設備が整つた建築から外氣に觸れる訓練は、日本人の肌や服装にまだ餘り充分と云へない。比較的注意に十分な俺がひよいと油断してやられた。油断は大敵だ。賣藥の廣告のやうな言葉だが氣を付けなければいかん。殊に風邪は萬病の因だ。うつとしいが床の上で一日養生することにする。病床世間診察と云ふことも決して無駄でないことだらう。

友人の紹介狀を持つて長吉と云ふ青年が訪ねて來た。紹介狀の有無には關しないが、所謂金儲け

仲間とは少し毛色が變つて居るらしい青年なので、床の中に居ながら會ふ。成程十二の時に四谷の質屋に奉公して、十年間を勤め上げ、そして番頭に昇格してつい此頃撞球場の主人になつたと云ふだけに、典型的な質屋タイプ青年だ。腰が低くて言葉遣ひが古風に丁寧で、四角な顔は強い意志が見え、少し猫背の肩先にも、ちと冷酷を想はせる質屋氣質、金儲け色がこびり着いて居る。

「何で商賣違ひの撞球場などを開いたのです」

と俺が訊くと、

「腹ごなしに撞球を覚えて、自分が三百ばかり撞ける所へ持つて來て、繁昌さへすればゲーム代はいい儲けだと思ひまして丁度格安な——千二百圓ばかりで今の店が手に入つたものですから」

「儲かりますか」

「ええ今の所は——撞球と云ふものは新規の人が經營して、少し努力すれば一年か一年半位は繁昌するものです。そして一年半も経つと貸倒れ其他でいけなくなるものさうです。ですから私も繁昌して居る盛りに賣る積りで、窃かに適當な賣口を物色して居ます」

長吉青年は、質屋の窓口から世間を眺めた耳學問を實地に行つて成功しながら次の成功——金儲けを狙つて居るのだそれで俺にも會ひに來たのださうだ。

「どうして本職の質屋を開業しないのですか」と訊くと、

「私は開業しても子質です。子質と云ふのは、別に親質と云ふ大きな質屋の後援を得て遣るもので、まあ云へば大きな質屋の小さな出店みたいなもので——儲けの實質から云つて——それでは詰らないし、第一小さな質屋が、今のやうな世の中で儲かつて行くかどうかと云ふことも疑はれるので、實は質屋開業資金として自分が持つて居る五千圓ばかりの金は低利で質屋に貸して——貸しと云つても、まあ預けてあるのと同じで、銀行利子よりはすつとよく廻して居るのですが」と云ふ。

「仲々君は考へて居ますね、若いのによく出来て居る」

俺は長吉青年を褒めた。長吉青年は少してれながら、

「それで私は何とかしてうんと金を儲けたいのです。安田善次郎さんのやうに儲けたいのです。私は十二の時から奉公して學問も何もありませんが、質屋の格子の中から世間と世間の人を見て、きつと大金持になりたいと覺悟して居るのです。安田善次郎さんだつて、別に學問があつた人ぢやないやうですし、そして大して變つた偉い人とも思へないのですが、それがあんな大金持になつた

のですから、私も一つうんと奮發して、是非大金持になりたいのです」

「安田を目標にして金持にならうと云ふのは、成程君にはよい考へですね。だが安田の努力は一通りでなかつた。それが君に出来ますか」

「あの方も人です、私も人です……」

「ふうむ、いい決心です。安田善次郎と云ふ人は偉人でもなければ豪傑でもない。全くただの人で、其のただ人の、正しい努力があの大安田王國を築いたのです。君の眼の着け所はよい」

金にお辭儀

「安田さんは何うしてあんな大金儲けが出来、大金持になつたのでせう。種々安田さんのことを種々な方から伺ふのですが、よく腑に落ちないのですが……」

長吉青年は、敬服して居る安田善次郎を、伯父さんのやうに親しく安田さん安田さんと呼んで訊ねる。成程本當に致富を考へる眞面目な商人型の人には、安田は安田さんと、自分達の仲間の出世頭のやうに考へられる親しさを持つのであらう。考へて見ると安田は人間安田で、策士安田でもなければ政商安田でもない。負ふ子に教へられるで、純眞で摯眞な長吉青年の前で、今日の俺は少し

たじたじとして居る。長吉青年はそんなこととは知らず、誠實で無邪氣だ。

「本當は安田さんほどの位儲けたのでせう、どの位財産があつたのですかと訊く。」

「さう安田善次郎が大正十年、朝日某の兇刃に倒れ八十四歳を以て此の世を去つた時、捨賣にしても一億圓はあると云はれた、矢野文雄氏編纂の安田の傳記に依ると大正九年——安田が死んだ前年です。安田の財産は三億圓だと記されて居る。何れにしても腕一本、腰一本から一代に一億圓乃至二億圓の財産を作つたのは安田善次郎が日本一の記録保持者だと云へるだらう」

「三菱の岩崎彌太郎も随分遺したのでせう」

「彼も一代に巨富を成したものだ、安田とは性質が違ふ。明治十八年岩崎彌太郎が死んだ時、三菱の財産は二千萬圓だと云はれて居た。明治十八年の二千萬圓と、大正十年の一億圓或は二億圓とどちらが大きいかは金の價値、物の價値が違ふのだ、一寸比較することが出来ないが、岩崎は其儲けに對して種々な策があり、利權或は政商的經過があつた。然し安田はコツコツ純粹に實業家として儲け出しただから堅い意味で、そして稼ぎ出した意味で安田善次郎は日本一の金儲け頭だと云ふことが云へる譯です」

「私は頭もなければ、勿論學問もありません。だから岩崎のやうなことはしたくありません。安田さんのやうに合理的にお金を儲けたいのです。安田さんが好きで、安田さんのやうに成りたいと思ふのもそれです。安田さんは最初はどうして儲けたのでせうか」

「安田が本當に儲け出す源を拓いたのは丁度君位の年で、そして丁度君と同じ位、いやもつと資金としては少く境遇としても恵まれて居ない、人形町の鯉節屋開業時代からと云ふことが出来ます」

「人形町鯉節屋時代と申しますと……」

長吉青年は膝を進めて熱意の加つた瞳を尖らした。

「君も知つて居るでせう、安田は越中の人だ。越中の貧しい百姓の家に人となり、十九の時に僅か五十八錢を懐にして上京した。幾ら物價の安い時代でも五十八錢では悲しい。然し彼は五十八錢を懐にして勿論汽車のない時代だ、歩いて東京に來たのだ。てくてく食ふものも食はないやうにして四日間歩いて東京——まだ其頃は江戸と云つた時代です——に着いた時、今の金にして五十八錢の金が二十九錢餘つて居たと云ふから其の道中の模様も想像が出来るでせう。其頃は安田善次郎と云ふ名ではなかつた。彼は幼名の儘忠兵衛と云ふ名であつた。二十九錢を懐にしてぼつと江戸の真中に立つた忠兵衛はいきなり何處に雇はれるものないので湯屋の三助の下働きになつて先づ御飯

にだけはありついたので。然し忠兵衛は三助の修行に來たのではない。金儲けに上京したのだ。それで考へた——金儲けするには土地の事情、土地の地理をよく知らなければならぬと云ふので、紙風船などを町に流して賣つて歩くあの街頭おもちや屋になつたので、その間にも彼は心に誓つた二ヶ條は絶対に破らない。其の心願は決して反古にしないことに努力した。其の安田の——いや當時の忠兵衛の堅固な意志が遂にあの大安田になつた精神的方面だと云へます」

「それはどう云ふことですか」

「第一に虚言を以て他人を害しないこと、第二に如何なることがあつても身分不相應な生活をしないこと、即ち生活は収入の十分の八の範囲ですることと云ふことです」

「二割はきつと残して置くと云ふ方針ですね。成程二割を残して、暮しは収入の八割以下と云ふのですね」

長吉青年はひどく感心して居る。

「収入の一割貯金と云ふことはよく云はれるが、それでも言ふことは易しいが實行は困難です。それを二割貯蓄主義で最初から出發し、あの大富豪になつてもそれを改めなかつた安田は偉いでせう」

「私もこれから二割にします。一割違つた所で成程食ふものが食へないと云ふ譯ではありません腹

も八分目と云ひます。成程八割主義とはよい話を伺ひました」

何か思ひ當ることがあるのか、長吉青年は八割生活にひどく共鳴した。其處で俺は一寸語を變へて、

「それで君は、何で金儲けがしたい。金持になりたいのですか」

と訊いてみた。

「別に譯はありません。何しろ世の中は金ですから、私のやうに學問もなく智慧もない者は金持になつて金の力で偉くならなければ偉くなりません」

長吉青年は至極あつさり答へる。

「安田もさうでした。然し安田はもつと金の實際の力を知つて發奮したのです。何しろ安田が生れた頃の時代はまだ武士が威張つて居た時で、安田などの百姓は云ふに及ばず、町人も勿論、藩の高位にある武士が通ると土下座させられた時代だったが、其の平生は土下座させる武士の中でも肩で風を切つて居る勘定奉行などが一年に二度來る京阪の大富豪——藩に金融して居る商人が來ると自ら響應したり、物かに自分からそれらの商人を訪問するのを見て安田は、あああんなに威張つて居る武士さへ金の爲めには頭を下げる。金だ、金だ、偉くなるには金を持たなければならぬと感

じて發奮したのです。彼は其の動機に因つて五十八錢を懐にして金を儲け、金持になる爲めにはどんな勞苦も厭はない決心をして江戸に出たのです。

繁昌の秘訣

人生は試鍊です。殊に何かの目的を立ててそれに猛進しようとする者の爲めには一層其の試鍊が加へられます。そして其の試鍊に堪えたものだけが勝利者の榮冠を得ることが出来るのです。安田忠兵衛——彼の安田善次郎は擔ぎおもちや屋になつて其日の糧を稼ぎながら、江戸中のすべての地理を知り、江戸の風俗人情そして人の生活の實際を知つた。そして夜も決して漫然とは寝ない。晝の疲れも厭はずに、夜は夜で露店を出して一錢でも餘計に儲け、餘計に蓄へることに専心した。然し擔ぎ玩具や露店では儲けと云つても程度が分つて居る。彼はもつと儲かるがつもりした商賣を覚えなければならぬと考へた。其處で海苔問屋にかねて兩替屋をやつて居る大きな店の奉公口があつたのを幸に雇つて貰つた。二年間彼は熱心に勉強した。商人は商賣を覺えるのが勉強だ。彼は問屋筋の雇人が主人の眼を盗んでは雇人らしく遊ぶ時を惜んで勉強した。勤めること二年、商賣の道を覺える程、兩替や海苔などの問屋として大資本がなければ獨立出来ないことが分つたので、

今度は鯉節問屋に奉公替した。彼は實直に働くことは認められて居る。堅藏で商賣に熱心なのでこの店でも喜ばれた。然し彼は朋輩には好評でない。それは彼が甚しい節儉家であるからだ。然し彼は其志を伸べようとする目的の爲めに其多くもない手當を服装や持物や詰らない遊興に浪費する朋輩と一緒に浪費することは出来なかつた。一ケ年僅か三兩二分の給金をみんな蓄めても三兩二分だ。それを浪費したら借金が残るばかりだらう。忠兵衛はどんな惡評を受けようとも朋輩と一緒に浪費することはなかつた。彼の意志は強かつたのだ。奉公前後六年、愈々獨立する決心を起した彼が苦心して得た金が二十五兩。「君は、君の言葉に依つて想像すると今日六七千圓の金を持つて居るらしいが安田善次郎が愈々獨立して商賣を始めようとした時は天にも地にも二十五兩しかなかつた。年は二十六か七であつたらう」

「それが全財産ですか」

長吉青年は眼を丸くして訊く。

「さうです。苦心六年、漸く出來た二十五兩を資本にして人形町に間口二間奥行五間の家を借りて海苔、鯉節、兩替の商賣を始めたのです」

「私は最初の商賣が撞球場ですが、安田さんは鯉節屋さんですか」

長吉青年は安田になり切つて居る心持らしい。

「さうです鯉節屋です。鯉節屋を開いたのだが彼はただの鯉節屋ではない。資本は僅か二十五兩信用もさしてあると云ふ譯ではない。愈々獨立した安田が安田らしく發奮して大いに奮闘し安田王國の礎を築いたのには實に涙ぐましい努力があるのです。安田は人形町に店を開くと、先づ其の本業である海苔、鯉節の商賣に熱中した。それらの商品を賣つて居る商賣人として熱中したのでなく、それらの商品を買ふ人の立場、お客の立場になつて商賣に努力した。これは言ふは易く行ふは難いことで、安田の商賣の秘訣はそこにあつた。安田は買ふ人の身になつて商品を仕入れ其の商品の仕入れの爲めには身體の疲れを厭はず、東京中の問屋を廻つて良い物を安く仕入れて賣るのだから、客は良い物を安く買へたのだ。新店が人氣を得、客を得る爲めには何か客の喜ぶサービスがなければならぬ。安田は鯉節、海苔屋として今日の薄利多賣を標語にしたのですね。それが當つて、だから後には「人形町の安田で買つて来い」と云はれるやうになつた。商賣のこつを彼は知つて居たのです」

「店はさうなると繁昌しますね、流石は安田さんですね」

「いや簡單に感心して居てはいけない。其の頃の安田が偉かつたのは店を繁昌させたことではない。もつと彼はすば抜けた努力をして居る。其の努力があの大安田を作つたやうなものです。それを見落しては何にもなりません」

稼ぐコツ

「安田は海苔、鯉節屋の主人として、晝は店の客へのサービスに夢中であつたが、朝は又彼は兩替の商賣に努力したのです」

「朝と云ひますと……」

長吉青年が口を挟んだ。

「朝——誰でも朝は六時頃に起きるのが習慣だが、安田は獨立して一家の主人になると、朝は三時頃に起きたのです。三時頃に起きて錢兩替の商賣に努力したものです」

「朝の三時つて夜中ではありませんか」

長吉青年は眼を丸くした。

「さうです、夜中の三時です。交通機關が無かつた昔は、日本橋人形町から淺草に行くには二時間

はかかると思はなければならぬ。四谷、本郷、芝、麻布、皆なさうです。だから安田は其人がまだ寝て居る時間を利用し、それを自己のサーヴィスとして錢兩替として認められるやうになつたのです。昔兩替と云ふ商賣は錢兩替と本兩替と二つに分れて居て、本兩替と云ふのは廣い江戸に僅かに七軒、安田が擡頭した時で十軒しかなく、錢兩替は江戸中に六百四十軒からあつたものです。錢兩替と云ふのはどう云ふ商賣かと云ふと其の頃通貨の種類が非常に多かつた。金の方では小判、二分判、一分判、二朱判と云ふやうに分れて居り、銀の方では、一分銀二朱銀、一朱銀——これだけの通貨だ。補助貨幣として四文錢、一文錢などがあり、この補助貨幣を持つて行つて金と交換するのが錢兩替である。この會所があつてそこで金や銀の各々の相場が決るのである。この場合に依つても利得や損があり、一般との兩替での手数料としての利益もあるのが兩替屋で、安田は其の一般的な錢兩替を開業した。すると其思惑は美事に當つた。一日百五十兩位からの兩替で一兩に就き五文位の儲けがあるので、彼の財産はメキメキと殖えて行つた。然し其の錢兩替の商賣をするのに、彼はのんびりと店に座つて居たのではない。朝の三時に起きて同業を廻るのだ。錢兩替をする程の同業であるから貧しくはない、それだけのんびりしたものだ。安田が朝早く廻つて来て、居ながら必要な錢と金とを賣買し、相場の騰落を話してくれるので、ひどく便利がられ調法にされた、それ

で彼は二重の利得を得ることになるのだ。資本の薄いところを身體を使つて補ひ、人に喜ばれて彼は名を弘め、利益を得たのであつた」

「それでは安田さんは、朝の中、人の寝て居る中に一稼ぎしてしまつたのですね。偉いもんですねえ」

長吉青年が讚嘆する。

「それです。人が寝て居る中に稼ぐ其の肉體的の努力、商賣熱心——それが彼の金儲けの一方法でもあつたが、尙同じ商賣仲間に調法がられ便利がられ喜ばれて、然も儲けになつて居るところに着眼して、努力を惜まなかつたのが安田の偉いところだね」

「成程眼の着けどころですね。二十代の若い者ですから朝三時に起きると云ふのもそんなに苦痛ではありません。實際野球の練習などは少し熱心なのは其位の時間には起きて居ますからね」

「朝起きに三文の徳ありと云ふのは健康をも意味して居る金言だが、商賣をして喜ばれて儲けながらそれが一種の健康上の運動法にもなつて居るとすれば、安田は單に金を儲けたいだけでやつたことだが、正しく金を儲ける方法にはよいことが附隨して來ることの記録と云へる譯です」

「へえ……朝早く起きるから自然夜は早く寝る。無駄な費用も要らなければ馬鹿なことを仕出來す

ことも御座いませぬ、成程うまい方法ですな」

長吉青年は我事のやうに頻りに感心して居る。

「金儲けを汚いこと卑しいことのやうに云ふが、正しい金儲けの行爲は常に合理的で、其の個人を凡てによい方に導くのだから有難いですよ。徒らに金を儲けたがるのは警戒しなければならぬが、正しい金儲けは總ての人が服膺すべきことです。私が安田に感心して居るのは彼の金儲けは徹頭徹尾合理的であつたこと、そして彼はあの大安田王國を築いてもそれを私生活に奉仕しないで、金の正しい力の儘に奉仕して居たことです。君なども若くてこれから大いに儲けようとするのだから、安田に學ぶのなら其事をよく考へなければいけません」

長吉青年は深く肯いた。

目のつけ所

「大倉喜八郎も乾物屋を開いて居たことがあるさうですね」

ふいに話題を替へて長吉青年が訊ねた。

「さうです、大倉も其の獨立自營した最初は乾物屋でした」

「鰹節、海苔と云ふと、安田さんも云はばまあ乾物屋なのでせう。一代で身上を拵へた人が二人とも乾物屋から出發したと云ふのは面白いですね」

長吉青年は愉快な發見らしく笑つた。

「其處ですよ。——金儲けに考へなければならぬところは——」

「へえ、乾物屋が金儲けに大關係があるのですか」

慌てて長吉青年が不審らしく聞く。

「いや乾物屋と直接關係があるのではありません。何故安田、大倉など一代に謳はれるやうになつた大富豪が、其の獨立の出發點を先づ乾物屋と云ふ商賣にしたかと云ふことです。まだ其の頃互に知つて居る筈はない兩人が相談したかのやうに孰れも獨立自營の第一歩に何故乾物屋を選んだかと云ふことです」

「何故でせう」

「これは二人とも天成の金儲け人であつたことを證明して居ると云へる材料になるのです。安田も大倉も乾物屋が利得が多いから其の商賣を開始したと云ふのではない筈です。又奉公して得た商賣の知識が海苔鰹節など乾物屋に適當して居たからと云ふのでもない筈です。彼等は其の少い資本を

活用して努力さへすれば決して損害することがないと云ふ商賣に着目した筈です」

「乾物屋はきつと儲かる商賣ですか」

「いや現在では乾物屋——殊に鰹節、或は海苔を主體にした商賣が必ず儲かる商賣とは決定して居ない。然し安田や大倉がこれならと云つて獨立した時代には必ず儲かる商賣であつた。あの時代に於いては現代に於いてもまださうであるが、鰹節は毎日の食膳には必要缺くべからざるもので、そして貰つて調法な贈るに便利な品として、また鰹節のよいのを使ふことは生活風味として尊ばれて居た。海苔も亦同じく江戸人の生活必需品として三度の食事に不可缺のものやうに、或は背越しの金を持たないことを誇りとする江戸つ子の味覺極樂に價するものとして甚しく嗜好に投じて居た。然も孰れも消耗品である。食ふとそのままなくなるものである。一種の生活必需品——そして嗜好的に趣味的に食膳に必要とされるものが賣れない譯はない。賣れば商賣の原則として儲からない筈はない。そこへ着眼して賣れると云ふ原則を持つて商賣を始めることは商賣の要諦であるばかりでなく、小資本の人が儲ける爲めに始める商賣の原則でなければならぬ。金を儲けることを考へる人間がさういふ機微を察しないで、金を儲ける商賣、或は事業を始めることは盲目的冒險だ。現代は海苔や鰹節の時代ではない。乾物屋の時代ではない。だから若し安田、大倉がこれから儲け

出さうと考へてまづ商賣を始めるとして、決して乾物屋は始めないに違ひない……」

「それなら先生、何を始めるでせう」

「長吉青年は喰ひつくやうに聞いたものだ。俺は彼の顔を見返しながら云つた。

「これと云つて、例へばラヂオの機械屋を始めるとか化粧品屋を開くとか云ふことは出来ない。然し恐らく彼は江戸末期の彼の時代に、生活必需品に等しく、然も風格的に、嗜好的に、時代趣味的に鰹節や海苔が歡迎されるのに著目したやうに、その時代が——つまり現代及び現代人が何を欲して居るかに著目して自分の資本を損することのないばかりか、儲けを殖すと云ふ商賣を始めるであらう。商人は——商賣をしようとする初めは何よりもその商賣の有利さを検討し、よき目をそこに著けると云ふことが肝腎です。努力はそれからの問題です。第一は眼の問題です」

徹底的貯蓄

「大倉の話が出たからついでに話して見るが、彼等が同じ乾物屋をその獨立自營の第一歩として居ながら、現在の大倉王國と安田王國との差を何が作つたかを考へると面白いでせう」

「大倉は随分悪いことをしたのでありませんか」

「いや大倉は悪いことをした筈はない。悪いことをして男爵は頂けない筈です。悪いことをしたやうに云はれる性格の鋭さが安田王國と大倉王國との差或は異を生じたのだと云へます」

「持つて生れた性格の違いですか」

「さうです。乾物屋時代の兩人を見てもよく分る。大倉は乾物屋の店を開きながら利を殖すために買占や利鞘を取るやうな投機的行爲をし機を見ることに敏捷だ。すべて進んで戦ひ取ると云ふやうな方をやつた。安田はさうではない。着實に骨身を惜まず同じ身體を勞するにも信用を得るため、彼の正直と着實とを露骨にして儲けのために錢兩替をしても手堅く嘘を吐かない。或は収入八割主義で身をつめて儲けを増すと云ふ方針であつた。これは二人の性格がその商賣振りに現はれて居るのです」

「どつちがいいでせう」

「俄には優劣をつける譯にはいかない。人の性格だから——ただ若し安田に批難があればケチだと云ふ批難だけであるが、大倉は今君も云つたやうに悪いことをしたなどと云ふ風評さへ出る」

「ケチだと云はれても何でもありません。私もさう云はれます。然しケチだと私を蔑しながら私のところに金を借りに来る奴があります。ケチは悪いことでないから、私は安田さんがいいと思ひま

す」

安田系の長吉青年は妙に力説した。

「その心がけでよいだらう。そこで安田が儲け出したのは錢兩替で儲け出し、やがて本兩替をやれるやうに出世した商賣なのだ。金の貸借に依る利得と云ふ手堅い一本道の儲けであるのだが、それに就いて安田が自慢でする一つ話がある」

「安田さんの自慢話と云ふのはどんな事ですか」

「それは、彼が故郷を出る時から決して身分不相應な生活をすまい。奢つてはいけない。調子に乗つてはいけなさと決心して居ることは決して破らなかつた。危く破りさうになつて破らなかつたと云ふ話だ。安田は人形町の店で一日を二日に使つて商賣に勵み、漸く儲け出して千兩ばかりの資産を作り上げた。彼としてもほつと一息した。誰でも一萬圓貯めると樂だがと考へる——その頃の一萬圓、千兩出来たのだ。ほつとするのも無理はない。すると其の時日本橋小舟町に間口二間半土藏附の家が四百三十兩で賣り物に出た。店は繁昌する。金は出来た。手狭を感じてゐるところだから、これ幸と彼はその小舟町の家を買はうかと考へた。そして見に行くと愈々氣に入つた。買ひませうと口迄出たのを抑へて「待て暫し——」と考へた。精細に安田が自分の財産を目錄にして計算し

て見ると、其時千八百兩あつた。千八百兩の財産で四百三十兩の家を買ふと云ふことは彼が獨り自分で定め、出郷以來嚴守して居る實力の十分の一以上を使用してはいけなると云ふ収入八割主義を基礎にした彼の心の誓に反する。そこで自分があの小舟町の家を買ふには四千三百兩以上の身代にならなければならぬ。それまでは決してあの家は買へない——とさう考へ直すと、早く身代を四千三百兩以上にして氣に入つた家に入りたると云ふ希望に燃えて尙一層商買に努力したと云ふのだから安田が誰にも威張つて話す自慢話の一つだ」

「成程その意氣ですね」

長吉青年は自分の膝を撫でひどく感心して居る。

「これは今日の言葉で云へば資本を固定させないことで、安田の長所の一つです」

「それで、安田さんはどうしたのでせう」

「彼は、その四百三十兩の小舟町の家が欲しいので一層努力したさ、眼の前に何か欲しいと云ふ希望がぶら下つたので一層商買に熱心になる、努力する、奮闘する。それも安田式に焦らず、騒がず商買を勵んで行くのだから一層確かだ。それから二年の後に彼の財産は約五千兩になつた」

「千圓までは苦しい、それから一萬圓までは譯ないと云ひますが本當ですね」

「さうです。そこで安田は、小舟町の家はまだ賣れずに居るかと思つてみると、まだ賣れて居ない

……」

「ああよかつた！」

長吉青年は自分のことのやうに喜ぶ。

「そこで、四百三十兩の云値でその家を買つて移轉した。その家が後に小舟町にあつた安田銀行の本店になつたのです」

「ああ、あの小舟町の安田銀行のあれが……さうですか」

長吉青年は何か考へて居る。

「安田が小舟町の家を買ふために四十八匁づつ積立てて、それが四百三十兩になつたときに、漸く家を買つたのだなどと、悪口か褒めたのか分らないやうな噂をされるのも、あの家のことであるが、安田はそれほど辛抱強く、然もすべて數理的で、計算的で、徹底的に貯蓄主義者だつたのです」

一身を投出す

二年間をよく辛抱し、安心して自分の家にして小舟町に移轉した安田は、本兩替としてその幹事

に擧げられ、もう一通りの出世を遂げて、世にも認められるやうになつた。その慶應三年の冬暮末の慌しい空気が全國を包んで、殊に京都で王政復古の大詔が下されたので、江戸の町は騒然としたものであつた。浪人或は無頼漢が至るところに跋扈して軍用金を集めると稱して押借や強請をする白晝強盗が横行して居るやうな物騒な世の中であつた。

殊に、そのやうな物騒な輩は現金を奪ふのが目的であつたから、兩替屋などの現金を豊富にある家を狙つて襲ふのだ。牢屋格子のやうな嚴重な構でそれらを防備するのであるが、白晝刀を抜いて金を奪つて行く彼等の暴行には始末が悪かつた。それで多くの兩替屋は孰れも一時閉店して時代が落着き安心して商賣が出来るやうになるまで休業してしまつたのであつた。

然し、安田善次郎は、そんなことに恐れて商賣を休業するよな男ではなかつた。彼は平然として商賣をして居た。江戸中で僅か一軒か二軒の兩替屋開業だけに危険でもあるが、儲かることも儲かつた。彼は多くの人が休業を勧める時に何時でもかう答へたのであつた。

「みんな閉店休業する兩替屋の中で、私だけがかうやつて此の物騒な世の中に開業して居のはそれだけの備へがしてあるだらうと思ふのが當り前です。備への上してあると思ふところにはケチなゆすりや強盗は來るものではありません」

と。なるほど彼の度胸も素晴らしいものであつた。だがさう云つて居る中に或日、綿の絆纏を著た鳶の親方「かしら」らしい男が、小判一兩の兩替に來た。その兩替をしてくれと言はれた小判を受取つた善次郎はニヤリと笑つてその「かしら」の顔を見て何にも云はず小粒と兩替した。その「かしら」はそはそはして横つ跳到店を出て行つた。

それを見送つて善次郎は小僧をみんな集めて云つた。

「みんなこれを見ろ、この小判は贋物だ。偽造だよ。これをよく見て置いて、これからの心得になさう」

と、一廻り小判を手にとつて見させて、それからその小判の端を削ると、まさしく中は金ではなく贋物であつた。

「太い奴だ。今の奴の跡を尾けませうか」

と喚き立てるのを、善次郎は手を振つて引止めた。

「いや俺か承知でこの小判は買つたのだ。この贋物をお前達によく見せておいて、お前達が贋物を掴まされないやうに、實物教育の材料に俺は承知で騙されたのだ。俺の心持では一兩で贋小判を買つたつもりだから、騒いではいけない」

と、善次郎はにこやかに笑つた。その夜大戸を下して店を閉つた夜半、四人組の覆面した浪人風の男がどかどかと店の中に入つて来た。その先に立つて居る男は確かに晝間質小判を持つて来た男に脊格好動作が似て居る。小僧どもは震へ上つた。善次郎はそれを見てにつこり笑つて、

「よく御出で下さいました。必ず一度はお越しのことと考へて心待ちにお待中して居りました、さあどうぞお上り下さい」

と、丁寧な挨拶する。四人の浪人風の男は、

「いや上るには及ばぬ、そちにちと頼みがある。云はずと知つて居よう……」
と怒鳴るのを、

「いやお頼みとあれば猶更、奥に仕度がして御座います。まあお上り下さい」

と、善次郎は丁寧なこにこして答へる。浪人風の四人は顔見合せて黙つた。

「さあどうぞ、江戸中の兩替屋がすべて店を閉めた中で私一人がかうやつて夜まで開業して居る方には貴方のやうなお客様をおもてなしする準備も出来て居ります。粗末なものでも……」

善次郎がにやりにやりにやりとして應對するので、浪人風の四人組は氣味悪くなつたのか其儘捨ぜりふを残して歸つた。

あとで善次郎が小僧を集めて教訓した言葉がよい。「俺は武藝は少しも知らない。商人は商賣に魂を打込むものだ。だから商賣上——商賣に大切なお金のことに關しては常に決死の覺悟でなければならぬ。無頼の徒に脅されて居るやうでは本當の商賣は出来ない。商人は一兩の取引にも千兩の取引にも常に身命を抛げ出してかからねばならぬものだ」と云つたさうだが、實に名言ではないか。

嫁の貰ひ方

「安田と云ふ男は、妻君を買ふのにさへその致富の決心に叶ふかどうかを考へて貰つた。容貌や教育を主體にする人が多い世の中で、味はなければならぬことです」

「さうです。女房は女だと云ふだけではいけないものだと思つて居ます」

「全くです。安田が妻君を買つたのは人形町に店を持つて間もなくでしたが、其時の條件が振つて居る。まづ自分の出郷の際の心の誓、嘘言を言つて他人を害しないこと、生活八割主義を守ること、それから自分は大いに稼いで儲けなければならぬから、家庭の雑用に對しては雇婆の代りになつて働き店では自分の代理になつて働くこと、また着物はある時期までは絶対に絹物を着ないこと——

絹物を着ず綿服で済すことと云ふのには理由があつた。それは安田の妻君は刷毛屋の藤田と云ふ人の娘で房子と云ひ、實家は裕福であつたところから、其の時代の習慣に従つて、十二歳の時松下總守の奥向きの奉公に上り、轉じて長州の毛利侯の邸に長く奉公して居り、世の推移につれて毛利侯が舊領地に移轉されるについて暇を取り、家に歸つて居たのであつた。そして結婚談が出たのであつた。それで絹物生活をして居た房子に特にそんな條件をつけたのであつた。

安田は屋敷下りの房子の舉止、その心を見て是非結婚したいと考へた。然しさうであるからと云つて彼の志望を空にするやうでは困るので、欲い花嫁にもそんな條件をつけたのであつた。妻君の房子は其時二十一であつたが、よく安田の心情を買つて彼の條件をすべて承諾し、實によき内助の妻となつたのであつた。

「結婚には色々双方から良い條件をつけ合ふものですが、そんな難しい生活約束をつけたのは安田さん式ですね。私も大いに参考にします」

「君はまだ獨身ですか」

「ええ、近い中に一人貰はうと思つて居るのです。いいことを伺ひました。私はきつと安田さんに

なるつもりですから、私も何か憲法をこしらへて、妻君にうんと條件をつけるつもりです」

小安田を氣取る長吉青年は雄辯に答へるのだつた。

金の使い方

「苦と樂を二つに制つて算盤の、たまには遊べ二一天作——と云ふのは、安田善次郎の作歌だが如何にも彼らしい至言である。安田が小舟町で本兩替の店をたてて一人で頑張つて開業して居る中に維新となり、引續いて兩替業が明治の新政で自然と銀行業を開く氣運になつては、安田はもうとんとん拍子に金が金を生むやうになつたので我々の學ぶことも多いが、それは凡人安田が徒手空拳、如何に金を儲け出したかの苦心に比較すれば、大したものではない。それよりも安田の心がけ——即ち彼の實行振が徹底して居り、如何に彼は彼の立てた主義に忠實であつたかを學べば足りるのである。

彼は何よりも勤儉貯蓄を標語とした。この四字に要約されて居るのは前に述べた彼の出郷の際の心の誓ひと同じ意味である。だから彼は金の浪費を極端に排斥した。それに就いて、このやうな逸話がある。

後年の安田が旅行する時には小笠原と云ふ人が必ず随行して、その所用を足すことになつて居た。或時彼は矢張り安田の同伴をしてある田舎に行つた。そしてある一軒の掛茶屋に入つて休んだ。掛茶屋を一杯呑んで、扱て腰を上げて安田は、

「茶代を五錢置きなさい」

と小笠原に命令した。小笠原はその通りにした。それからまた二里ばかり歩いてある茶屋に腰かけた。

「矢張り茶代は五錢で宜しう御座いますね」

と小笠原が訊くと安田は、

「いや十錢置きなさい」

と云ふ命令なのでその通りにした。そして小笠原はにやりとした。安田のやうなお爺さんでも若い娘は可愛いと見える。十錢茶代を置いた茶屋には若い娘が居たからに違ひないと獨りぢめしてにやりと笑つたのだ。そして一つ此事で安田を冷かしてやらうと考へて、其の晩宿屋で夕食を食べた後の雑談に、

「今日、一軒の茶屋では五錢、娘の居た茶屋では十錢と、同じ掛茶一杯で、どうして金高が違ふの

で御座いますか」

と訊くと、安田は困つた奴だと云ふ顔をしながら、

「お前はまだ分らないのか、困つた奴だ。初めの茶店では土瓶に湯だけを注いで出したのだ。即ち一度二度使つた所謂出がらしだ。だから五錢でよい。後の茶屋は新しく茶を入れ替へて出した。だから十錢やつたのだ」

と答へたので小笠原はへへつと感心してしまつた。凡て物の價値を見て値を拂ふと云ふのが安田の主義で、金を疎にせず物をちやんと見ると云ふ點は我々の學ばなければならない事である。

世渡り
川柳
なるほど草紙

昭和十年十二月十四日 印刷
昭和十年十二月十八日 發行

版權所有



生きた富豪術

定價二十錢
(送料二錢)

著者 谷孫六

發行者 東京市麴町區有樂町二ノ二 森田益雄

印刷者 東京市京橋區銀座西六ノ二ノ五 平野留松

發行所 東京市麴町區有樂町二ノ二 森田書房

電話銀座四七一〇・四八二四番
振替東京四二五一二番

冊子即賣普及會

全國配給所 森田書房

京阪神特約店 大阪市北區堂島上二ノ二五 新正堂書店

大阪府豊中町櫻塚一〇六

中國・四國・九州 森田書房西部支店

配給所

〔特約〕 東京鐵道局公認 (鐵道弘濟會・鐵道保養會・鐵道投產會)

各驛賣吉・ホムスドン・街頭新聞タドン・有名書店にあり

妻
に
て
候

御
念
の
御
心
願

「……ねえ、お前！ お前と一緒に何年になるだろ？ お前は俺の鼻の側の黒子と同じやうに、一生俺と離れることが出来ないんだね——おう妻よ——妻だなんていやに改まつちまふやうだが、戸籍面には明かに妻と書いてある。奥さんの令夫人だの、家の奴だの女房だの、嫁だの、御内儀だの、お神さんだの、山の神だのつていろんな名前を持つて居るけれども、お前は矢張り妻なんだ。考へて見ると随分長い妻だな、お前がお嫁に来る時はどうだつたい。」若き日の「ブライド」なんてところも有つたね。尤も其頃は俺にだつて青春の血が漲つて居たから……

角かくし燦爛として下を向き



一生の中の花だな、お前の心臓は數へられない程動いて居たらしいね、我もの顔に斡旋して居る媒酌人俺はそれが頼もしく思へてならなかつた掌の中の玉を奪られてしまふやうな御兩親の顔がたゞく華やかな儀式に吞まれてしまつて嬉しいやうに、悲しいやうに、ワクワクして居るのが御氣の毒のやうにも思へたよ。

ホネムーン富士が見えたて口を切り

厚かましい方ではひけを取らない俺だが、



二人ツきりで汽車の中へ放り込まれてしまつたには面食つたね、お前も膝の上へ手を重ねたきり指の

先をモチ／＼見つめながら、一言も口を開いて呉れないんだもの、せめて……せめてだね窓の外でも見て居て呉れ、ば、何か話しかける材料が出来るんだが……と思つて居ると富士山だ、富士は日本の靈峰だね。

これで社で叱られてると妻知らず

無理もないさ、お前の目には俺より豪い奴



はないと思つて居るんだもの、此寒いのには御苦勞様な、そしてチャ／＼と歸つて来る此俺を頼もしく思ふだらう。重役に呼びつけられて、ともすればチョン切られさうな首を鷹揚に振つて来るこの俺を三ツ指ついて迎へて呉れるお前をいちらしく思ふよ、だつてこれでもお前には掛け替へのない夫なんだから……

遅くなることを女房たしかめる



俺は善意に解釋する、だがしかし嫌な氣持のする時もあるぜ
「お歸りは」と聞かれると、さも俺が浮氣者で、何處か遊んで來るところでもあるかのやうに、皮肉に聞える、そりや成る程晩飯の都合もあるだらうが何となく疑ぐられてるやうに聞えるんだこんな時には「晩のお仕度」はと聞いて貰ひたいね、それでも不可いかな、何しろお手柔かに願ひたいもんだ。

女房はまた金の事、金の事



そりや判つてるよ、家庭一切のきりもりをして居るんだもの、察するよししかし俺だつて金の生る木を持つて居るんぢやないし、考へて呉れたつて宜いぢやないか坊やの帽子？ 去年の中間に合して置きなよ、間に合はないつて？ チェツ親の心も知らないで、ぐんぐん大かくなりやがるオーバの月賦？ このあひだ渡したぢやないか、あれは先月のだつて？ 勝手にしやがれツ。

女房が留守で流しが椀だらけ



あんなにいろく云ひ置いて行かれたのに何處に何があるんだか、薩張り見當がつかないや、ヤツ鱈の子があるぞ、占め占め、先達の海鼠腸はどうしちまつたんだな、あッ微が生えて居らア、おや猪口がないぞ、この箸箱はどうして明けるんだな、へッ、奈良漬が切つてあるが誰だツ？ 月掛けの無盡ツ？ 俺には判らない、明日來いッ。

腹の立つ門を開けるも女房なり



濟まない、今日はね友達の奴がどうしても交際へてんだ、いやさ、特に月給日だからつて譯ぢやないよしかし敵にうしろを見せるのも強腹だと思つてね、たうとうおでん屋へ飛込んだ譯なんだ、すると二次會と云ふんだらう、おでん屋の二次會と云ふのも變だが、敵にうしろを……げツぶ、やい怒つてやがるな。怒るなよたまぢやないか。

豫め悟つて女房へ、ンなり

勝手にしろ、一ヶ月に一晩や二晩遅くなつ



たつて、そんな膨れ
ツつらをしなくとも
宜いぢやないか、男
には交際と云ふもの
があるんだ、何？

遊んで来たつて？馬鹿始く奴があるかい、見
つともない、よせよせ、それよりか茶でも入
れな、おい何とか返事をしないか、ようツ睨
みやがつたな。ようし、俺には俺の考へがあ
る、何？ そんな脅しには乗ないつて……

仲直り元の女房の聲になり

だからさ、俺があれ程懇々と云つて聞かし



たぢやないか、兎に
角嫌疑を晴らして呉
れ何の？アハツハツ
お前が臍線りをこし
らへてるつて？ 冗

談だよ怒るなく、良いぢやないか臍線りが出
来たつて、つまりは坊やのものになる位なも
んだ、理解して居るよ、小使帳の大根の値が
高いつて、あれは言葉の絃だ……馬鹿ツ、
そんなにムキになるなよ。

ある日フト妻を美人と見たりけり

よおう、素敵素敵、いやひやかすんぢやな



い、實際だ、髪たまの工
合が大へん宜いよ、
髪たまをもう少しふくら
ました、前髪まがみの調子
はそれで良い、後ろ

を向いて御覽ごらん、さうだな帯の恰好かっこうはと？ も
う少し下の方を締め上げて、端はしを心持ち斜に
してごらん、それでよし、それぢや出掛けや
う、三越みやこから何處どこへ廻まはるんだつて、そんなに
買物は御免ごめんだな。

理想から理想へ妻も俺も老け

あの時代から比べると二人も年を取たな、



けれども一向いっさうにどうも
ならんぢやないか、そ
れで宜いのかも知れな
い、もうかうなれば子
供達の成長せいちょうを待つより
ないね、しかし希望きぼうと

云ふやつは、案外まさか年を早く數へるものだね、
お前まへもいとお母さん振まになつたよ。何？俺も
いゝ親爺おやぢになつたつて、當りあたりまへだお前がお
婆おばさんになれば俺もお爺さんおやさんにんなるだもの

金
の
世
の
中

……さて諸君……

敢て諸君と呼びかけねばならぬ程、多数な
る金の欲しい諸君、寔に金は欲しいものであ
る。金さへあれば別荘も出来、男爵にもなれ
る世の中である。されば鶴の目鷹の目、金儲
けに苦心する浅間しき、これを丁寧な言葉で
は生存競争と云ふ。金なる哉、金なる哉でな
くて何だ。……然るに諸君……

何と得難き金ではあるよ、一ヶ月三萬圓の
月給取もあれば、二十五圓で毎日九時間の勞
働を敢てする小使もある。一分間に何萬圓の
商賣をする實業家もあれば、一日一圓五十錢
の賣上げに甘んじる駄菓子屋もある。奇なる
哉金の世の中……

使つても溜めても金は面白し



どうだいお隣の禿頭は！ 此さき何年生き
られる年でもないのに、ケチケチしてやがる
先達などは家の臺所
を覗いてさ捨てるん
ならその鯉の頭を呉
れツてんだ。鯉の頭
に食ふところがある
かつたら糠味噌へ漬けて出しにするんだとさ
地所も家作もしこたま有る癖によ、ますます
しみつたれて来るぜ。しみつたれには何でも
金に見えると見える。

ガヤ／＼と惚れられて居る親の金



それに引換へて、悴の方が捌けて居るから
五分だ、逆ラツパのツボンで、海老茶のネク
タイ、オールバックの
モダンボーイと云ふ奴
だネ、取巻の藝妓に三
越へ引張り出されて、
あれもよし、これもよ
しと買物をさせられた揚句に、カフェーへ連
れ込まれてさ、カクテルか何かで有頂天にな
り、銀座の眞ん中でおけさを踊つてるんだか
らな。

江戸ツ子の生れ損ひ金を溜め



あの調子で行くと、親父の目の黒いうちだ
けだな。第一友達がよくないや、出入の頭の
悴と来て居るだらう、あの
頭と來たら呑み助の怠け者
で宵越しの錢は江戸ツ子の
耻だと云ふ舊式な傳法なん
だからな、まア宜いさ、金
は天下の廻りもの、有る奴がパツパと使つて
呉れなくつちや、我々の方がたまらないや。
その使ふやつがみんな俺のふところへ入るん
だと宜いかな……

貯金帳茲に年古る五十銭



いつの間にか五十銭残りだ、その五十銭だつて下げて呉れ、ば咽喉から手が出るんだが御規則とあつては已むを得ずさ、まあ好いや無盡でも當つたら返して置かうと相談だけは決めて置くもの、その頃になるとまた後が生れたりして、使ひ道の方で金の溜まるのが待ち切れないんだから堪らない。ホイ、家賃が一つ溜まつて居たな、この次のボーナスまで順送りか……

儲けづく乗り出す方は資本が無し



樺太の山林拂下げだとか、〇〇商店の約手だとか、賣家の周旋だとか、一つ旨く行けば五年も寝て居て、食べられるやうな、仕事を、大切さうに折靴の中へ入れて持廻つて居るが、彼奴等の手へ渡つて来るまでには、頼む方だつてさんぐやつて見た揚句の事だ。それでもこれさへ旨く行けばつて、東京會館へ席を作つたり、待合へ連れて行つたりするが一向芽が吹かんやうだ。

五圓札崩しただけでフット消え



全くあつけないよ、先達の日曜なんか天気はよし、久し振りだと云ふので、子供をつれて金のかからない遊山をしてやらうと思ひ動物園へ行つたものさ、入口でお剩錢を取つただけのことだと思つて居ると、家へ歸つて見りやもう無いんだ。考へて見ると圓タクと支那料理で溶けちやつてるぢやないか。もつとも生ビールを二杯呑んだがね……

大金を拾つた記事をモ一度見



何しろ一攫千金病にかゝつて居るんだからたまらないや、これが一つ當れば、ナツシユを買つて、郊外へ住宅を建築する。銀座へ事務所を置いて帝國何か會社を建てる。夢のやうな熱に浮かされて懐ろはピー〜風車、そこらに一萬圓位落ことしてありやアしないかと、丸い目を三角にして歩く手輩だ。へん淺間しい奴らだ。尤も俺だつてそんな氣もしないぢやないがネ。

成金を隣に持つて腹が立ち

漸く借金取のやつを追拂つてしまつたやうなもの、扱て明日をどうする。それに引か



へて隣の奴はどうしたもんだ。朝つばらから蓄音機だ。それで午飯はお揃ひで出掛ける、晩は芝居だと云ふ騒ぎ、稀には人の身になつても見ることが宜い、聞けば銀行の利息であんな贅澤をして居ると云ふ話なんだが、チエツ、いまいまいしくもなるぢやないか。

銀行であれが俺のならと思ひ

百圓札を井桁に封じた束が、山のやうに積んであるなんざア、どう見たつて素晴らしい景



氣だ、みんなでなくとも宜いや、せめて一把か二把でもと思ふことがあるよ、あんなに一體、どこかどいつが預けやがつたんだらう、有るところには有るもんだと感心するより、ゾツとする氣持と欲しい氣持で、頭の前から足の先まで熱くなつちまふ。

酔て如件